

# 淡江日本論叢

## 第36輯

### 【論文】

- 山下昭洋 台北三市街における内地人商業店舗の立地  
—台湾新報 1896 年からの分析— 1
- 沈 美雪 諏訪素濤編俳誌『熱』と本島人俳句作家  
—大正前期の台湾俳壇と日本俳壇との交流をめぐって  
「愛國之志士」蔡伯毅之塑造— 23
- 富田 哲 —《嚶鳴集》的人物敘述— 49
- 落合由治 比較文化研究としてのマルチモーダル表現様式の考察  
—印刷、平面メディアを中心に— 75

### 【研究・実践報告】

- 羅曉勤 台湾初中級日本語作文クラスにおける作文指導の再考  
—「自己PR」をテーマとした授業活動へのTAE導入— 101

### 【後記】

- 落合由治 『淡江日本論叢』36号編集後記 127
- 

2017年12月

淡江大學外國語文學院日本語文學系

# 淡江日本論叢

第 36 輯

2017 年 12 月

淡江大學外國語文學院日本語文學系

# 台北三市街內地人商業店舖的分布位置 -以 1896 年台灣新報來做分析-

山下昭洋

靜宜大學日本語文學系助理教授

立正大學環境科學科客員研究員

## 摘要

本論文是關於日本統治下台北三市街的內地人居民形成過程之地理學研究的一部分。本論文特別以 1896 年的“台灣新報”作為分析資料來研究內地人商業店舖的分布位置。

本論文分析從 1896 年 6 月“台灣新報”創刊到 1896 年 12 月底大約 6 個月份關於內地人商業店舖的報導。結果判斷①1896 年 9 月 1 日「在台北的內地人」②1896 年 10 月 28 日「台北戶數及營業種別調查第一」③1896 年 10 月 31 日「台北戶數及營業種別調查第二」，④1896 年 11 月 3 日的「台北戶數及營業種別調查第三」⑤1896 年 11 月 6 日「台北戶口及營業種別第四」⑥1896 年 12 月 5 日「艋舺警察分署內營業」的 6 篇報導為可信資料。

分析結果可看出台灣總督府改為民政後之內地人急速增加時期，台北三市街的內地人店舖街別分布情形與各種行業（622 戶）的詳細的營業業種。特別是花柳界（特種行業）關係行業，可以確定的是該刊物為艋舺貸座敷指定區域成立不久之後的報紙刊物，也可以證明從大稻埕六館街二丁目到稻新街與新起街，當時有經營貸座敷。

關鍵字：台北三市街 台灣新報 內地人 商業店舖 花柳界

# **Location of Japanese Shops in "Taihoku" Three Districts: Analysis from "Taiwan-Simpo" 1896**

Yamashita Akihiro

Assistant professor, Providence University, Taiwan

Visiting researcher, Rissho University, Japan

## **Abstract**

This paper is part of the geographical study, researching the formation process of Japanese people living in "Taihoku" three districts in the age under the rule of Japan. Based on "Taiwan-Shimpo" in 1896, the study analyzed the location of the Japanese retail stores.

Approximately 6 months of reports on retail stores in 1896 were collected, from the time "Taiwan-Shimpo" started in June to the end of December. The following six reports were found true and reliable: 1. "Locals in Taihoku" on September 1, 1896; 2. "First Census of Household and Trade Category in Taihoku" on October 28, 1896; 3. "Second Census of Household and Trade Category" on October 31, 1896; 4. "Third Census of Household and Trade Category" on November 3, 1896; 5. "Fourth Census of Household and Trade Category" on November 6, 1896. 6. "Banka Police Station" on December 5, 1896.

The findings show the rapid increase of locals in "Taihoku" after Taiwanese Governor General Office was transformed into civil administration. This was also related to the distribution of local retail stores and business categories (622), especially related business about the world of the geisha. "Taiwan-Shimpo" was verified to start after the "Banka" brothels district. Also brothels were open in "Daitoutei", from "Rokukan" Street Nichoume to "Toushin" Street and "Shinki" Street.

Keywords: "Taihoku" three districts, Taiwan-Shimpo, Japanese People, Commercial shops, World of the Geisha

# 台北三市街における内地人商業店舗の立地 —台湾新報 1896 年からの分析—

山下昭洋

静宜大学日本語文学系助理教授

立正大学環境科学科客員研究員

## 要旨

本論文は、日本統治下における台北三市街の内地人居住地形成過程の地理学的研究の一環である。本論文では、特に 1896 年の「台湾新報」を資料として内地人商業店舗の立地の分析と研究をおこなった。

今回の調査は「台湾新報」が創刊された 1896 年 6 月から 1896 年 12 月末日までの約 6 ヶ月間の内地人商業店舗に関する記事を分析した。この結果、①1896 年 9 月 1 日付「台北に於ける内地人」、②1896 年 10 月 28 日付「台北戸数及営業種別調査第一」、③1896 年 10 月 31 日付「台北戸数及営業種別調査第二」、④1896 年 11 月 3 日付「台北戸数及営業種別調査第三」、⑤1896 年 11 月 6 日付「台北戸口及営業種別第四」⑥1896 年 12 月 5 日付「艋舺警察分署管内の営業」の 6 記事が有用であると判断した。

これらの分析の結果、台湾総督府民政移行直後の一般内地人の急増期における台北三市街の内地人店舗の街別分布と、これらの業種の全体像(営業 622 戸)とその詳細な営業業種等を明らかにできた。特に、花柳業界関係では艋舺貸座敷営業地域の設定から間もなくの新聞掲載であり、大稻埕六館街二丁目から稻新街にかけての通りや、新起街にもこの時期には貸座敷の営業が確認できた。

キーワード：台北三市街 台湾新報 内地人 商業店舗 花柳界

# 台北三市街における内地人商業店舗の立地 —台湾新報 1896 年からの分析—

山下昭洋

静宜大学日本語文学系助理教授

正大学環境科学科客員研究員

## 1. はじめに

台湾の日本統治時代における都市人口分布の研究は陳正祥(1997)『台湾的人口』<sup>1</sup>に詳しい。台北都市計画の研究では黄武達(1997)の『台北市之近代都市計画』<sup>2</sup>が詳しい。しかし、日本統治時代台湾の日本人(内地人)に焦点をあてた研究はこれまで無かった。そこで筆者は、日本統治時代の明治期の台北における内地人商業店舗の立地に焦点を当て研究をおこなってきた。

著者の従来主な研究を挙げると、「日本台湾統治草創期の台北における内地人居住地の形成過程」(2009)では、台湾総督府の軍政期から民政期への移行段階の内地人商業店舗の立地の過程を時系列的に分析した<sup>3</sup>。「日本台湾統治草創期における台北花柳界の社会空間の変遷」(2011)では、貸座敷や飲食店の分布と立地と芸娼妓の分布を貸座敷営業区域の変遷を通して調査分析をおこなった<sup>4</sup>。

本論文は「日本統治下における台北三市街の内地人居住地に関する地理学的研究」の一環である。

本論文の研究目的は、1896年の「台湾新報」<sup>5</sup>に掲載された台北

<sup>1</sup> 陳正祥(1997)『台湾的人口』南天書局、台北市

<sup>2</sup> 黄武達(1997)『日治時代(1895~1945)台北市之近代都市計画』台湾都市史研究室、台北縣板橋市

<sup>3</sup> 山下昭洋(2009)「日本台湾統治草創期の台北における内地人居住地の形成過程」『2009年日本地理学会発表要旨集』社団法人日本地理学会、東京都 p. 141

<sup>4</sup> 山下昭洋(2011)「日本台湾統治草創期における台北花柳界の社会空間」『生活・言語文化国際交流研究会研究論文集』熊日出版、熊本市 pp. 173-197

<sup>5</sup> 「台湾新報」は1896年5月に発行された新聞で、当初は漢文で書かれていた。1898年5月に「台湾日報」と合併し「台湾日日新報」となる。

三市街（台北城内・艋舺・大稻埕）の内地人商業店舗（本島人を含む）の立地に関する記事による分析と、これまでの筆者の研究で明らかにしてきた内地人営業店舗の立地及び分布の詳細とを比較分析し、内地人営業店舗立地の形成過程の研究精度を向上させることである。

研究対象地域として、本論文では台北三市街の内の台北城内・艋舺・大稻埕の3地区を取り上げる。

## 2. 言葉の定義と資料の精査

本論文では台湾割譲以前（1895）に日本国内（内地）に本籍を持つ日本人を「内地人」（北海道・沖縄を含む）と称することとする。これに対して、日本統治時代以前から台湾に在住民を「本島人」（漢系移民・先住民）と称することとする。また、「台北三市街」とは当時の台北を指した俗称であり、大きく台北城内・艋舺・大稻埕の三つの地区からなっており、それぞれの地区には街が密集していた。1920年の台湾総督府地方官官制改正時に「台北市」の中核をなすこととなった市街地を指している。

本論文の研究時期は1896年6月から同年12月までとした。これは、台湾総督府地方官管轄の三県一庁時代（1896年4月～1897年6月）となっている（図1-2）。研究対象地域は、当時の台北県大加蚋堡内の台北三市街である<sup>6</sup>。当時の台北三市街の3地区には、合計101の街が集中していた。その内訳は、台北城内に10街、艋舺に45街、大稻埕46街となっていた（図1）。

---

<sup>6</sup> 1896年時の地方官の行政管轄単位は台湾総督府が定めた県・庁の下に清朝時代の堡里街庄制が残っていた。台北三市街は台北庁下の大加蚋堡内に位置していた。台北三市街とは当時の通称であり、大加蚋堡内の街の集中していた地区を三つに分け「台北城内」・「艋舺」・「大稻埕」と称し、この三地区を総じて台北三市街と称していた。1920年に地方官官制改正がなされ台北市が誕生するが、その際に台北市の中核となったのがこの台北三市街である



図1-2台北三市街位置図

(台北城内以外は地区境界は不明)

図 1 : 1896年の台北三市街図

(注) 台湾総督府製図部作 (1895年8月) 「4000分の一台北及大稻埕艋舺略図」  
 岡田豊吉編 (1898年1月) 「台北市街全図」  
 陸地送料部 (1897) 「台湾仮製1:200,000図」を基に山下昭洋作成

また、本論文で使用した地図は、台湾総督府製図部作「4000分



の「台北及大稻埕艋舺略図」で、1895年8月10日測量、1895年12月製と、岡田豊吉編「臺北市街全圖」1898年1月発行のものを使用している。

用いた資料は「台湾新報」の記事であり、これは後の「台湾日日新報」である。「台湾新報」は1896年5月に創刊され、創設者は鹿児島県出身の山下秀実(1847-1930)である。山下は元大阪府警警部長で、1890年の第一次帝国議会の頃に「大阪雷鳴新聞」を創設している。その後、台湾割譲にあたり、台湾で新聞社を創設することを企図し渡台している。この時期の「台湾新報」の主筆は田川大吉郎(1869-1947)であり、田川は後に衆議院議員となっている。同時期の台湾の新聞には「台湾日報」があり、1897年5月に河村隆実(1864-没年不詳)により創刊された。その後、1898年5月に両紙は守屋善兵衛(1866-1930)によって統合され「台湾日日新報」<sup>7</sup>として創刊された<sup>8</sup>。

このような経緯を経て発行されるに至った「台湾新報」は、当時の台湾総督府の「府報」としての役も担っていたため、特に人口調査や店舗調査の記録に関しては信憑性のある資料である。

### 3. 1896年の台北三市街の状況

以上を踏まえた上で、1896年ごろの台湾を取り巻く状況と台北三市街の状況を年表にし、以下にまとめる。

1894年7月25日、日清戦争が勃発する。

1895年4月17日、日清講和条約(下関条約)が調印され、清国から日本への台湾割譲が決まる。

5月10日、樺山資紀(1837-1922)が初代台湾総督に任命される。

---

<sup>7</sup> 「台湾日日新報」は1898年5月に「台湾新報」と「台湾日報」が合併して、刊行された新聞である。1944年12月18日(392号)の新聞までが現存する。

<sup>8</sup> 「台湾新報」の創刊の経緯は李佩蓉(2014)の「日本統治時代初期の台湾における漢字新聞の研究-『漢文 台湾日日新報』(1905)の創刊経緯とその背景を中心に」<sup>8</sup>を参照されたい。

5月25日、台湾在住の清朝住民が「台湾民主国」の独立宣言をする。この後、台湾巡撫の唐景崧（1841-1903）が総統に、劉永福（1837-1917）を大將軍として武力抵抗をおこなった。

5月29日、台湾北東部の澳底に日本軍が上陸を開始する。

6月7日、日本軍、台北城に入城する。

6月9日、台北県が開庁される。

6月17日、台湾総督府は始政式を挙行政した。

8月6日、台湾民主国側の武力抵抗が激しくなり、台湾総督府は軍政を施行することとなった。これにより一般内地人の渡台が禁止されることとなった。

11月18日、樺山総督は台湾平定を大本營に報告した。

12月31日～1896年1月3日、台北三市街一帯で本島人武装勢力が蜂起する。

1896年3月31日、台湾総督府が軍政から民政へ移行する。これにより一般内地人への自由渡航が許可されることになった。

6月2日、桂太郎（1848-1913）が第二代台湾総督に任命される。

6月8日、貸座敷並娼妓取締規則が發布され、同日、艋舺貸座敷指定地域設置された。

6月17日、「台湾新報」が創刊される。

10月14日、乃木希典（1849-1912）が第三代台湾総督に任命される。

以上のように、この1896年は台湾総督府が軍政から民政に移行した直後の時期で、一般内地人が急遽として台湾へ渡台開始した時期であった。

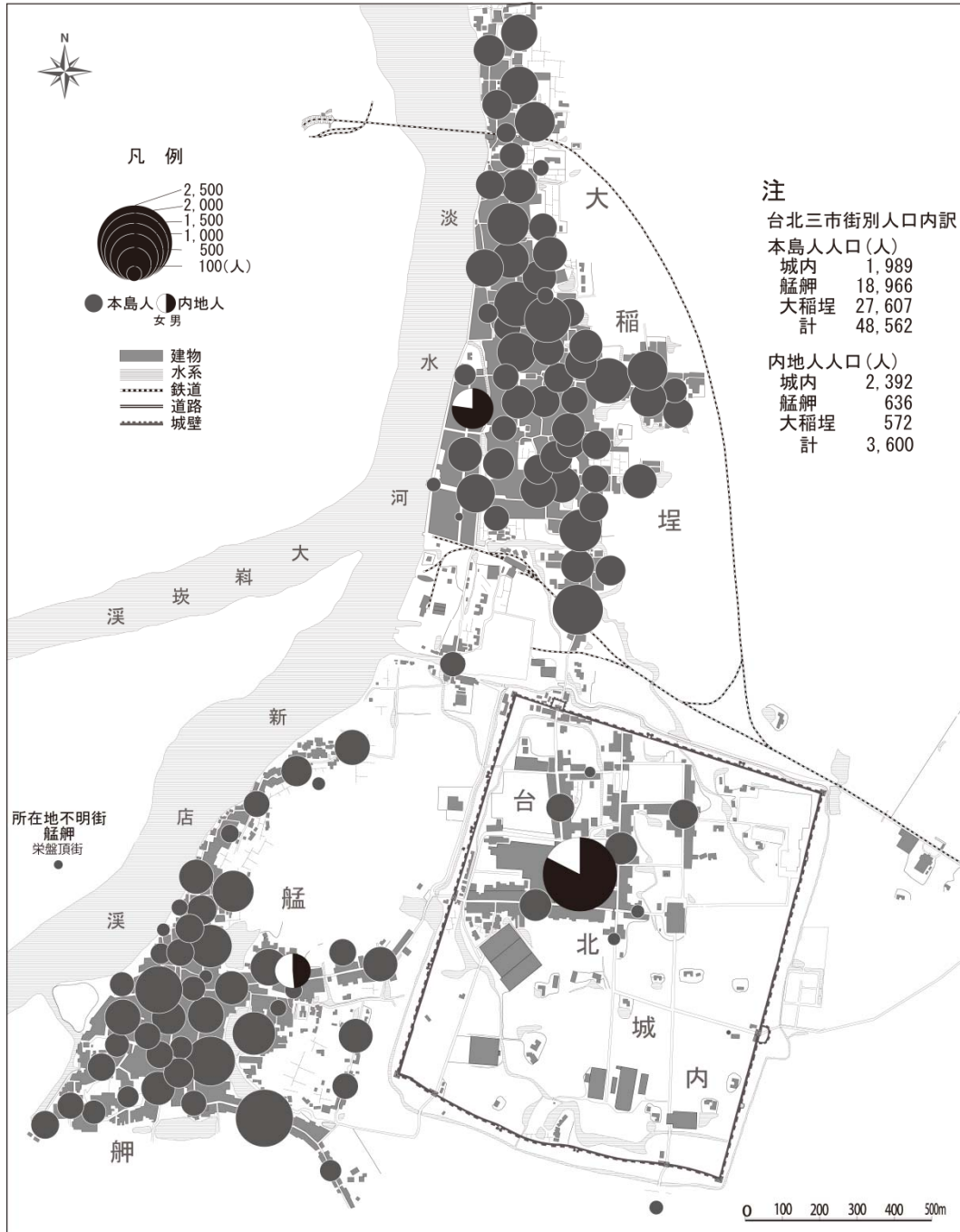


図 2: 1896年の台北三市街の地区別内地人分布および街別本島人分布図

(注) 『台湾事情一斑』を基に山下昭洋作成

同時期の台北三市街の内地人の概況が、台湾事務局編纂(1898年)

の『台湾事情一斑』<sup>9</sup>に記載されている。図2中に表にして表しているが、詳細をここでまとめてみると、1996年8月8日現在の台北三市街の総人口は52,162人となっている。その内、内地人が3,600人（官吏・兵卒・軍夫・吏員等を含まず）で、本島人が48,562人となっている<sup>10</sup>。この『台湾事情一斑』に出てくる内地人人口3,600人の数字は、本論文の調査資料である「台湾新報」の1896年9月1日付第三面「台北に於ける内地人」に掲載されていた数字と一致している。『台湾事情一斑』では本島人の人口は同年6月30日現在で調査されている。

『台湾事情一斑』に掲載されている台北三市街の3地区別の人口内訳は、台北城内人口の総計が4,381人である。内地人と本島人の内訳は、内地人2,392人、本島人1,898人となっている。台北城内が台北三市街の3地区中で内地人が最も多く居住している地区である。逆に本島人の1,989人は3地区中最も少ない地区である。

艋舺の人口の総計は19,602人で、内地人636人、本島人18,966人となっている。

大稻埕の人口は3地区中最も多く、総計28,179人である。内地人の居住が最も少なく572人である。逆に本島人は最も多い27,607人となっている。

これまでの筆者による内地人商業店舗立地研究では、『始政五十年台湾草創史』<sup>11</sup>『台湾開発誌』<sup>12</sup>『興味の台湾史話』<sup>13</sup>『台湾裏面史』<sup>14</sup>を基に、当時の店名や業種、立地場所等の特定し、これらの分布を明らかにした。

ここで、本論文における内地人商業店舗の分類方法を説明する。

---

<sup>9</sup> 台湾事務局編纂（1898）『台湾事情一斑』台湾事務局、東京市

<sup>10</sup> 前掲書『台湾事情一斑』pp.181-198

<sup>11</sup> 緒方武蔵編著（1944）『始政五十年台湾草創史』新高堂書店、台北市

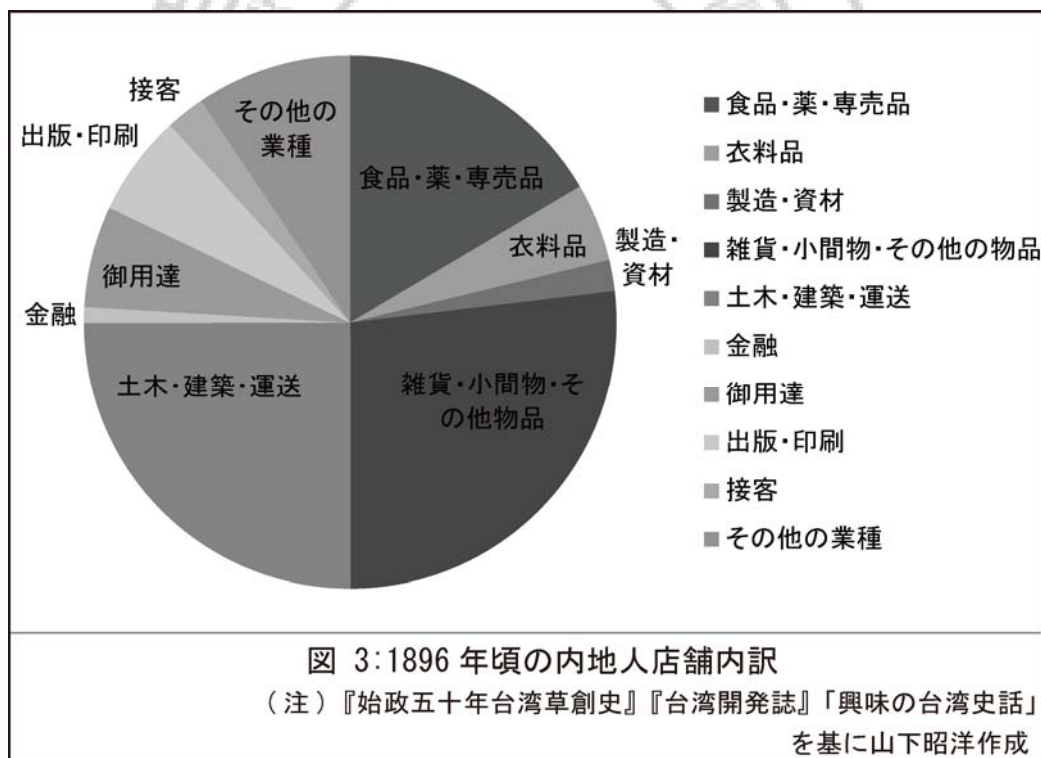
<sup>12</sup> 古川松舟・小林小太郎共著（1915）『蕃界平定紀念 台湾開発誌』小林小太郎、台北市

<sup>13</sup> 井出季和太編（1935）『興味の台湾史話』萬報社、台北市

<sup>14</sup> 大園市蔵（1936）『台湾裏面史』日本植民地批判社、台北市

筆者がこれまで行ってきた研究結果と比較するために同様の分類方法で分析した。この分類方法は台北市役所（1933～1943）発行の『台北商工人名録』<sup>15</sup>を基準としている。1. 食品・薬・専売品、2. 衣料品、3. 製造・資材、4. 雑貨・小間物・その他の物品、5. 土木・建築・運送、6. 金融、7. 御用達、8. 出版・印刷、9. 接客、10. その他の業種の10種である。

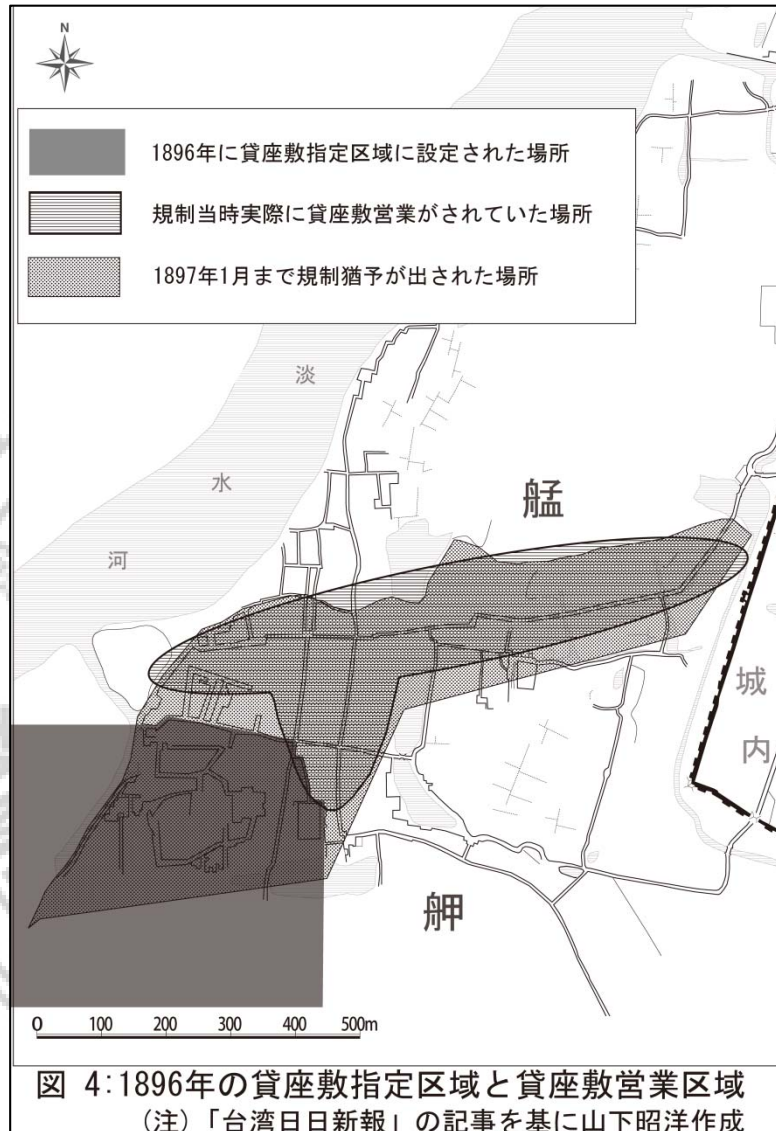
その結果、軍政時代から1896年頃までの台北三市街内地人商業店舗数は延数で212戸であり、これを100%とする内訳は、多い順に雑貨・小間物・その他の物品（26.9%）、土木・建築・運送（25.0%）、食品・薬・専売品（16.5%）となっていた。この三業種で全体の68.4%を占めていたことが明らかとなっていた。



<sup>15</sup> 「台北商工人名録」は台北市勸業課が編纂した商工人名録で、昭和期の1933年版から1934、1935、1940、1943年版が存在する。著者は最終的に昭和の台北市商業店舗の立地に合わせる目的で、この資料を基準に項目を分類している。

次に、1898年頃までの花柳界について整理する。1895年8月6日から1896年3月末の間は、台湾全土に軍政が布かれて、男性の軍属(軍夫)を除き渡台は禁止であった。このため、民政に移行し、渡台の自由が認められると、それまでの男性偏重社会の歪から、内地から多数の芸娼妓が移入した。筆者の研究でも、1896年3月から8月ごろには特に台北三市街内

に、芸娼妓を抱える飲食店や貸座敷が乱立し始めたことを明らかにした<sup>16</sup>。そこで、1896年6月8日に台北県は「貸座敷並娼妓取締規則」を發布し、艋舺に貸座敷指定地域を設置することとなったのである。



<sup>16</sup> 前掲書「日本台湾統治草創期における台北花柳界の社会空間」『生活・言語文化国際交流研究会研究論文集』pp. 173-197

以上のように、台北三市街における内地人商業店舗の立地の展開について整理していた。しかし、これらの研究における調査資料には、回顧録として書かれた文献が多く、また店舗の立地などについては同一時期に調査されたものではなかったり、当時の住民の記憶に残っている有名店や、特別な事件があった店のみが記載されている可能性もあった。そこで、本論文では、これまでの研究結果と「台湾新報」に掲載された記事と資料を比較分析し、これまでの研究結果の精度を上げ、内容的検証を行うこととした。

#### 4. 1896年の「台湾新報」を資料とした内地人商業店舗の立地

今回の調査では「台湾新報」が創刊された1896年6月17日から1896年12月31日までの約6ヶ月間の内地人商業店舗に関する記事を分析した。この結果、①1896年9月1日付第三面「台北に於ける内地人」、②1896年10月28日付第三面「台北戸数及営業種別調査第一」、③1896年10月31日付第三面「台北戸数及営業種別調査第二」、④1896年11月3日付第三面「台北戸数及営業種別調査第三」、⑤1896年11月6日付第三面「台北戸口及営業種別第四」⑥1896年12月5日付第三面「艋舺警察分署管内の営業」の6記事が本研究で有用であると判断した。この内、①は台北三市街全体の内地人の業種別内訳が掲載されている。②～⑤は「台北戸数及営業種別調査」の続き物で、艋舺と大稻埕の内地人商業店舗の業種と立地場所が掲載されている<sup>17</sup>。⑥は艋舺における花柳業の店舗の立地が掲載されている。

これらの6記事を基にして1896年の台北三市街の内地人商業店舗の立地を復元し解明していくこととする。

##### 4.1①1896年9月1日付第三面「台北に於ける内地人」に関する分

---

<sup>17</sup> ただし、⑤の記事のテーマは続き物であるが「台北戸口及営業種別」とテーマに変更が見られる。

析

寄留内地人営業別戸数表		寄留内地人人口	
業種	戸数	男	女
雜貨	143	312	285
小間物	132	285	265
その他の物品	163	363	330
飲食	107	233	215
娯楽	12	25	20
その他	622	1340	1260
合計	622	3600	3400

台北に於ける内地人 8月8日調査 寄留内地人営業別戸数表

図 5：「台湾新報」1896年9月1日付「台湾に於ける内地人」抜粋記事

「台北に於ける内地人」では、8月8日調べの台北三市街全体の寄留内地人営業別戸数表が掲載され、この営業種目は59種、営業戸数は622戸、寄留内地人人口は3,600人となっている。また記事には業種の戸数と人数と性別が掲載されている（図5参照）。

この記事からわかるように当時の台北三市街では、内地人はすでに生活に必要な多種の業種が開業していたことがわかる。特に従来の研究では出てこなかったソップ製造（スープ製造）・鍼灸師・芸人なども見られた。

筆者のこれまでの研究で用いた資料での内地人商業店舗数は212戸であったのが、「台湾新報」の資料では約3倍の622戸となった。この構成比率は、接客が233戸で全体の37.5%と最も多かった。その接客の構成内容を見てみると料理店が107戸で最も多く、接客中の45.9%を占めていた。これは料理店だけで全業種の17.2%を占めていることになる。

接客に次いで多かったのが、雑貨・小間物・その他の物品で26.2%（163戸）となっていた。この雑貨・小間物・その他の物品の中でも雑貨店が最も多くを占めており143戸となっていた。これは雑貨・小間物・その他の物品中の87.7%を占めていたことになる。この記事で、最も多かったのが雑貨店で、これだけで全体の26.2%を占めていた（図6参照）。



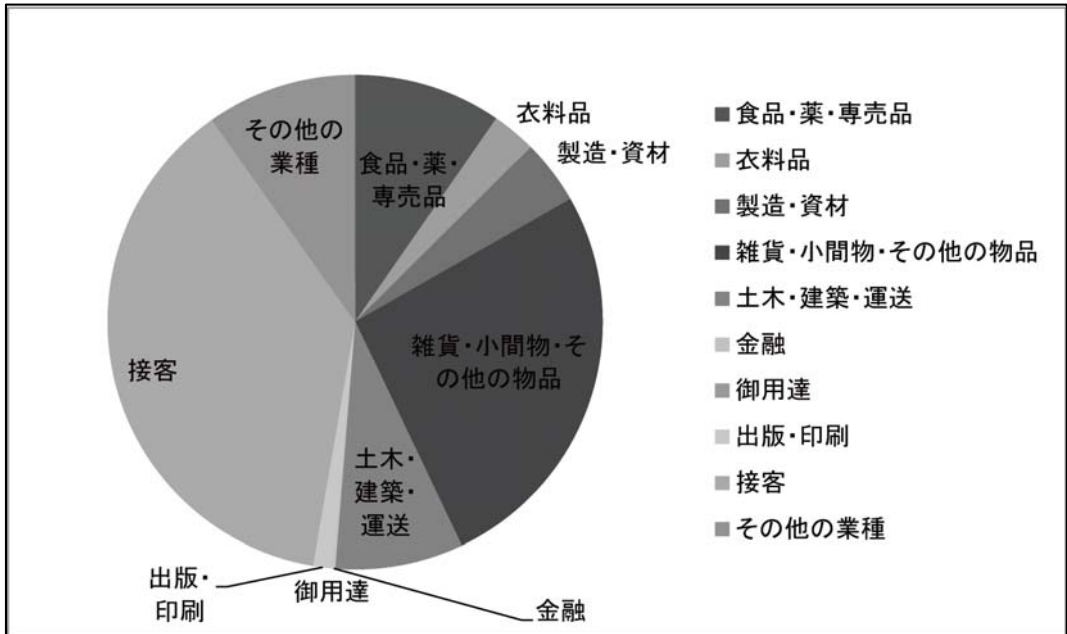


図 6: 1896 年台北三市街内地人業種別内訳

(注) 1896 年 9 月 1 日の「台湾新報」を基に山下昭洋作成

次に、内地人男女別の職種別従事者の人数の割合を円グラフにしてみると男女で就業職種に大きな違いがみられる(図 7 参照)。男女とも最も多かった職種は接客であったが、男性では接客の割合が全体の 30.0%であったのに対し、女性では就業者の 79.0%が接客に集

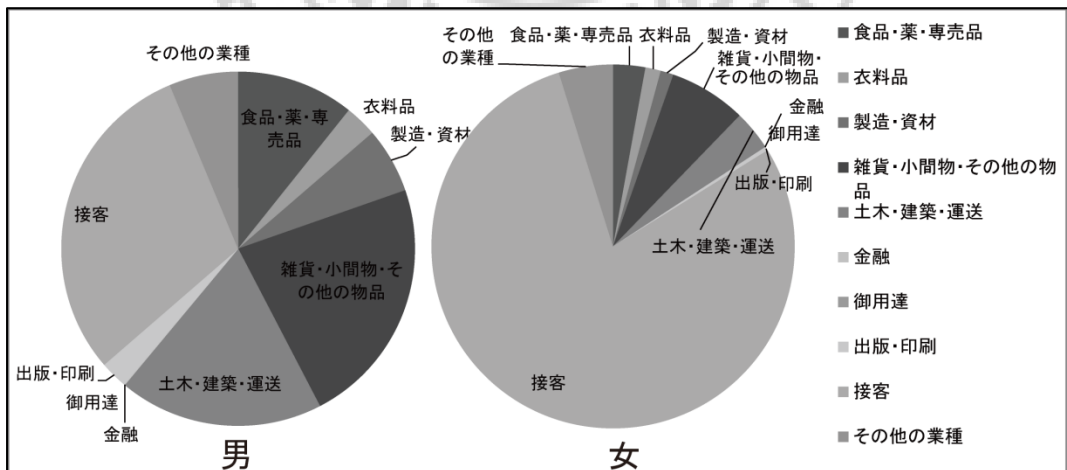


図 7: 1896 年台北三市街内地人男女別業種別内訳

(注) 1896 年 9 月 1 日の「台湾新報」を基に山下昭洋作成

中していた。次いで多い職種は男女ともに雑貨・小間物・その他の物品であり、男性では22.7%、女性が6.9%となっている（女性は雑貨・小間物。その他の物品の中でも雑貨店が86.6%を占めている）。内地人男女の職業別人口割合を比較してみると、男性は接客（30.0%）、雑貨・小間物・その他の物品（22.7%）、土木・建築・運送（18.7%）、食品・薬・専売（10.7%）と全体的にバランスが取れた構成となっていた。これに対し女性は接客だけで79.0%が集中するなど顕著な偏りが見られた。

#### 4.2 記事㉔~㉖に関する分析

㉔の「台北戸数及営業種別調査第一」の掲載街区は、大稻埕の内、千秋街・六館街一丁目・建昌街一丁目・建昌街二丁目であり、各街の商業店舗が掲載されている。これらの分類項目は「営業業種」・「種族」<sup>18</sup>・「店舗数」で、店舗数は117戸である<sup>19</sup>。店舗の種族別の内訳は内地人店舗が66戸で本島人店舗が45戸、西洋人店舗が6戸である。

㉕の「台北戸数及営業種別調査第二」の掲載街区は、西門外と新起街一・二・三丁目である。分類項目は「営業業種」・「種族」（㉔の表記では日本人であったが㉕以降は内地人に変更）・「店舗数」で、掲載の店舗数は116戸である。店舗の種族別の内訳については内地人店舗が74戸、本島人店舗は42戸である。ただし、記事中には「西門外から新起街一丁目入口迄は小屋掛雑貨其他種々商店あり」「小屋掛飲食店数擧するに違あらず」とあり、建物を持たない商業者が多数いたことが推察される<sup>20</sup>。

---

<sup>18</sup> 当時の資料では内地人・本島人・外国人（西洋人・清国人）を「種族」と区別していたので、本論文ではそのまま引用することとした。

<sup>19</sup> 「台北戸数及営業種別調査」では数字のみ掲載となっているために数字のみ記載することとする。

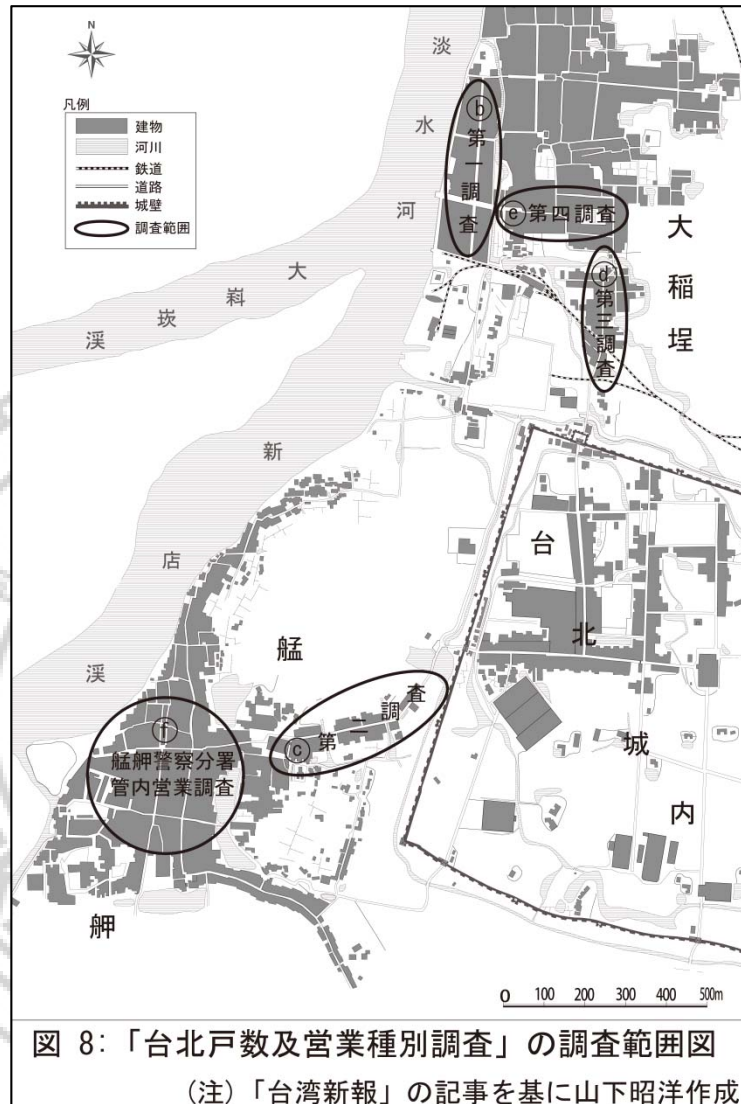
<sup>20</sup> 「小屋掛け」とは広辞苑では仮小屋となっているため、急ごしらえで作られた仮建築物で商売をおこなっていたと考えられる。

㉔の「台北戸数及営業種別調査第三」の掲載街区は、北門外街である。分類項目は㉔と同様の「営業業種」・「種族」・「店舗数」であり、掲載店舗数は36戸である。店舗の種族別の内訳は内地人店舗が3戸、本島人店舗は33戸であり、ここでは本島人の店舗が大多数である。

㉕の「台北戸口及営業種別第四」の掲載街区は、「大稻埕六館街二丁目より稻新街公道筋」となっている。分類項目は「営業業種」・「種族」・「店

舗数」であるが、記載方法は㉔～㉕と異なる表記となっている。掲載店舗数は126戸である。店舗の種族別の内訳は内地人店舗が13戸、本島人店舗は113戸であり、㉕の調査でも本島人の店舗が多数を占めていた。ただし、本島人商業店舗に関しては印刷が不鮮明なため業種が判読不明なものが4戸あった。

㉖の「艋舺警察分署管内の営業」の調査日は1896年12月1日現在となっている。この記事には艋舺の貸座敷営業指定区の内地人、



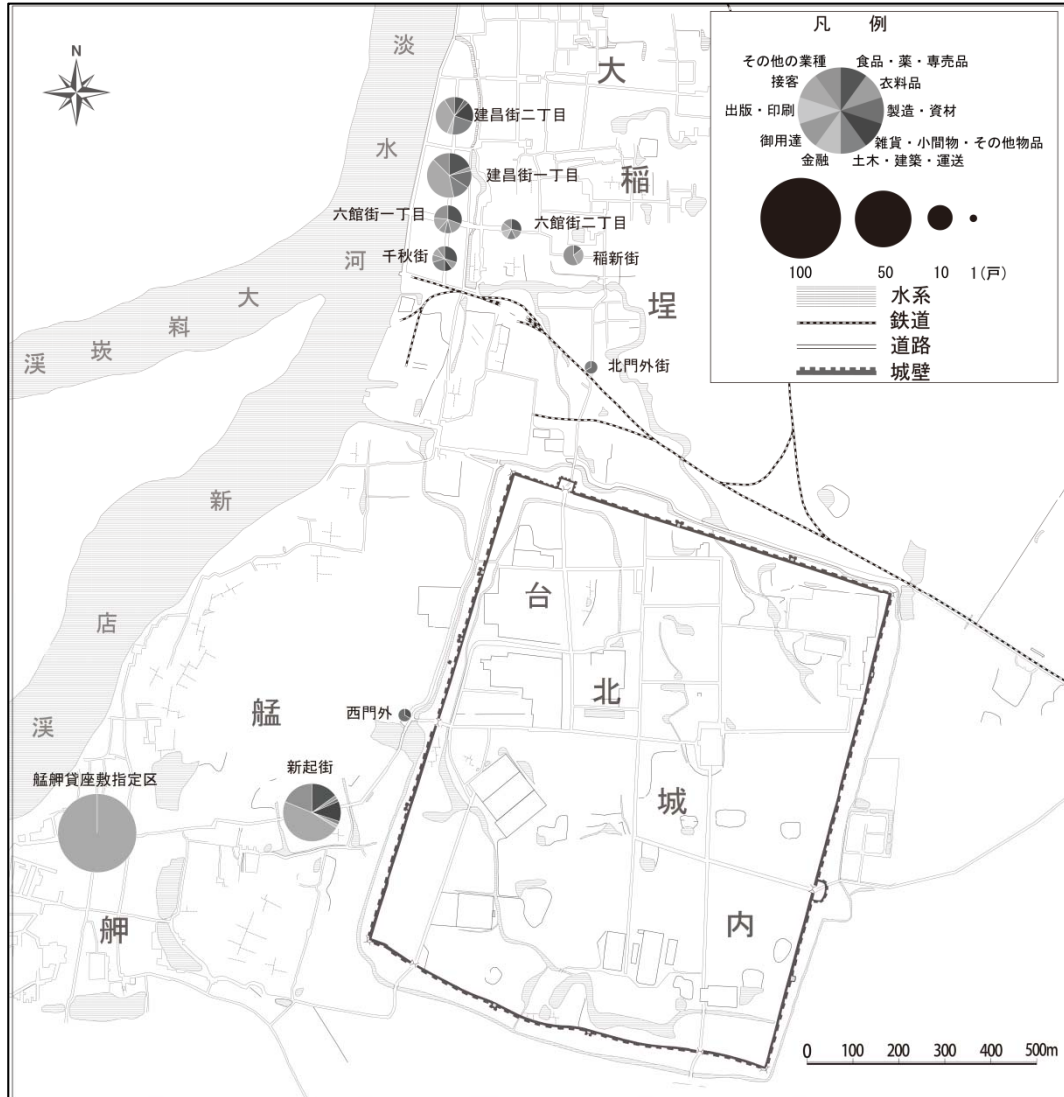


図 9: 1896年の艫舥・大稲埕における内地人商業店舗の立地

(注)「台湾新報」を基に山下昭洋作成

本島人別の「飲食店」・「旅人宿」・「料理店」・「木賃宿」・「貸座敷」の営業戸数と芸娼妓数とが掲載されている。この記事から同地区の接客業の営業戸数は全体で 114 戸、芸娼妓数 174 人となっている。その内、内地人経営の接客業が 97 戸、芸娼妓数が 166 人となっており、本島人経営の店舗が 17 戸、本島人芸妓が 8 人となっている。

㊦～㊧の記事内容から内地人の店舗の立地をグラフにし分布図に

表現した（図9）。これを、従来の研究と比較する。まず、大稲埕では比較的土木・建築・運送業が多く立地していた。建昌街一丁目では飲食店や旅館等の接客業が立地しており、同街二丁目には土木・建築・運送業の中でも「回漕業」や「倉庫業」が多く立地していた。六館街二丁目から稲新街には貸座敷指定区域外に貸座敷と貸間業が立地していた。よって、これは、次のことを明らかにできたことになる。1896年12月のこの時期には、すでに艋舺に貸座敷指定区域が設定されていた。しかし、今回の研究によって大稲埕には貸座敷等が未だに残存していたことが判明した。

次に、艋舺では西門外には小屋掛商店（仮小屋による営業）が多数あったことわかり、建物の建築が進んでいなかったこともわかった。

新起街は従来の研究通りに歓楽街であったが、この時期にはまだ、貸座敷兼料理店が14戸も残っており、総督府民政移行直後には新起街にも花街が残存していたことがわかる。また、食品関係でも菓子屋や餅屋などの嗜好品販売店が立地していた。

艋舺警察署管内の貸座敷指定区内では、すでに貸座敷などの接客業が97戸も営業していた。これは⑩～㊦の調査街区から比較しても突出して多いことがわかる。

同様に本島人の商業店舗の立地をグラフにし分布図に表した（図10）。大稲埕では、六館街一丁目から千秋街にかけては、内地人店舗と比べ本島人の店舗数が少なかった。建昌街一丁目と二丁目には、業種に差が見られ、特に、二丁目には木材・木炭商等の資材業が立地していた。六館街二丁目には、茶商を始め食品関係の業種が多かった。この他にも、ブリキ細工・金銀細工・鍛冶職等製造業も他街に比べ多かった。北門外街には食品関係の業種が多く、野菜・豚肉・海産物や漬物などを取扱う店舗が立地していた。全体的には大稲埕では食品関係の業種が多かった。

また、艋舺の本島人の商業店舗の立地は、新起街では製造業が多かったが、その中でも車の修理や塗替え等の人力車関係の業種の立

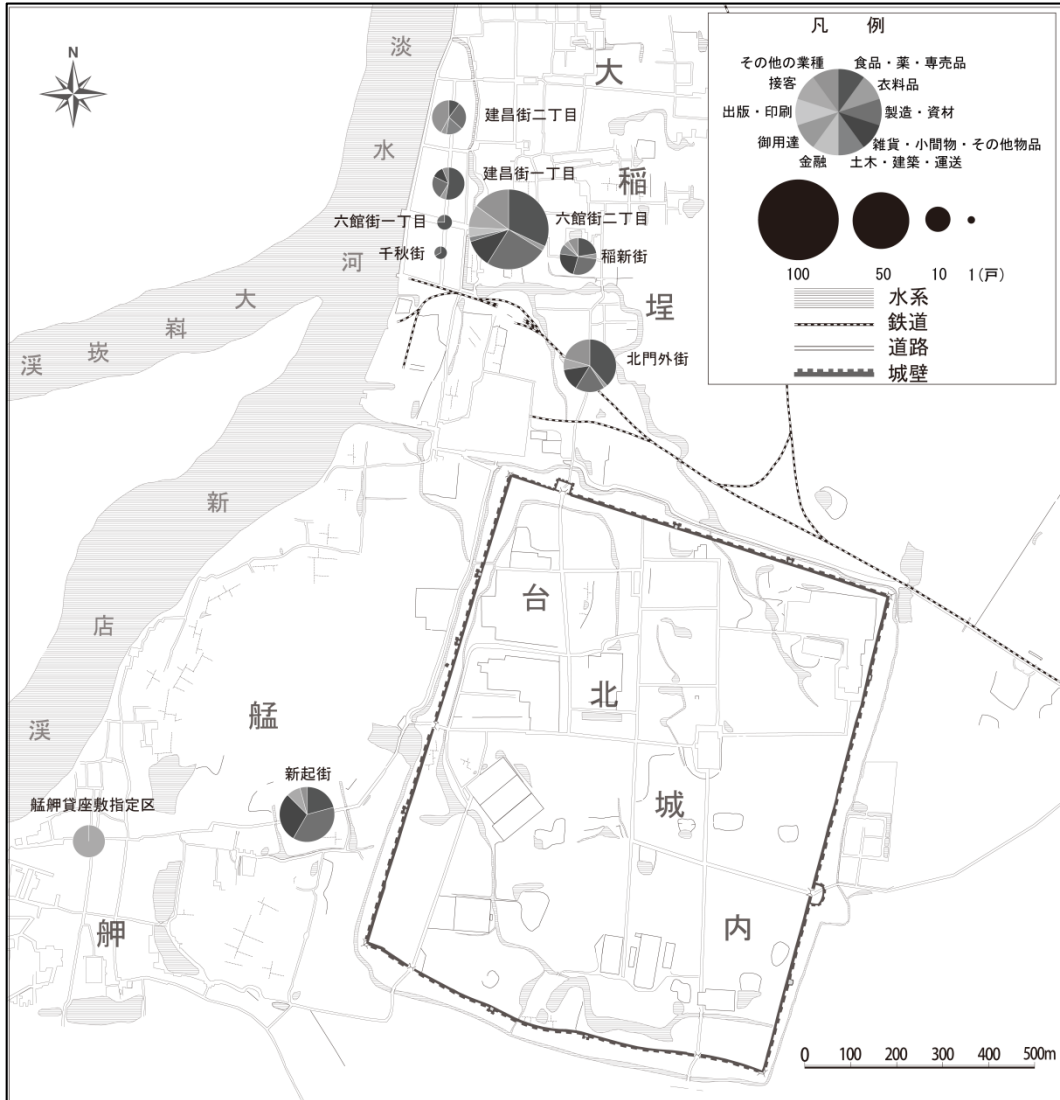


図 10:1896年の艋舺・大稻埕における本島人商業店舗の立地

(注)「台湾新報」を基に山下昭洋作成

地が顕著であった。これは、歓楽街へと向かう客や芸者を乗せるための人力車および人力車夫がこの地に多かったからこのような立地になったのだと考えられる。また、艋舺警察署管内の調査では、本島人の料理店・木賃宿は17戸が営業されていて、本島人の芸妓も8人いたことがわかった。

## 5. まとめ

本論文では、台湾総督府民政移行直後の一般内地人の急増期における台北三市街の内地人店舗の街別分布と、これらの業種の全体像（営業 622 戸）とその詳細な営業業種等を明らかにできた。

特に、花柳業界関係では艋舺貸座敷営業地域の設定から間もなくの新聞掲載であり、大稻埕六館街二丁目から稻新街にかけての通りや、新起街にもこの時期には貸座敷の営業が確認できた。

また、内地人の商業店舗の立地以外にも、同時期の本島人の営業店舗の詳細も把握することができた。本島人の商業店舗の立地は、これまで著者の研究では、本島人の営業種の多くが一括りに「物品販売業」と分類されており、簡素に表記されていたが、今回の新聞調<sup>21</sup>査資料では、野菜・肉・ブリキ細工・車修理・販売等に詳細に分化されていたため、食品・薬・専売品や雑貨・小間物・その他の物品販売や製造・資材等に分類することができた。

なお、本論文は 2015 年福岡地理学会夏季学術大会において報告したものである。

### 参考資料

「台湾新報」は清晰電子版（2007）『台湾日日新報』漢珍數位/ゆまに社を使用した。

### 参考文献

黄武達（1997）『日治時代（1895～1945）台北市之近代都市計画』台湾都市史研究室、台北縣板橋市

陳正祥（1997）『台湾的人口』南天書局、台北市

山下昭洋（2009）「日本台湾統治草創期の台北における内地人居住地の形成過程」『2009 年日本地理学会発表要旨集』社団法人日本地

理学会、東京都 p. 141

山下昭洋 (2011) 「日本台湾統治草創期における台北花柳界の社会空間」『生活・言語文化国際交流研究会研究論文集』熊日出版、熊本市 pp. 173-197

李佩蓉 (2014) 「日本統治時代初期の台湾における漢字新聞の研究-『漢文 台湾日日新報』(1905)の創刊経緯とその背景を中心に『日本マス・コミュニケーション・2014年度春季研究発表会・研究発表論文集』

<http://mass-ronbun.seesaa.net/article/397518677.html>

(URI 最終閲覧 2017 年 10 月 14 日)



※2017 年 10 月 30 日受領 2017 年 12 月 30 日審査通過



## 諏訪素濤編俳誌《熱》與本島人俳句作家 —大正前期台灣俳壇與日本俳壇的交流—

沈美雪

中國文化大學日本語學科副教授

### 摘要

本論以日人諏訪素濤於大正時期發行之俳句雜誌《熱》為主要的考察對象，探討該雜誌的發行目的、主編素濤的文學理念、以及《熱》的發行在台灣俳句發展史上的意義。

素濤主編之俳句專門誌《熱》於大正6年創刊，而《熱》和其它台灣發行的俳句雜誌最大的不同之處，是除了居住在台灣的俳人作品之外，亦收錄了相當多來自日本本土的投稿，其份量約佔整體的三分之一。也就是說，相對於以發揚「台灣俳人」作品為主要目標的明治期俳句雜誌『相思樹』『綠珊瑚』等，《熱》更希望透過內地（日本）的投句、投稿、來信等，維持和日本俳壇的連繫，藉此宣示台灣俳句界的存在。而另一點值得注意的是，《熱》的投句者中有不少「本島人」（漢民族系台灣人）俳人，其中名為柯雪嶼的「本島人」俳人甚至協助素濤的編輯作業。由此可見在本刊發行時，本島俳人便已嶄露頭角，可以用流暢的日文從事俳句之創作。包括上述幾點，本論文將探討『熱』與其同人的活動。

關鍵詞：台灣俳句 諏訪素濤 《熱》 交流 「本島人」俳人

**The Research on Suwa Sotou's “*Netu*” and ‘Hontouzin’  
Haiku poets:  
Regarding the Exchange between Taiwan Haiku Circle and  
Japanese Haiku Circle during the Early Taisho Period**

Shen, Mei-hsueh

Associate Professor, Chinese Culture University, Taiwan

**Abstract**

The paper is mainly regarding the Japanese haiku poem magazine of “*Netu*” which were issued by Suwa Sotou during the Taisho period. It revealed the purpose of publication of the magazine, Sotou's literary philosophy, and the significance of publication of the magazine in the development history of Taiwan haiku.

“*Netu*” accepted the contributors from not only Taiwan but also Japan. It was remarkably different from the other magazines issued in Taiwan, which confined the contributors to the limited region. Moreover, “*Netu*” called for attention to the existence of the Taiwan haiku circle and stimulated the exchange of the Taiwan haiku circle and the Japan one by positively accepting the contributions of articles or phrases composed in Japan or abroad. Furthermore, it is worth noting that there were a lot of contributors of ‘Hontouzin’, namely the Taiwanese haiku poets, in the magazine. It can be found that the Taiwanese haiku poets had composed haiku in fluent Japanese around 1917 and revealed their talent in the haiku circle. Therefore, I would like to research “*Netu*” and the activities of the haiku poets who had submitted the haiku in the magazine.

Keywords: Taiwanese haiku, Suwa Sotou, “*Netu*”, exchange, ‘Hontouzin’  
haiku poets

# 諏訪素濤編俳誌『熱』と本島人俳句作家 一大正前期の台湾俳壇と日本俳壇との交流をめぐって

沈美雪

中国文化大学日本語学科副教授

## 要旨

本論は、日本人俳句作家の諏訪素濤が大正時代に台湾で発行した俳誌『熱』を主な対象とし、俳誌刊行の目的や、編集者である素濤の文学的理念、そして台湾俳句発展史における本誌刊行の意義などを考察するものである。

素濤は明治末期に台湾に移住し、当時の台湾俳壇で最も勢力を誇る俳句会「緑珊瑚」に入会、さらに、大正6年に俳誌『熱』を創刊した。そして、同誌は台湾で刊行されていたほかの俳誌と一線を画し、台湾俳人の作品のほかに、内地からの投稿も積極的に受け付けるようにし、内地からの投稿は掲載作品全体の三分の一にも及んだ。つまり、『相思樹』『緑珊瑚』などといった明治期の台湾俳誌が、台湾に居住する俳人たち、いわゆる「台湾俳人」の作品が主体であったのに対し、『熱』はこうした点にこだわりを見せず、日本本土や海外からの投稿や投句を通して、日本を含む各地の俳壇と交流を図りつつ、台湾俳壇の存在をアピールしたのである。さらに、もう一つ注目に値する点として、本誌に投稿する「本島人」(漢民族系台湾人)がかなり多いことが挙げられ、特に、「本島人」の柯雪嶼は素濤の編集作業を手伝うなどした。そして、こうしたことから、大正6、7年ごろには、「本島人」も流ちょうな日本語で俳句という文芸作品を創作していたことが垣間見られ、こうした点を含め、『熱』とその同人の活動を探求してみたいと思う次第である。

キーワード：台湾俳句 諏訪素濤 『熱』 交流 「本島人」俳人

# 諏訪素濤編俳誌『熱』と本島人俳句作家 一大正前期の台湾俳壇と日本俳壇との交流をめぐって

沈美雪

中国文化大学日本語学科副教授

## 1. はじめに

俳句は日本の台湾統治とともに、日本文化の一環として台湾に持ち込まれた。そして、明治 31 (1898) 年に発行された『台湾日日新報』は、その発行当初から文芸欄に俳句作品を掲載しており、俳句という日本の伝統的な文学が台湾において広く知られるきっかけを作った。その後、明治 35 (1902) 年 4 月に俳句を中心とする総合文芸誌『台湾文芸』が、さらに明治 37 (1904) 年に最初の俳句専門誌『相思樹』、明治 41 (1908) 年に新傾向俳句を掲げる『緑珊瑚』がそれぞれ刊行され、明治後期の台湾における文芸人の間での、俳句の人気は飛ぶ鳥を落とす勢いであった<sup>1</sup>。

しかし、『相思樹』『緑珊瑚』の二つの俳句専門誌は、資金難の問題で明治末期に休刊せざるを得ない状況となり、復刊のめどが立たぬうちに、時は大正の世に変わった。ただ、俳句専門誌の休刊後も、相思樹派や緑珊瑚会の同人が活動を続けていたことは、『台湾日日新報』の文芸欄などから知ることができる。だが、両誌とも復刊のめどが立たず、明治後期のような盛況ぶりは見られなかった(沈美雪、2014)。そんな中で、大正 6 (1917) 年に緑珊瑚会の諏訪素濤が独自に俳誌『熱』を刊行し、大正前期における台湾の俳句出版事情に花を添えることとなった。

こうした『熱』の、その刊行目的は、内地(日本本土)の俳壇とのコミュニケーションを維持するためであったと言える。つまり、台湾(地方)の俳壇と内地(中央)俳壇をつなげることが、『熱』の

---

<sup>1</sup> 明治期の台湾における俳句の展開については、筆者の旧著『明治期台湾俳句界の始原的実相—近代俳句の台湾表象』(致良出版社、2014)に詳しいので参照されたい。

刊行趣旨であると思われるのである。そして、ほぼ独りで経営された『熱』が、3年間も続けられたことは、編集者である素濤の努力によることは言うまでもない。さらに、この『熱』という小俳誌が、大正前期において、地方としての台湾俳壇と中央である日本俳壇との橋渡しの役を担ったことは、注目に値することであろう。また、『熱』の同人には「本島人」(漢民族系台湾人)もおり、その中には、日本語で俳句を詠むのみならず、素濤の編集作業を手伝った者もいる。喜安幸夫(1996)によると、大正4年の台湾における日本語普及率はわずか1.63%にとどまる<sup>2</sup>ものであったが、こうした中から本島人の作者が現れたということになる。

こうした点を踏まえ、本論は、諏訪素濤および俳誌『熱』に注目し、その刊行目的や編集理念、文芸上の評価を明らかにすべく論じるものであるが、何よりも重要な目的として、中央俳壇との交流を果たしたその史的意義に注目して考察したいと考える次第である。

## 2. 諏訪素濤と『熱』発刊の経緯

諏訪素濤(本名・諏訪忠蔵)は緑珊瑚会の俳人で、書籍の編集と出版に関心を持った人物である。そして、彼が台湾の俳壇に残した最大の功績として、明治期の俳句を集めた俳句集として大正元(1912)年に刊行した『虎尾蘭』と、先に述べた大正前期に刊行した俳誌『熱』が挙げられる。このうち、『虎尾蘭』については、注1の前掲書を参照していただくこととし、ここでは、俳誌『熱』に目を向けたい。

諏訪素濤が所属した緑珊瑚会は、明治41(1908)年に会誌『緑珊瑚』を出版したが、その発起者は、小林里平、田原天南、堀尾空鳥などといった、当時の著名俳人が名を連ねたものであった。そして、同年10月に俳人・河東碧梧桐が台湾を来訪したのを機に、緑珊瑚会は新傾向俳句を目指す碧梧桐派の句会に転向した。また、こうした緑珊瑚会が、台湾の俳人から莫大な支持を得られた理由の一つとし

---

<sup>2</sup> 喜安幸夫(1996)『台湾の歴史』原書房、p.120より引用。

て、当時の著名俳人である碧梧桐の支援があったことが挙げられる<sup>3</sup>。つまり、台湾の俳壇が内地にその存在をアピールするためには、中央俳壇との交流や、台湾という土地で培われた俳誌や句集などを刊行するなどした上で、それを内地に向けて絶えず発信する必要があったのである。

しかし、台湾の二大新派俳誌である『相思樹』と『緑珊瑚』は、明治末期になると、休刊せざるを得ない状況になった<sup>4</sup>。なお、両誌が休刊に至った理由はさまざまであるが、『相思樹』の場合は、会員の減少とそれに伴う活動の不振に加え、吉川五平太などの有力メンバーの逝去が、『緑珊瑚』は、資金面での困難が、その主な原因であった。そして、『緑珊瑚』の編集者であった黙行（渡辺常三郎）と天仙果（毛利誠意）は、結果として莫大の借金を背負うこととなったのであるが、こうした俳誌編集の苦労について、『緑珊瑚』の編集を手伝った素濤は、自ら編んだ天仙果の追悼句集で二人の交友と合わせて次のように語っている。

其頃君は早く鬼籍に入った渡辺黙行と連帯主義となつて「緑珊瑚」と云ふ俳誌を出す計画をしたが、私は経営難を感じて責任者には加はず二三回編集餘録を手伝った、間もなく私は斗六にパンの道があつて南部に転住したが緑珊瑚も私の予想通り経済難から遂に廃刊し黙行も死んで、君は独りで莫大な印刷費を負担し爾来再び俳誌を営むことを断念したらしい。私が斗六で個人俳誌を刊行するに当つて、君は自己経験より大いに同情もし後援もして呉れた<sup>5</sup>。

<sup>3</sup> 『相思樹』『緑珊瑚』などの俳誌の事情、碧梧桐の訪台などについては筆者の注1前掲書の第3章と第5章に詳しく論証されているので、参照されたい。

<sup>4</sup> 島田謹二（1995）『華麗島文学志—日本詩人の台湾体験—』（明治書院、p. 211）では『相思樹』は明治44（1911）年2月に休刊、『緑珊瑚』は同年3月に廃刊になったとしている。なお、これら両誌についての詳細は注1前掲書を参照されたい。

<sup>5</sup> 諏訪素濤（1930）「天仙果と私」『追悼句集天仙果』昭和5年、非売品、pp. 144-145。

素濤が斗六で出した俳誌は『カーレン』という誌名であったと言われるが、残念ながら、筆者は実物を見ておらず、詳細は分からない。ただ、斗六での仕事を終えた素濤は、その後、再び台北に戻っているが、天仙果が新竹県警部になったのは大正 4 (1915) 年のことであり、素濤がそのあと間もなく台北に移ったことが、上記の資料から知ることができることから、「斗六で個人誌を刊行する」というのは同年以前のことと思われる。また、二大俳誌『相思樹』『緑珊瑚』、さらに吐庫会の俳人が出した『吐光』<sup>6</sup>が期せずして終息を迎えるなど、新派俳誌が明治末期においてほぼ全滅したことは、かつて『緑珊瑚』『吐光』の編集を手伝った経験を持つ素濤に、深い感懐を抱かせたであろう。

そして、一介の台湾俳人としての使命感と句集・俳誌の編集に対する情熱から、素濤は台北転居後、斗六での編集経験を生かし、俳誌『熱』を大正 6 (1917) 年に創刊したのである。

### 3. 『熱』の内容と刊行方針

#### 3.1 『熱』の内容と構成

『熱』は大正 6 (1917) 年 1 月に創刊され、大正 8 (1919) 年 8 月までの間に 31 号が世に送り出されている。このうち、台湾の中央図書館台湾分館には大正 7 (1928) 年 1 月に発刊された第 13 号から最終の第 31 号まで収蔵されている。また、発行者は熱吟社、編集・発行人はともに諏訪素濤で、発刊当初は 1 部 2 銭であった。発刊当初の構成は極めてシンプルで、「じせんく (自選句)」「かりのこゑ」(俳信・短文)「編集餘録」の三つの部で構成されているが、特に注目すべき点として、俳句作品に撰者を設けることなく「自選」とい

---

<sup>6</sup> 『吐光』は土庫にあった句会「吐光会」の会誌で、終刊号を刊行する予定であったものの、予想外に作品が集まらなかった。そのため明治期台湾俳句の記念として素濤を編集者として発行したのが、『虎尾蘭』であり、こうした経緯は『虎尾蘭』の序文 (大正元年、4) に記されている。また一連の経緯については筆者注 1 前掲書第 7 章を参照されたい。

う形での掲載であったことが挙げられる。さらに、俳誌においては付録的なコンテンツとして取り扱われることが一般的であった俳人同士の俳信を、比較的によく掲載した点も、本誌の特徴の一つと言えよう。そして、こうした2点の特徴から、本誌の性格は、俳句品質の向上や俳句研究を主眼とした明治期刊行の『相思樹』や『緑珊瑚』などと異なり、内地（日本俳壇）や海外の俳句会との「交流」を第一の目標とすることであることがうかがえる。

例えば、『熱』14号（大正7年2月）に掲載された自選句の「年頭吟」においては、明治末期の『相思樹』主筆だった岩田鳴球（神戸）、竹風吟壇の初期会員である田内芋作（西螺）、吐光会の岡山の外（桃園）、緑珊瑚会の根津紫嶺（台北）が、さらに「冬季吟」においては、緑珊瑚会の創設者の一人で明治41（1908）年に朝鮮赴任を命じられた堀尾空鳥などが、それぞれ投句しており、明治の新派俳句の隆盛の一端を担った俳人たちの交流が見られた。また、空鳥は、同じく『熱』14号の「かりのこゑ」において、「新装の「熱」の表紙の裏絵を見て十幾年ぶりの対顔なつかしさをしのび申候（七・一・八）」と、台湾での俳句創作の日々を懐かしむ心境を吐露した<sup>7</sup>。さらに、次の15号（大正7年3月）では、北京にいる田原天南が、「李坪、空鳥の二子と緑珊瑚俳壇の創立者でありながら落伍した自分は離台以後東奔西走俗了俗化してしまった事を旧同人諸君に告白し且つ慙愧します」（七、一、八）と、かつて李坪、空鳥、天南の3人で緑珊瑚会を創設した思い出を懐かしく語った<sup>8</sup>。

当時、いわゆる内地から各地に移民した人々は、日本の植民地拡大政策や世界進出に伴い、公務や仕事、もしくは新天地を求め各地に移り住んだものである。そして、その土地の文化に触れることで、伝統の日本文芸に新しい刺激を与え、さらに新しさを加えた。一方で彼らは、緑珊瑚会の創設者の3人のように、台湾で俳句の縁で出会い、また、台湾を離れた後も俳句でつながりを持っていた。つま

<sup>7</sup> 堀尾空鳥（1918）「かりのこゑ」『熱』14号、大正7年2月、p. 12。

<sup>8</sup> 田原天南（1918）「たより」『熱』15号、大正7年3月、pp. 9-10。



り、『熱』を通して各地の俳壇に台湾の俳句創作事情を伝えることが、主筆の素濤には極めて重要であった。そして、空鳥と同じく、かつては台湾で生活し、後に朝鮮に移住した石井竹馬も、「手紙を出しても返事のない台湾の友人の句を熱に依て知る事の出来るのを何によりの楽しみと致して居ます近来当地の新聞のため多忙、其外さんにも無沙汰します（七、五、八）」と、台湾俳人の句や今の状況を知ることができた喜びを『熱』18号（大正7年6月）に記している<sup>9</sup>。以上に見たとおり、『熱』の重要な目的の一つが、いわば「交流」であったことが分かる。

### 3.2 『熱』の刊行方針

『熱』の方針に関し、編集者の素濤は、『熱』21号（大正7年9月）の「墨滴」での一文中、次のように語っている。

本誌の編輯ぶりに就ては常に何等かの革命をやつて見たいと思はぬことはない、本島同人よりも多少意見もありますが私としては多くの時間を費すことが絶体（原文ママ）に不可能であるのと一種の派を樹てると云ふことが私には好ましくないの、矢張最初の主義に基き個人々々の趣味を混載して混沌たる現代俳句の帰一する処を見たいと考えてをるのであります<sup>10</sup>。

この文では、素濤の編集者としての心境が述べられている。素濤は、仕事の合間に編集の仕事に携わっており、さらに、大正7年ころからは緑珊瑚会が毎週に開催している例会も引き受け、その句稿整理のほかに、不句の置き土産である「雲高俳壇」も週に1回あった。そのため、素濤のいう「俗務が益々殖えるばかり」（原文ママ）で、これ以上は時間を割くことができないことから、一つの派を樹立するような目的で『熱』の刊行を続けるわけではないと、明言し

<sup>9</sup> 石井竹馬（1918）「かりのこゑ」『熱』18号、大正7年6月、p.8。

<sup>10</sup> 諏訪素濤（1918）「墨滴」『熱』21号、大正7年9月、p.16。

ているのである。

だが、明治末期の新派俳句が燦爛であった時代に生まれた『相思樹』『緑珊瑚』などの俳誌が休刊や廃刊になって久しかったことから、台湾俳人たちは『熱』のさらなる進展を強く期待していたようで、素濤にさまざまな建言を述べたらしかった。しかし、先に示したとおり、素濤は、『熱』以外にも、いくつもの俳句関連の仕事に携わっており、「個人々々の趣味を混載して混沌たる現代俳句の帰一する処を見たい」という「最初の主義に基」づく姿勢を崩さなかったのである。

また、素濤は、いわゆる来るもの拒まずといった主義で、俳句の部分に関して撰者を設けず、俳人の自選句をそのまま掲載する方針を採った。また、前述したように、各地の俳壇との交流も『熱』の重要な目的の一つであるが、これについて京都俳人の西川雁風呂は、

台湾の熱が内地に反響するか内地の白熱光があなたの島に響きを送るかお互にはげみところです、しかし私は大きな深い愛を感じるばかり、内地と台湾とを隔るべきときでは決してありませんことは愚鈍者ながら分つてゐます<sup>11</sup>。

と、お互いによい影響をもたらすように願い、また『熱』が台湾の俳壇と中央の俳壇との懸け橋となることを切に語った。そして、この点に関して、『熱』の目指す目標やその現状について、素濤自身が以下のような言葉で語っている<sup>12</sup>。

▽私は多少の金銭と労力とを犠牲にして同趣味者の風交の楔とも思ふて此発行を続けて居るのであります。

▽一面に本島の風物を多少でも内地の同人に知らせたいと思ふのであるが全く孤軍奮闘の有様であります。

<sup>11</sup> 西川雁風呂 (1918)「たより」『熱』19号、大正7年7月、pp.10-11。

<sup>12</sup> 諏訪素濤 (1918)「余録」『熱』24号、大正7年12月、p.16。

▽幸に内地の同人から絶えずお便りを頂くので僅かに慰めつゝ  
僅かに発行をつゞけてゆく次第であります。

上掲の素濤の語りによれば、「同趣味者の風交の楔」として、また「本島の風物を多少でも内地の同人に知らせたい」との思いで『熱』の刊行を続けているものの、台湾からの投稿が思うほど振るわなかつたようである。そして、『熱』28号（大正8年4月）の「編輯餘録」で素濤は、「近時台湾の俳壇は一斉に沈滞してゐるようでありませぬ、  
「月桃」は二回だけで発行されぬようでありませぬ、的外君が健康  
勝れぬ為めでもありませぬ、呑空君の開拓されたクサトベラ会  
の句稿も新聞に見へぬようでありませぬが是もさびれたのではあるま  
いかと思ひまして何だか心細いようでありませぬ<sup>13</sup>」と、台湾の俳句  
会が「沈滞」期に入り、『熱』への投句も減っていることを「心細く  
思」いつつ、「内地の同人から絶えずお便り」が寄稿されることをい  
ささかの慰めとしながら、『熱』を発行し続ける心境を語っているの  
である。

#### 4. 各地の俳壇との交流と当時の評価

ここまで述べてきたように、『熱』は、台湾以外の各地俳人からの  
投句や情報を精力的に紹介し、また、台湾の俳壇から各地に向け  
た発信という役割を果たしたと思われる。例えば、シカゴの細谷不  
句は『熱』13号（大正7年1月）で、「布哇は臺灣と同じで日本植  
民地、歳時記あり」と、台湾と同じくシカゴにおいても、植民地と  
して日本からの移民が多く、歳時記も刊行されていることを報告し  
ている<sup>14</sup>。また、朝鮮にいる石井竹馬も「台湾は既にあつくなつた  
事と存じます台湾の俳壇を独りでショツテ居られる現状ご多忙と存  
じます俳句は朝鮮より台湾の方が面白い何にか変わつた話もありま

<sup>13</sup> 諏訪素濤（1919）「編輯餘録」『熱』28号、大正8年4月、p.9。

<sup>14</sup> 細谷不句（1918）「かりのこゑ」『熱』13号、大正7年1月、p.8。

せんか（七、七、十三）」と、朝鮮から発信している<sup>15</sup>。さらに、かつて台湾で暮らした遠矢良茂（大阪）も、「「熱」いつも面白く拝見いたし候地方地方で夫れ々々了解の仕様が違つてゐる為か特色が見へ感心致候と同時にいつも乍ら自分のなまぬるいのが残念に御座候<sup>16</sup>」と、台湾を発信元とする『熱』の地方色を面白く感じると述べている。

そして、こうした『熱』の編集方針は、既に述べたとおりであるが、ここまで見てきたように、同誌は、大正前期において台湾を代表する俳誌として、当時の俳人から大いに期待を寄せられたのである。ただ、その期待を大きき故か、自選句のレベルに不満を感じ、苦言を呈した意見も多々あった。例えば、山下政一郎（台北）は、『熱』17号（大正7年5月）に、台湾を代表する俳誌としての『熱』に不満を漏らし、句のつたなさを情けなく思うと厳しい言葉を漏らしている<sup>17</sup>。ただ、それに対して原十雉は、次のように擁護している。

榕樹君（筆者注：山下政一郎の俳号）は熱の句の拙いのかなさけないことのように言はれたが、私は句の巧拙は問題とはな  
いと思ひます、何等か存在の意義のあるか無いかより大なる  
問題だと思つて居ります<sup>18</sup>。（原文ママ）

つまり、原十雉は、句の優劣よりも、俳誌の存在自身に意味があるとしているのである。しかし、こうした意見に対して、山下政一郎は、次のような意見を呈している。

十雉君の存在の意味があるかないかは要するに熱の句が芸

---

<sup>15</sup> 石井竹馬（1918）「たより」『熱』20号、大正7年8月、p.10。

<sup>16</sup> 遠矢良茂（1918）「共同生活」『熱』24号、大正7年12月、p.1。

<sup>17</sup> 山下政一郎（1918）「たより」『熱』17号、大正7年5月、pp.10-11。

<sup>18</sup> 原十雉（1918）「たより」『熱』18号、大正7年6月、p.9。

術としての価値があるかないかに帰着します、しかし単に一種の趣味や道楽として皆が句を作りこれを印刷して居るのでしたら私は何とも云ひません。台湾にも色々の会があるようですがどうもまとまりませんね、せめて緑珊瑚だけは立派に育てたいものです<sup>19</sup>。

また、句の巧拙の問題とは別に、投句者の地域的な偏りも問題となっている。具体的には、地方俳誌を掲げる『熱』であるものの、内地からの投句が3分の1を占めることに、その割合が多すぎるとい声があったということである。例えば、本多冬城は「熱の消息は一異彩である内地俳人の句は多すぎる台湾本位でやつてもらいたい気がする（八、五、二二）<sup>20</sup>」（『熱』30号、大正8年6月）と感想を述べ、さらに、石井竹馬も、次のような同様の意見を述べている。

「熱」を通じて台湾の旧友の面目を承知せむと存するに案外在台俳人の投詠なきは如何物足らず候「熱」は寧ろ台湾趣味に満たされ我等は其飽く処を知らざる底のものならざるべからず、昔三誌鼎立の時代も偲はるべき乎（八、五、二九）<sup>21</sup>。

なお、台湾俳人の投句が振るわなかったことについての苦言については、台湾に在住していたことのある自身の思いからのものと思われよう。そして、こうした意見に対し素濤は、同号の「編輯餘録」で、俳誌編集の苦労を次のように語っている。

本月号から魄鳴子佛屠両君の援助の下に緑珊瑚俳壇の入選句を精選して大ひに本紙の光彩を加へる約束であつたから冬城、

<sup>19</sup> 山下政一郎（1918）「たより」『熱』19号、大正7年7月、p.10。

<sup>20</sup> 本多冬城（1919）「共同生活」『熱』30号、大正8年6月、p.11。

<sup>21</sup> 石井竹馬（1919）「共同生活」『熱』30号、大正8年6月、p.14。

竹馬両君あたりから内地の句が多う過ぎるとの適評はあつても  
此次を御ろうじろと実はすまして居ましたが七日の土曜日例会  
にも雨に恐れて来て呉れず八日の日曜には音沙汰もなく(後略)  
<sup>22</sup>。

上の引用によると、『熱』をより台湾色豊かにすべく緑珊瑚会の  
毎週例会の句を掲載しようとしたものの、同人例会の参加意欲は  
それほどでもなかった様子がかがえる。このように、深刻な不振  
の状況にある大正前期の台湾俳壇において、素濤は、孤軍奮闘の状  
態で『熱』の刊行を続けるといった状態であり、少ない本島からの  
投句の埋め合わせをするために、内地俳人の作品を多く掲載するこ  
うなのは、むしろ、やむを得ない事情と言えるものなのである。

## 5. 本島人俳人の出現と素濤の期待

掲載作品に内地俳人のものが多いのではないかと批判を受け  
る『熱』であるが、しかし、従来の俳誌と比較して「本島人」の投  
稿が多く見られるのは事実であり、同誌の特徴の一つであろう。そ  
して、同誌に投稿した「本島人」と思しき人物として、柯雪嶼(台  
南)、呉鬼花(中埔)、林世外(澎湖)、高海南(台北)、陳朴庵(台  
北)、薛浪月(台北)、高小笠(台北)、薛蓬雨(台北)などがある。  
中でも、柯雪嶼は特に熱心で、人物としての詳細は不明であるもの  
の、彼の作品と、以下のような素濤の評価が『熱』に残されている。

幸にして豫て原稿整理の手伝をするとの厚意を持つて居ら  
れた本島人作者柯雪嶼君が来訪せられて大に浄書を助けて呉れ  
られたので夕方迄に全部浄書を了へることを得ました。(中略)  
雪嶼君は本島人であつて私の知つた本島人作者の第二人者であ  
るが原稿の整理は初めてでもあり随分苦しかつたように思はれ

<sup>22</sup> 諏訪素濤(1919)「編輯余録」『熱』31号、大正8年7月、p.6。

しも斯くて何物かの得るものがあつたと思ひます<sup>23</sup>。

明治期は、日本からの移民や仕事などのための移住者といった、いわゆる「内地人」が主な俳句の作り手で、「本島人」と呼ばれる漢民族系の作者はまだ頭角を現してはいない。しかし、大正期に入ると、『台湾日日新報』などの文芸欄には、本島人らしき人物の投稿作品を見ることができるようになる。そして、筆者の調査によると、明治から大正に改元した1912年には、呂錦城という本島人が「花生挿む短夜風に馬鳴けり」の一句を、7月3日の碧潭会例会の席上にて発表し、同月の『台湾日日新報』にも投稿している<sup>24</sup>。呂錦城は台北の碧潭会例会に属する、いわゆる本島人であるが、この出来事は、日本が領台してから17年目にしてようやくの、本島人俳句作家の登場とも言うべきものであろう。

そして、『熱』には、呂錦城以外にも、先に挙げた「本島人」と思しき人物の句が少なからず見られることは、筆者としては指摘せねばならない。そして、こうした「本島人」の投句について、素濤は「本島人作者に新に高君海南子、陳君朴庵子を得たことを誇りとする<sup>25</sup>」と、「本島人」の俳人を得られたことの喜びを述べている。また、毛利天仙果も、自分の所属する烏塗窟句会に本島人も参加していることを「誇り」に思い、さらに、その将来性を強く期待していることについて、次のように語っている。

烏塗窟句会の方も熱心にお世話か出来ないのです而し同地の同人は火の出る様な熱心ですから本年中には一転機を見ることとなるの確信があります（中略）又当会に無三四、其村の本島人作家を得たのを誇りといたします而もその傾向が在来に宗

<sup>23</sup> 諏訪素濤（1918）「余録」『熱』15号、大正7年3月、p.14。

<sup>24</sup> 台湾日日新報社（1912）『台湾日日新報』大正元年7月3日文芸欄記事。

<sup>25</sup> 注23参照。

匠株を凌ぐ力があります（七、四、七）<sup>26</sup>。（原文ママ）

なお、「本島人」が日本語で俳句を創作し、もしくは俳誌の編集作業を手伝ったという事実は、彼らが日本語を流ちょうに使いこなせていたことを意味している。大正期の台湾では、「本島人」の教育に関して、台湾教育令に基づいて公学校と高等普通学校が設立されている。また、「日本統治時代の就学率一覧」を見ると、大正3(1914)年における台湾人学童の就学率は9.1%ほどであり、緩慢ではあるものの、約1割の児童が日本語教育を受けていることが分かる<sup>27</sup>。そして、磯田一雄(2017)は台湾人の俳句や短歌への接近について、島田謹二の言説を紹介し、次のように述べている。

台湾人の俳句や短歌への接近は、島田謹二のいう「第二期」（明治38(1905)年～昭和初め）に始まり、「第三期」（満州事変以後）に至って表面化したと見られている。しかし、実際には、既に大正末期には師範学校の台湾人生徒や公学校の台湾人教師たちによって短歌や俳句が詠まれていたらしい。

1923年(大正12年)の『台湾師範学校校友会誌』は本科一年生から四年生までの各学年の台湾人生徒の詠んだ俳句を掲載している<sup>28</sup>。

上掲の磯田の論によれば、大正12(1923)年の『台湾師範学校校友会誌』には「本島人」生徒の俳句作品が見られたとされ、いわば、学校教育における教育成果の一部が示されているのである。また、筆者の調査においては、「本島人」の子どもによる俳句創作について、

<sup>26</sup> 毛利天仙果(1918)「たより」『熱』17号、大正7年5月、p.10。

<sup>27</sup> 前臺灣省行政長官公署統計室編輯(1946)『臺灣省五十一年來統計提要』、p.1241を参照。

<sup>28</sup> 磯田一雄(2017)「戦後台湾俳句小史(一)戦前期台湾の国語教育と俳句・短歌—生活表現の「日本化」・「近代化」—」『成城文藝』第239号、pp.55-86。



当時の一大台湾俳誌『ゆうかり』誌上にも、その作品が見られた。具体的には、『ゆうかり』大正12年9月に、浜田坡牛という俳人が最初に選者を務めた「少年少女俳句」欄というものが設けられており、ここには、「本島人」（台湾人）の子どもたちも多く投稿しているのである。このように、「本島人」の学生を含む大勢の新進を育てたという点において、同誌の「少年少女俳句」欄の企画は特筆すべき創見であろう。なお、これについては、別稿に譲ることとして、ここでは、本論のテーマである『熱』における本島人作者の話題に戻る。

先にも述べたように、大正期の緑珊瑚系俳人の素濤や天仙果は、移民文学の一つとしての俳句が現地の人々に受け入れ、受容されたことを喜び、かつ高い期待を寄せていた。ただ、素濤は、当時流行しつつあった口語俳句について、次のように触れている。

近來口語句が大流行を極めて参りまして新しいと何でも彼でも真似をする人の多きことをかなしく思ふ。(中略)私共は本島人を純正な美しい人に導くべき義務を有するが故に余りに野卑な言葉を注入したく思はない。(中略)一面に口語句は会話を流暢にせしめる利益があるのだから美しい言葉であるならば更に差支ないと思ふ。が可成俳句としては口語体でなく美しく言ひ廻はしたものを讀ませて善良なる思想を吹き込みたく思ふ。此意味に於て本島人俳人には口語体でない俳句を作る事を望みます<sup>29</sup>。

つまり、素濤は、「本島人」には「野卑な言葉」ではなく「美しく言ひ廻はしたもの」を使ってほしいと願い、伝統の日本文学としての俳句の美しさを体得するように、と呼び掛けているのである。

また、俳句に触れることで創作の喜びを感じた、「本島人」の薛

---

<sup>29</sup> 諏訪素濤 (1918) 「余録」『熱』23号、大正7年11月、p.9。

蓬雨は、俳句に対する情熱を次のように語っている。

無趣味な学寮生活も毎週の土曜日の夜の独坐吟は私に無上の慰安を与へるのでございます、例の駄句をお目にかけて、句の傾向や表現について皆様の御指導を願ひます（八、四、二五）<sup>30</sup>。

さらに、前述の柯雪嶼も、内地の修学旅行を利用して内地の俳人と交流したことを、次のように記している。

内地の修学旅行を了へて一昨日信濃丸にて帰台いたしました、なるべく多くの俳人に逢つて見たいと思ひましたが僅かに荒川吟波、遠藤古原草の両氏に逢ふことが出来たばかりです、海紅堂句会に出るつもりでしたがこれも出来なかつた甚だ残念な次第でございました、然し吟波、古原草両君と一晚浅草から向島まで行くことが出来たのをうれしくおもひました<sup>31</sup>。

このように、大正期に入ってから、ようやく、日本語をもって俳句を創作する「本島人」俳人が現れた。そして、流ちょうな日本語をもって俳句を詠むことができるようになったということは、台湾における当時の日本語教育の影響力の一端を示すものであるのみならず、俳句が現地の人々に受容され、現地の風土に溶け込んでいることを物語るものであろう。では、次節において、実際の作品をいくつか取り上げて、「本島人」を含めた『熱』俳人の作品について述べたいと思う。

## 6. 『熱』同人の作品

ここでは、筆者の手元にある大正 7～8 年の『熱』に採録された

<sup>30</sup> 薛蓬雨（1919）「共同生活」『熱』29号、大正8年5月、p.7。

<sup>31</sup> 柯雪嶼（1918）「共同生活」『熱』24号、大正7年12月、p.7。

同人の作品をいくつか紹介しつつ、特に、「本島人」作者による句に注目して論じたいと思う。まず、明治期から台湾で活躍し、同誌でもその作品が度々見られた代表的な俳人と、その句を紹介する。

かげ膳を据える人とはなし雑煮（台中）藤井烏榎  
（帰省）北国の雪の元日がめでたくて（神戸）岩田鳴球  
炎天の田道水布袋踏み鳴らしつゝ（寸六）西澤菱巴  
大地を掘るひとの全身に流るゝ汗かな（枋橋）但馬紅衣児

烏榎は、本名を藤井乾助といい、台湾覆審法院判官、台南地方法院院長、台中法院長などを歴任<sup>32</sup>、大正7年4月の退職に伴い、20年間も住み慣れた台湾を離れ故郷の福山に戻った。明治期には、何度も『ホトトギス』の雑詠欄に名を連ねた人物でもあり、中央俳壇に「台湾俳人」の存在をアピールした功労者とも言え、上掲の彼の作品は、まだ台湾に在住していた際の句である。次に、2句目の作者である鳴球は、本名・岩田久太郎、明治期の俳誌『相思樹』後期（明治39（1906）年後半から休刊となる明治44（1911）年まで）の主筆を担う俳人で、正岡子規に師事していた<sup>33</sup>。大正4（1915）年に台湾での勤務を終え、同年11月に東京三井物産本店に転勤するために離台した。そして、上掲の彼の句は、帰省先の石川県で元日を過ごした時の述懐であろうと思われ、北陸地方という「北国」で雪の元日を過ごし、そのことを作品に記した際に、対照的とも言える南国の台湾で過ごした日々も思い出したのではないかとも思われよう。

なお、上掲の句に見るように、当時の作品傾向として、破調の句が多く見られる。これは、「自由律」が叫ばれている時代であった影響であり、例えば、『熱』の主催である素濤にも、以下のような字余

---

<sup>32</sup> 藤井烏榎の作品や台湾俳壇での活躍については、沈美雪（2009）『『相思樹』小考—台湾最初の俳誌をめぐって—』（『日本台湾学会報』11号、pp. 233-246）を参照されたい。

<sup>33</sup> 前注論文参照。

りの句が多く見られる。

火鉢の火が灰となるまでかえりみぬ夜なり 素濤  
草を残さじと抜く妻は紫蘇の目を知らぬ也 素濤

そして、大正期におけるこうした「自由律俳句運動」について、平井照敏（1995）は次のように説明している。

明治末年から大正二年（1913）にかけて中塚一碧楼らの『試作』『第一作』では、すでに季語・定型に拘泥せず、気分・思いのままに口語を入れた自由表現が試みられ、同年二月には荻原井泉水も、俳句は「真に自然の鮮やかな光に打たれ」「其の印象を言葉に焼きつける」（「昇る日を待つ間」『層雲』大 2.2）「印象詩」であると述べ、定型を破棄することを明言するなど、新傾向内部に定型破壊・季題無用の自由律俳句を積極的に推進する姿勢が強められた。これらの動きに対し、碧梧桐は同四年四月の『海紅』誌上に「現実味と真実味」を書き、定型を離れ散文律・短律への傾向を見せるが、同時に「俳句の自由表現を期する上に、どれ程の圧迫があるかを感じざるを得ない」（「俳道徳の破壊」『層雲』大 5.1）と慎重な姿勢を見せた<sup>34</sup>。

上掲の主張によれば、『熱』誌上に破調の句が多く見られたのは、同誌が碧梧桐派の俳誌『緑珊瑚』にその源流があることが原因でもある。そして、『緑珊瑚』は大正期になって停刊となり、復刊のめども立たずにいたものの、新派俳壇は緑珊瑚派の俳人が制していた。また、昭和末期から大正 5（1916）年までは、緑珊瑚派の全盛期と言えるほどで、台湾での発行量が 1 位の『台湾日日新報』にある俳句欄は、緑珊瑚の代表者である小林李坪が選者を務め、俳壇では新

<sup>34</sup> 平井照敏（1995）「自由律俳句運動」、尾形侑・島津忠夫・森川昭・草間時彦・大岡信編『俳文学大辞典』角川書店、p. 390。

傾向俳句や自由律の俳句が盛んに作られていたのである。ただ、『台湾日日新報』での緑珊瑚例会の情報は、大正5年までは定期的に報じられているものの、その後、不定期の掲載となり、その中心も、紫嶺（本名・根津金平）に移りつつあった。そして、紫嶺は『熱』の同人でもあり、昭和期に入っても自由律の俳句を作り続けた人物である。また、大正10（1921）年に創刊した『ゆうかり』も、その方向性をホトトギス系俳誌と明確に定めるまでは、大正期当時の自由律全盛期の風潮、もしくはその名残の影響によるものか、字余りの句が多かったのである。そして、こうした自由律は大正期の台湾俳句の特徴の一つと言え、このような作風は、以下に示すような「本島人」俳人の作品にもその特徴が見られる。

我胸にあつる聴診器を見る寒き（台南）柯雪嶼  
家鴨来て糞垂れて去る夏の日かな（布袋嘴）柯雪嶼  
海越して来る新高山の初日を拝む（澎湖）林世外  
初春風静かな朝の葉揺れ（花蓮港）林蕃花  
絹の傘をさして女麦畑に行く（台北）高海南  
午すぎの豚屋の法螺貝里うらゝ（中埔）呉鬼花  
洋人の握手久しレールに陽炎す（台北）薛浪花  
秋暑き磯辺に大蛇の死骸かな（台北）薛赤坎  
四五杯の盆栽を家族に夏足れり（大崙崁）簡無三四

前述のように、字余りや字足らずの表現が散見されるのは、当時の「自由律」の影響を受けているためである。ただ、こうした傾向は、当時の台湾の新派俳壇は緑珊瑚会など碧梧桐に縁を持つ俳人たちがほとんどであるため、「本島人」の句に限った話ではない。

なお、上掲の「本島人」俳人の句を見ると、内容に難しい技巧や象徴は用いられておらず、観察句や直観による感想句が多く、心象風景もそのまま率直に詠まれている。また、「本島人」俳人たちは、「本島人」である自分のことを述べているので、上掲最初の柯雪嶼

の句や最後の簡無三四の句のように、「我」や「家族」などの自身に関する表現が使われている。

一方、「本島人」の生活や行動を、いわば「外」から観察すると、そのまなざしは自ずと違ってくる。例えば、以下に示す2句は、「内地」（日本）から台湾に移り住む移住者としての「台湾俳人」が、「本島人」（漢民族系台湾人）の行動を観察対象とした句である。

土人ばかりの乗合わせにて汽車寒き私の制服（台北）不再鳴  
元日の区長役場で土人が名刺を受け（台北）北星

上掲の不再鳴の句は、もはや五七五の定型が崩壊していると言えるほどに字余りの句となっている。そして、その内容を見ると、「内地人」としての「私」が「駅の乗り合わせの場」に居合わせた「本島人」を「土人」と称し、異なる存在としていることを明白に表現している。また、北星の句も「土人」が「名刺を受け」といった「外」からの視線のものである。つまり、両句とも、「台湾俳人」を自称する内地からの移住者俳人の視線によって、「土人」（本島人）と「自分」（内地人）とをはっきりと隔て、両者が異なる存在であることを明白に表現したものである。なお、本島人を「土人」と称することは、一種の蔑称であり、現在においてはもちろん許されるものではなかろう。ただ、明治～大正期までにおいては、差別用語としての扱いやその言葉のニュアンスも、俳人の間で深く論議されていなかったようである。そして、「土人」という用語をなるべく使わないように、と明確に呼び掛けられたのは、昭和8（1933）年の俳誌『ゆうかり』以降である<sup>35</sup>。なお、こうした「内・外」の視線やそれに関連した用語、そしてこれらにまつわる俳句上の諸問題については、稿をあらためて論じたいと思う。

---

<sup>35</sup> 山本孕江・藤田芳仲等（1933）「台湾句研究（16）」『ゆうかり』昭和8年2月、pp. 4-9。

## 7. おわりに

『熱』休刊の問題は、同誌「編集後記」でもしばしば言及されている。そして、以上に言及したように、俳句関係の雑事をいくつも受け持つ<sup>36</sup>中で、素濤は、ほとんど一人の手で『熱』の編集を行ったもので、その苦労やそれに費やした時間がどれほどのものであったかは想像に難くない。実際、俳誌発行において原稿を集めることは大変な苦労であり、素濤自身も「本島俳人の投稿が月々減しゆくことに於て下火になつたことを<sup>37</sup>」（『熱』24号、大正7年12月）苦々しく思い、「…南国の気分を母国の人に引きあはせたいなどの私のむほんが兎ても成功する筈がありません<sup>38</sup>」（『熱』29号、大正8年5月）と、気落ちしたような発言を残している。しかし、3年間も同誌を発行し続け、全31号を世に送り出した点は、台湾の俳句発展史において、無視できないものであろう。そして、素濤のこうした努力は、大正前期の台湾俳壇の代表として、日本（内地）を含めた世界各地に台湾俳壇の存在をアピールし、移民文学の成果を示したのである。また、10年間の在台生活を終えて帰国した俳人・木下笑風が「台湾はもふ盛夏のことゝ思ひます、不相変「熱」が続いてる事は台湾に籍を置いた私には堪へられぬ誇りでもあり、歓喜でもあります<sup>39</sup>」と述べているように、明治後期の新派俳句の黄金時代去った後においても、俳誌を発行する力がまだ台湾に残されていることを内地（日本）の俳壇に示した本誌は、その功績を評価されよう。

なお、『熱』が、明治末期の『相思樹』『緑珊瑚』や、その後続いた大正後期の『ゆうかり』『うしほ』<sup>40</sup>と異なる点は、俳句研究な

<sup>36</sup> 『熱』20号（大正7年8月）では、素濤が同時に緑珊瑚例会、雪高俳壇、熱の原稿を整理していたことが記されている。

<sup>37</sup> 諏訪素濤（1918）「余録」『熱』24号、大正7年12月、p.16。

<sup>38</sup> 諏訪素濤（1919）「編輯余録」『熱』29号、大正8年5月、p.15。

<sup>39</sup> 木下笑風（1919）「川崎俳趣」『熱』30号、大正8年6月、表紙裏。

<sup>40</sup> 大正後期には、台湾各地に、その後の俳壇興隆の機運を生み出すきっかけとなる句会が誕生したが、その中でも特筆すべきなのは、花蓮港の「大樹吟社」と台北の「ミナミ吟社」の二大句会で、「大樹吟社」は大正9（1920）年に会誌『うしほ』を、「ミナミ吟社」は大正10（1921）年に『ゆうかり』をそれぞれ刊

どを第一の目標とせず、台湾から日本への「発信」、つまり俳壇の「交流」を願ったことである。もちろん、地方色のある台湾俳句を目指した点において、これが成功しているとは言い難く、これは素濤の独力の限界かもしれない。それでも、数多くの「本島人」に発表の場を提供したことにもまた、本誌の功績を見いだすことができよう。

なお、本論で取り上げた『熱』の主催者である諏訪素濤は、昭和6（1931）年に20余年という長い台湾生活を打ち切り、故郷の広島に戻った。だが、在台中に彼が行った、俳誌や俳句集の編集、台湾俳句の研究などの精力的な行いは、台湾俳句発展史において言及しなければならない人物であることを物語っている。

以上、本発表は『熱』の内容や刊行方針、および素濤の編集理念をたどり、「本島人」の活躍やその作品の内容を簡略ながら検証したものである。なお、今後は、本文中で触れた関連テーマを含め、日本統治期における「本島人」俳句作者などを課題として、引き続き研究したいと考えるものである。

## 付記

本稿は、2015年3月14日、東呉大学で開催された「東呉大學外國語文學院 2015年語言、文學與文化校際學術研討會」における発表「諏訪素濤編俳誌『熱』とその周辺—大正前期における台湾俳壇と日本俳壇との交流をめぐって—」をもとに、大幅に加筆・修正を加えたものである。

## テキスト

諏訪素濤編（1917-1919）『熱』熱吟社、大正6～8年。国立台湾図書館所蔵

---

行した。また、「ミナミ吟社」は俳誌出版を機に句会名を「ゆうかり吟社」と変更した。なお、『ゆうかり』の成立経緯は、ゆうかり社編『ゆうかり』、『うしほ』に関しては渡辺美鳥女編『花蓮港俳句集』にある古賀山青の序を参考にした。



## 参考文献（五十音順）

### （1）歴史資料

- 小林李坪（1910）『臺灣歳時記』東京政教社、国立国会図書館東京本館所蔵
- 諏訪素濤編（1930）『追悼句集天仙果』非売品、昭和5年、国立台湾図書館所蔵
- 前臺灣省行政長官公署統計室編輯（1946）『臺灣省五十一年來統計提要』国立台湾図書館所蔵
- 台湾日日新報社（1912）『台湾日日新報』大正元年7月3日文芸欄記事、国立台湾図書館所蔵
- ゆうかり社編（1923）『ゆうかり』大正12年9月号、国立台湾大学図書館所蔵
- 渡辺美鳥女編（1939）『花蓮港俳句集』うしほ吟社刊、国立台湾図書館所蔵

### （2）参考資料

- 磯田一雄（2017）「戦後台湾俳句小史（一）戦前期台湾の国語教育と俳句・短歌—生活表現の「日本化」・「近代化」—」『成城文藝』第239号
- 尾形仵、草間時彦、島津忠夫、大岡信、森川昭編（1995）『俳文学大辞典』角川書店
- 喜安幸夫（1996）『台湾の歴史』原書房
- 島田謹二（1995）『華麗島文学志—日本詩人の台湾体験—』明治書院
- 沈美雪（2009）「『相思樹』小考—台湾最初の俳誌をめぐって—」『日本台湾学会報』第11号
- 沈美雪（2014）『明治期台湾俳句界の始原的実相—近代俳句の台湾表象』致良出版社



※2017年10月30日受領 2017年12月30日審査通過

# 「愛國之志士」蔡伯毅之塑造 —《嚶鳴集》的人物敘述—

富田哲

淡江大學日本語文學系副教授

## 摘要

本論文要探討的是日治時期台灣人蔡伯毅，他是最早期成為台灣總督府高等官的台灣人之一。在此特別要分析的是一篇名為《嚶鳴集》的手稿集成。《嚶鳴集》收錄的是蔡伯毅決定辭官赴中國的1923年左右至日治結束不久之間由他自己撰寫的，以及台灣以及中國的友人送給他的撰文、詩文等，多數談到蔡伯毅對日本統治的反感以及對中國強烈的愛國情感，也充滿對他的歌頌、讚辭。

《嚶鳴集》的敘述以「愛(中)國之志士」的蔡伯毅為基調，因此，《嚶鳴集》的各個撰文如何描述、處理他在日本統治下的經歷以及「祖國」中國，是值得討論的問題。本論文企圖釐清了解，1930、40年代，即中日關係愈來愈緊張，導致進入全面戰爭的時期，一位台灣知識分子在台灣和中國的交際界上如何被論述建構、塑造。

關鍵詞：蔡伯毅 《嚶鳴集》 日治台灣 中國 「愛國之志士」

**Portraying a ‘Patriot’ Cai Boyi: Figural narration in  
*Yingmingji***

Tomita Akira

Associate professor, Tamkang University, Taiwan

**Abstract**

Cai Boyi was one of the earliest Taiwanese who became a Senior officer in the Taiwan Governor-General’s Office during the Japanese colonial period. This paper examines the manuscript titled *Yingmingji* which includes many articles and poems written by himself or dedicated by Cai’s friends both in Taiwan and China to him. The writings were written in the period from around 1923, when he decided to resign his post in the Office and go to China, to soon after the end of the Japanese rule. The manuscript are filled with the authors’ compliments for his strong antipathy to the rule and lofty patriotic sentiment towards China.

The focus of this paper is to analyze how Cai’s career under the Japanese rule and in his ‘motherland’ China were described in those works whose basis was the image of ‘patriot’ Cai. It aims to clarify the way in which one Taiwanese intellectual was portrayed by his friends in Taiwan and China during 1930’s and 1940’s when Sino-Japan relation had been significantly deteriorated, followed by the total war between the two sides.

Keywords: Cai Boyi, *Yingmingji*, Taiwan during Japanese colonial period, China, ‘Patriot’

# 「愛国の志士」蔡伯毅の塑造 — 『嚶鳴集』の人物叙述 —

富田哲

淡江大学日本語文学系副教授

## 要旨

蔡伯毅は日本統治期台湾においてもっとも早くに台湾総督府の高等官となった台湾人の一人である。本稿がとりあげる手稿『嚶鳴集』は、蔡が総督府の職を辞して中国へおもむくことを決めた1923年前後から日本統治が終わってまもないころまでのあいだに自身が記したと思われるもの、また台湾や中国の友人がかれに贈った撰文や詩などをおさめているが、それらの多くは蔡の日本統治への反感や中国への強烈な愛国感情に対する賛辞にいろどられている。

本稿の関心は、「愛(中)国の志士」を基調とする蔡伯毅の叙述において、日本統治下および「祖国」中国での経歴がどのように描写、処理されているのかということにある。中国と日本の関係が緊張の度合いを高め、全面戦争に突入していく1930、40年代に、一人の台湾出身の知識人の人物像が、台湾および中国の交友圏においてどのように塑造されていたのかをあきらかにしたい。

キーワード：蔡伯毅 『嚶鳴集』 日本統治期台湾 中国  
「愛国の志士」

# 蔡伯毅與日治台灣以及「祖國」中國 —《嚶鳴集》的人物敘述—

富田哲

淡江大學日本語文學系副教授

## 1. 前言

日治時期全期，台灣總督府雇用的台灣人「官吏」相較日本人少得多<sup>1</sup>，據岡本真希子的研究，1931年末時的台灣人官吏僅48名，此時，包括總督府全體的官吏卻有10,000多名，可說當時的總督府官吏幾乎由日本人獨佔<sup>2</sup>。其中，層級較高的高等官台灣人的人數更是有限。其實，原則上考上「高等試驗」才有就職機會的高等官，高等試驗的難度極高，日治全期中，台灣人通過高等試驗行政科合計只有32人<sup>3</sup>，但台灣總督府首次任用台灣人及格者的是日治開始約30年後的1924年，以劉明朝及劉茂雲為首<sup>4</sup>。

但是，在此之前已出現3名台灣人高等官。他們的任用是依據當時日本的文官任用令第7條規定，即將「教員、技術人員以及其他需具特別技能的文官」由高等試驗委員的權衡便可任用<sup>5</sup>。該三名分別為，1920年6月就任台灣總督府商業專門學校教授的林茂生、1921年9月任台灣總督府翻譯官的蔡伯毅以及1921年9月就任台灣總督府醫學專門學校助教授(兼任中央研究所技師)的杜聰明，他們三位皆非高等試驗的及格者，在當時的台灣社會被認為是台灣人高等官嚆矢<sup>6</sup>。但是，林茂生和杜聰明，不論在學術研究或通俗歷史論述，至今均仍

---

<sup>1</sup> 大日本帝國憲法體制下的「官吏」指以「天皇大權」任免得的官員，包括「高等官」及「判任官」。

<sup>2</sup> 岡本真希子(2008)。

<sup>3</sup> 蔡慧玉(2007)。

<sup>4</sup> 吳文星(2008)。

<sup>5</sup> 〈勅令第二百六十一號〉，《官報》第302號，1913年8月1日，國史館台灣文獻館台灣總督府府(官)報資料庫。

<sup>6</sup> 〈杜氏祝賀會〉，《台灣日日新報》，1921年11月24日，台灣日日新報漢珍/ゆまに清晰電子版、漢珍數位圖書。

是被討論的熱門人物<sup>7</sup>，而蔡伯毅成話題的例子卻未多見。除了一些包括人物誌之類的介紹，的確也在某些研究曾談到他就任總督府翻譯官這個事實<sup>8</sup>，但這些不過是少數的例外，均未深入到提供他實際的工作內容以及思想等。在中央研究院台灣史研究所於2012年12月舉辦的工作坊，有一篇關於蔡伯毅的報告，這篇報告也以少有研究曾經為文討論他作為前提，介紹他的經歷等<sup>9</sup>。順便一提，《台灣史小辭典》（台北：遠流出版事業）、《台灣歷史辭典》（台北：遠流出版事業）等這些廣泛使用的辭典均未將蔡伯毅列為標題詞<sup>10</sup>。

不如其他兩位最初台灣人高等官，蔡伯毅這位人物成話題的機會不多的理由為何？最大的理由應該是他擔任高等官僅兩年後便辭官赴中國居在杭州和上海，至日治結束後的1946年才回台灣定居（但其間數次返回來過台灣），於此，蔡伯毅與其他兩位作為教育者或醫學者面對殖民地統治的林茂生和杜聰明之間，有明顯的對比。同時他的經歷和行為中，有神秘、難以理解的部分，確實不容易作出評價。

儘管如此，無疑地，他是一位走遍殖民地台灣、日本以及中國的人物，此時期適逢在殖民地台灣政治運動升溫，在中國也正值民族主義氣氛愈來愈高漲，在此背景下在殖民地台灣長大、赴日本讀書、為外務省及台灣總督府服務、也曾流轉於中國的台灣知識分子，這樣的他受到矚目也應該不足為奇。

本報告將討論一部集成叫做《嚶鳴集》，這是收錄包括台灣人、中國人在內的蔡伯毅之友人等送給他的或他的親筆撰文。其中我特別關注的是多篇寫為《嚶鳴集》的序文，有的是友人撰寫贈送給他的及他自己寫的序文，其內容包括蔡的成長過程、學經歷、人際關係、思想等。透過分析這些撰文，要釐清蔡伯毅在交際界上如何被論述建構、

<sup>7</sup> 楊玉齡(2002)。杜淑純(2011)。杜武志(2001)。李筱峰(1996)。駒込武(2003)。

<sup>8</sup> 張勝彥編(2010)。王正雄編(1998)。許雪姬(2006)。

<sup>9</sup> 在〈2012年『戰後台灣歷史的多元鑲嵌與主體創造』工作坊(三)一人脈篇〉(台北：中央研究院台灣史研究所主題計畫「戰後台灣歷史的多元鑲嵌與主體創造」、於中央研究院台灣史研究所)李毓嵐以〈周旋於中日兩國之間的知識人－蔡伯毅〉為題報告。

<sup>10</sup> 惟國家圖書館特藏組(2006)將蔡伯毅標題詞。

塑造，以了解當時台灣及中國知識分子如何描述日治台灣以及中國。

## 2. 蔡伯毅的經歷及《嚶鳴集·序、贈序》

首先要說明，至 1921 年 9 月期間蔡伯毅的經歷。在此依據的是台灣總督府公文類纂收錄的履歷表，即他於 1921 年 8 月 25 日受任台灣總督府屬(判任官)<sup>11</sup>、在警務局任職時所寫的文件之一。其實，頒布這個人事命令時，亦已內定他將兼任總督府翻譯官(高等官)，果然 9 月 22 日受任其職<sup>12</sup>。以下是其履歷表的節錄。

姓名:蔡伯毅(舊姓名:蔡國珍)  
出生年月日:1882 年 10 月 20 日<sup>13</sup>  
原籍·現址:台中州大甲郡梧棲街 367 番地  
1889 年 1 月 梧棲街漢學書房入學  
1895 年 12 月 該書房畢業  
1896 年 3 月 梧棲公學校入學  
1900 年 4 月 梧棲公學校畢業  
1901 年 6 月 受命台中縣巡查補  
1911 年 9 月 5 日 受命台中廳巡查  
1911 年 9 月 受命巡查補練習所教官補、警察官吏學術講習助手  
1913 年 4 月 30 日 依願免官  
1914 年 9 月 5 日 早稻田大學專門部政治經濟科入學  
1917 年 7 月 20 日 該大學畢業  
1917 年 10 月 上海復旦大學教授  
1918 年 1 月 廣東軍政府非常國會秘書  
1918 年 4 月 5 日 靖國軍第三軍總司令部軍事參議官兼副官

<sup>11</sup> 「總督府屬」這一職是判任官之一。

<sup>12</sup> 〈大正十年 台灣總督府公文類纂 永久(進退) 六〉，《台灣總督府檔案》(冊號 3196、文號 26，國史館台灣文獻館台灣總督府檔案。以下引用台灣總督府檔案收錄的文件時，將冊號和文號分別寫如「3196-26」等)。

<sup>13</sup> 為方便，原文以日本年號填寫的部分，在此改為西曆。以下同。



1918年9月1日 依願免官  
1918年11月4日 受命台灣總督府雇  
1919年10月30日 台灣總督府警部(同日依願免官)  
1919年11月10日 入學早稻田大學高等研究科  
1920年3月12日 受命外務省囑託  
1920年7月20日 早稻田大學研究科退學  
1921年5月31日 依願解雇外務省囑託<sup>14</sup>

自1921年8月又在總督府擔任公職，於1923年12月21日退職<sup>15</sup>。其後，他隔年與家族一同前往中國<sup>16</sup>，放棄日本國籍而取得中華民國籍，在杭州當過算命師<sup>17</sup>，也在上海的日本租界當過律師與中醫。日治結束後1947年，他回到台灣定居，在台中開業當律師，於1964年81歲過世<sup>18</sup>。

他還在台灣時或赴中國後，與台灣社會領導層之間的交流頻繁，包括黃旺成、魏清德、林獻堂、連雅堂等。其中，據《黃旺成日記》，他為台中的蔡連舫家當西席時的1921年到1923年，就是蔡伯毅前往中國之前兩年多的期間，蔡常訪問黃。黃雖然似乎對他不太信任，但仍保持與他友好關係，兩個人之間的互動相當密切。1923年10月22日蔡拜訪黃，傳達要辭職赴中國的決心時，黃亦在日記上提及此事，包括總督府由台灣日日新報編輯員魏清德勸說蔡放棄辭職的意願，但卻遭蔡拒絕<sup>19</sup>。

<sup>14</sup> 〈大正十年 台灣總督府公文類纂 永久(進退) 八〉(3210-76)。

<sup>15</sup> 〈叙任及辞令〉，《府報》第3124号，1923年12月23日。前一天的12月20日免兼任翻譯官。

<sup>16</sup> 〈蔡伯毅氏渡支 二十日の便船で〉，《台灣日日新報》，1924年3月15日。〈蔡伯毅氏〉，《台灣日日新報》，1924年3月20日。

<sup>17</sup> 1926年7月11日，曾任北洋政府國務總理的熊希齡等人在《申報》刊登「名相崑雲使者」的介紹文說，蔡「得西洋骨相精髓，發明新例甚多。每教人以修心補相，趨吉避兇之旨，皆能留待后驗。蓋其自海外歸來，閱人既多，故風監能獨出冠時也。近隱居滬市，欲籍此以相天下士，同人樂為介紹焉」。包括熊在內的24名介紹人中也有幾名給《嚶鳴集》撰文的人士（周秋光編(1996)）。

<sup>18</sup> 張勝彥(2010)。

<sup>19</sup> 《黃旺成先生日記》，中央研究院台灣史研究所台灣日記知識庫。〈判任官進退

蔡伯毅赴中國後仍偶爾回台，如林獻堂的《灌園先生日記》所記載<sup>20</sup>，蔡也數次訪問林，包括向林請求經濟援助（1932年10月28日、30日）、給林等說明中國情勢（1939年6月27日）。1947年林擔任彰化商業銀行董事長，1948年該行決定提出土地糾紛訴訟時也委託蔡擔任律師（1948年7月29日）。順便一提，霧峰林家林資鏗（季商）的四女林雙意是蔡伯毅長子蔡漢基的妻子。

赴中國後不久的1925年1月，蔡伯毅在從杭州寫給連雅堂的信中高讚連以及他出刊的《台灣詩薈》，寫到「蓋先生之文章有神有眼，能洞見我肺腑也，感喜兼極！」<sup>21</sup>又聞先生獨立提倡國粹，如此熱心，傾倒莫名！」等<sup>21</sup>。

接著將說明《嚶鳴集》。中央研究院台灣史研究所檔案館所藏的家族檔案裡有〈霧峰林家文書〉，其中收錄的文書包括〈林祖密家藏稿—嚶鳴集〉，本報告中所稱的《嚶鳴集》皆是指這部。目前在中央研究院人文社會聯合圖書館有《嚶鳴集》的影本供閱覽利用。

《嚶鳴集》這個手稿並不是對外出版的，收錄的撰文和詩文大致分別為幾個部分；收錄台灣友人的獻文及獻詩的「還漢篇」，蔡伯毅在中國時中國友人等贈予的收在「神州篇」，收錄1947年回台前中國友人等獻給他的「光復篇」，也有多篇寫為《嚶鳴集》的序文，包括蔡伯毅自己撰寫的〈嚶鳴集自序〉（1929年）、〈嚶鳴集後序〉（1946年）、以〈頑鐵道人傳〉為題敘述自己半生的文章（1938年），以及蔡伯毅的喪禮時發的訃聞及他的長子為他寫的行述。這些似乎已謄寫完畢，但此外看起來像是草稿或選文者直接寫的原稿也不少。

本稿特別關注的序文分別為兩個部分：「序言」和「贈序」（以下

---

原議（大正十二年七八九月分）》（3752-89）。謝世英（2011）。台灣總督府檔案中的該文件是總督府1923年9月10日囑託魏清德及謝汝銓從事「高等警察事務」（指特務警察業務）時的，包括發給兩者的聘書草案、警務局長竹內友治郎呈給總督田健治郎的人事案以及兩者的履歷書等。竹內友治郎的上呈中特別提到，因兩者的任務都涉及「高等警察事務」中的高度機密之故，欲得免有被外界發現他們任務之虞的任何手續，例如身分查詢、職員錄上的登載等。

<sup>20</sup> 《灌園先生日記》，中央研究院台灣史研究所台灣日記知識庫。

<sup>21</sup> 鄭喜夫（1992）。

均稱序文)，前者包括由胡樸安、唐文治、蔡元培、張其淦、陳三立、章炳麟撰寫的「嚶鳴集序」以及上述由蔡伯毅撰寫的三篇。後者有李濟臣、李碩卿、陳廷植、釋印光、景定成、謝彬、李亞東、孟森、李德羣、金天羽、錢基博、何世楨、馬鶴天、楊年、杜逢一、顧實、張菊屏、秦伯未、謝英伯、陳无咎、翁輝東、趙春醪、范鳳源、錢崇威、高一涵、蔣維喬、金天翹、劉麟生、唐慶詔、吳邦珍、黃芳墅、趙銖、周蒼霖、唐文治、黃炎培、袁希洛、高燮、鄭逸梅、瞿兌之、王銓濟、方孝岳、施景琛、龍燦等 43 人的撰文，但其中，景定成及趙銖兩個人均贈兩篇序文<sup>22</sup>。他們撰寫序文的時間是 1923 年至 1950 年之間，因此個別序文內容也反映不同時代背景。

### 3. 蔡伯毅自己的描述

蔡伯毅自己撰寫的三篇中，〈嚶鳴集自序〉是於 1929 年撰寫的，還未反映 1930 年代中日戰爭爆發之前緊張情勢，亦〈嚶鳴集後序〉如開頭提示「生平事蹟已畧述於前序及自傳中」（「前序」和「自傳」分別指〈嚶鳴集自序〉及〈頑鐵道人傳〉），幾乎未涉及他的經歷，卻以中日戰爭中自己及家人陷入的困境以及自己的愛國情緒抒發為主<sup>23</sup>。

據〈頑鐵道人傳〉的記述，蔡伯毅祖父於清咸豐時被派到台灣當官<sup>24</sup>，蔡伯毅也生長於台灣，「故又稱台灣人」。1882 年出生的他，台灣割讓給日本時已非兒童時期。

年十二三邁國難所居地被攫於日人悲憤填膺輒欲效張良求倉海君為韓報仇故事其父大驚乃攜歸閩中令其讀書以修養身心卒因家產在台於十六歲時再隨父赴台不得已入日籍

<sup>22</sup> 景定成，〈贈蔡君北崙序〉、〈頑鐵道人傳後序〉。趙銖，〈讀頑鐵道人傳感言〉、〈讀蔡北崙嚶鳴集有感〉。

<sup>23</sup> 關於「頑鐵道人」之稱，他在〈頑鐵道人傳〉中說明如下。淞滬會戰爆發時，日本軍偵知他的居處，「忽數數遣使迎聘餌以厚幣誘以重職」，不過他幾次婉拒，「日人見其不可屈亦太息而去亦不之罪僅訾其頑固不化而已」。友人聽此消息讚他是「不畏強禦之鐵漢」，對此他也很高興，以後自稱「頑鐵道人」。

<sup>24</sup> 他在〈嚶鳴集自序〉寫他祖父來自福建泉州。

〈嚶鳴集自序〉中將這段時期寫為「光緒甲午我國割台灣於日本以和余年十二三感憤懷內徒志顧親在未敢自專也」，雖然兩者均表達對日本的憤怒，但後來幾年狀況的描述卻不同。〈頑鐵道人傳〉說，他告訴父親自己要赴中國以「效張良求倉海」，父親知道他的意願雖然很驚訝，但還是帶他去閩中，而 1898 年左右再回來台灣「入日籍」，但〈頑鐵道人傳〉中並無相關消息。

上述台灣總督府公文類纂收錄的履歷表內容與〈頑鐵道人傳〉的描繪似乎有不少出入。若如履歷表提示，蔡伯毅日治開始後依舊在梧棲，沒有機會赴中國，而滿 17 歲時畢業於公學校後當警察十多年，不過〈頑鐵道人傳〉等撰寫中均找不到在台灣念書以及任職警察的經驗。

但只靠公文中的履歷表、不相信〈頑鐵道人傳〉等也太冒險。履歷表填寫 1896 年 3 月他入學於梧棲公學校，其實，台灣公學校規則制定於 1898 年 8 月<sup>25</sup>，因此，難免懷疑這個記述的可信性。總督府決定在梧棲設立公學校前身之國語傳習所亦是在 1897 年 11 月，直至 1898 年 2 月才開學<sup>26</sup>，因此並不符合履歷表的梧棲公學校入學時間。也許，他們在日治開始不久選擇移居中國，1897 年 5 月 8 日住民去就決定日後再回來台灣，申請取得日本籍，但沒有上公學校，或短期上學而已。

另一方面，筆者認為很難否定履歷表上出現的當警察這個經歷。在此看到的是，進入總督府擔任警察後，從巡查補順利升上巡查的在地台灣人菁英的身影<sup>27</sup>。亦有一篇《漢文台灣日日新報》的報導，在他即將升任巡查前的 1911 年 5 月，此時掀起剪斷辮髮運動熱潮<sup>28</sup>，台中廳警務課長市來半次郎勸他的台灣人部下剪斷辮髮，對此只有他積

<sup>25</sup> 〈府令第 78 號〉，《台灣總督府報》第 349 號，1898 年 8 月 16 日。

<sup>26</sup> 〈台灣總督府公文類纂 明治三十年 乙種永久 四十六〉(190-23)。〈台灣總督府公文類纂 明治三十一年 乙種永久 五十三〉(311-14)。

<sup>27</sup> 1899 年 8 月施行之訓令第 204 號規定巡查補一職，該職是為了幫助日本人的巡查而設置的台灣人的職位。選拔巡查補額的過程相當嚴格，應徵者須先通過「學術試驗」及「體格試驗」後，還要獲街庄社長或「身分完整的人士」之保證，就職後還要在警部或巡查的指導下接受 3 個月到 6 個月的教習(〈訓令第 204 號〉，《台灣總督府報》第 553 號，1899 年 7 月 6 日。〈訓令第 208 號〉，《台灣總督府報》第 553 號，1899 年 7 月 6 日)。

<sup>28</sup> 吳文星(2008)。許時嘉(2014)。

極地回應市來的勸言。接著 6 月時，該報記事介紹他「性和順。內勤者幾十年。黽勉從事。上官每嘉其能。亦一有志之少年也」，亦報導市來再說服他們，以蔡伯毅為範本剪斷辮髮，有 20 多人響應剪斷辮髮<sup>29</sup>

儘管如此，〈頑鐵道人傳〉等並未描述他到大約 30 歲前在台灣從事什麼工作，在日本統治下當警察經歷，可能在之後撰寫的自傳中刻意不提，其他友人的撰文、詩文中也未有提及，但他離開台灣赴東京後十多年間發生的事情，他自己和某些友人都樂於談論。〈頑鐵道人傳〉寫著如下幾句。

遂往日本治學弱冠父歿以暫就日聘藉祿米養親越數年母復見背  
遂棄官解籍歸祖國則欣然自慰曰曩昔雖有李陵降胡之耻今日得  
踐蘇武還漢之心幸矣

在此雖然沒具體說明「遂往日本治學」的內容，〈嚶鳴集自序〉寫「遂留日本以求學迨二十歲嚴父見背家亦中落備歷艱辛僅得畢業日本早稻田大學」。若兩篇撰文都意味他在日本讀書間的二十歲時父親過世，就與他的警察經歷之間所有矛盾，儘管如此，「遂往日本治學」或「畢業日本早稻田大學」這一事與履歷書相符，對此亦並無負面的評價<sup>30</sup>。其實，他在早稻田大學專門部念書時，接觸到來自中國的留學生及政治人物，包括黃介民、張繼等，參與中國革命運動。1915 年 10 月左右，在東京發起由中國人、朝鮮人以及台灣人組成的團體叫做新亞同盟黨，蔡伯毅也與其他台灣人彭華英一同參與。該黨的目的是從日本的支配解放朝鮮、台灣以及中國，而實現亞洲和平<sup>31</sup>。

<sup>29</sup> 〈斷髮片片〉，《漢文台灣日日新報》，1911 年 5 月 6 日，漢文台灣日日新報全文電子版，漢珍數位圖書。〈巡補斷髮〉，《漢文台灣日日新報》，1911 年 6 月 16 日。

<sup>30</sup> 當年有不乏到東京等日本本國各地受高等教育的殖民地出身者，留日中國人也不少，可說「帝都」東京成為一個東亞知識分子聚集空間。

<sup>31</sup> 紀旭峰（2012）。小野容照（2013）。小野指出，蔡入學早稻田之前已加入中國國民黨前身中國同盟會而為了參加辛亥革命赴廣州。但依據履歷表的警察退職及入學早稻田的時間，他無法加入 1912 年 8 月與統一共和黨等聯合成立國民黨的中國同盟會，甚至不可能參加辛亥革命。小野也猜測蔡與黃介民是中國同盟會以來的友人，但黃於 1924 年在〈神州篇〉的撰文寫「蔡君北嶺與余訂交於東島忽忽已

1917年畢業於早稻田以後的履歷表經歷，基本上應該與實際沒有太大的出入。於此令人有興趣的是，〈頑鐵道人傳〉中「暫就日聘藉祿米養親」、「越數年母復見背遂棄官解籍歸祖國」的部分，即對蔡伯毅而言，「日聘」不過是為了養母不得不接受的選擇，母親逝去後果然辭官赴「祖國」中國。〈嚶鳴集自序〉對此時段有更詳細的描述。

然而惓念祖國欲移家歸徙以母老因循不果歲戊午隻身返國展拜祖墓遍訪諸故舊以寄思旋聞母病即馳歸奉養而祖國之情耿耿無一日忘也既而日本總督以官為餌以禮為羅延聘再四而余堅謝不起母諭之曰余老矣衰病相尋而汝生長於斯豈不念留於斯者何莫非祖國之遺黎也汝屈身以圖升斗倘得藉手以為扶持庶幾淪棄之民有所蘇息而免於憑陵亦未始非造福之道也不得已遂就職臺灣督署暨東京外務省旋調回臺灣不知我心者以為且顯貴矣毛義捧檄本無宦情(中略)自余出仕四年有奇而老母棄養易箒時愀然諭曰兒屈志為終養計今而後可以行汝志矣兒其勉之於是泣識之不敢忘既終喪即誓墓歸國而總督慰留益力自秋徂冬書三上弗得諾乃詣督署固請曰士各有志不可相強愿從所執總督見余去志已堅猶遣其秘書長申意曰總督實知君之宏才高節欲君少留以為臺人矜式非敢奪君志也如能聽納當薦達朝廷破格超遷君其三思余則潛然曰不佞中國遺民也以割地賤俘謬蒙擢用得以奉老母終天已銜感無窮矣今心事已了勢無可留且已誓墓夫生人猶不可誑況可以辱吾母在天之靈哉語次感念遺言不禁痛哭秘書長亦為動容相對泫然乃允代達堅決之意察量放行經四月久始得所請然而余之歸也豈有奢望於吾國以為一身之富貴利達計哉

---

九載矣」(「北崙」是蔡伯毅在的字)，因此筆者認為，他們認識的並不在中國同盟會，而在新亞同盟會。另，《嚶鳴集》收錄的他長子撰的行述寫道「二十八歲再入東京早稻田大學習法律、時值革命事起、因與張溥泉先生善、加入中國同盟會」(底線由筆者所加)。張繼(溥泉)1905年確實加入在日本由孫文等成立的中國革命同盟會，但1908年離開日本，再次來日是1913年，因此也不免懷疑(東亞問題調查會(1941)。川上哲正(1996))。

他說「戊午」年(1918年)單身赴中國「展拜祖墓遍訪諸故舊以寄思」，與履歷表大致相符<sup>32</sup>，之後為照顧母親回台灣當官，不過無法杜絕對「祖國」熱情的他，違心地受總督府的聘雇。他在此所說的「日本總督」應該是田健治郎，田「以官為餌以禮為羅」，衰弱抱病的母親也期待他留在台灣，他則接受「臺灣督署暨東京外務省旋調回臺灣」。

其實，他從中國回來台灣後的經歷比〈嚶鳴集自序〉內容更複雜，即先於1918年11月以總督府雇之職任職於警察本署<sup>33</sup>，甚至剛升任警部便馬上離職。更者，再次在早稻田大學當學生時，也受任外務省囑託，其薪水也相當高<sup>34</sup>。然而，他辭官後，雖然有赴中國的意願，最後卻禁不住總督府的強烈邀請，接受第三次在總督府任職擔任翻譯官的他，則成為「首位本島人(筆者按：指台灣人)警部以及首位本島人翻譯官」<sup>35</sup>。

〈嚶鳴集自序〉寫，總督府熱望從中國回來的他當官，「延聘再四」，最後他也「堅謝不起」，在此可看出總督府對他相當高的評價並不誇張，閱看總督府官方資料也可知道。蔡伯毅在1921年受任的總督府屬一職，當時有初月薪以85圓為上限的規定，他卻以月薪160圓，即以判任官的最高薪聘請。超過這個上限的任用需內閣總理大臣的批准<sup>36</sup>，因此，台灣總督田健治郎1921年8月26日向內閣總理大臣原敬特別請示這個聘請。那麼總督府為何需要以這種特別的方式聘任他？

<sup>32</sup> 孫文發起護法運動、成立廣東政府，各地出現軍事組織叫做靖國軍，1918年夏天，湖北、四川、貴州以及雲南的組織聚集而組成靖國聯軍。但是，履歷表填的「靖國軍第三軍總司令部」具體代表什麼，目前不明(葉惠芬(2007))。

<sup>33</sup> 《台灣總督府職員錄》(台北：台灣日日新報社、1919)，頁63。

<sup>34</sup> 有一篇報導，蔡伯毅受外務省囑託時，東京的報紙極力稱讚「台灣籍民外交官」之他(〈蔡伯毅氏 渡支 政情に感奮して〉，《台灣日日新報》，1923年10月16日)。在其期間中，他似乎隨時向田健治郎報告台灣人留學生的動向，回台當官後似乎繼續回應總督府的期待(《田健治郎日記》，1921年1月14日、12月17日，中央研究院台灣史研究所台灣日記知識庫)。有些台灣人把他視為總督府的走狗。1922年7月2日日記中，黃旺成也懷疑蔡伯毅有可能監視林獻堂之行動。治警事件發生後的同年12月30日，他亦寫道，蔡蓮舫之養子蔡伯汾認為，因「蔡伯毅之謀畧」而導致台灣議會期成同盟會成員被大量檢舉。(《黃旺成先生日記》)。

<sup>35</sup> 劉克明(1930)。

<sup>36</sup> JACAR(亞洲歷史資料中心)Ref. A06050178500、樞密院文書·雜件·明治二十五年一月～明治三十五年十二月·樞密院秘書課(國立公文書館)。

在田的請示中指出，蔡伯毅通曉台灣及中國的狀況，最適合於「高等警察」（指特務警察）任務的人才，也附加較長的說明。其中能看出，總督府對在東京的台灣人留學生的動向相當警戒。因他們的人數已達600多人，總督府覺得詳細把握他們的言論有困難，因此總督府由外務省囑託之蔡伯毅「指導監督」台灣人留學生，以達到防止他們的「盲動」。亦指出，他曾當過警務局雇員，因此很清楚了解台灣民情，台灣人留學生也以他為前輩，尊敬他，而且他不偏不黨的態度讓留學生保持更強的敬虔<sup>37</sup>。若蔡伯毅扮演的角色如此，以總督府對台灣人的思想控制而言，他可能是一個很重要的協力者。

因此，他請辭外務省囑託後，總督府強力邀他當官。蔡伯毅辭官後，本來並未打算回台，而要赴「南方孫文政府」，但總督府最後成功說服他受任總督府屬這一職。任職相關文件指出，若沒有「有相當的教育及常識、且對我政府誠實」的他，就不僅「不利於對青年學生的善導，也誤事掌握本島人的民意」。讓他選擇不去中國而回台當官，便可「節制台灣人青年無謀的野心」，在此所說的「野心」指台灣人去中國當官或到其他國家等行為。在總督府的眼裡，蔡伯毅的行為對台灣青年具有相當大的影響。總督府以破格的條件要聘他的理由在此，但他們判斷判任官最高薪還不足夠，因此另提出兼任高等官級職位的翻譯官<sup>38</sup>。

為了強調他「本無宦情」、證明「祖國之情耿耿無一日忘」，正如毛義捧檄的故事般，對母親的孝行在其中具有相當重要的關鍵因素，不僅在不情願地當官時，並且在他決定辭掉翻譯官時也是如此。但母親快過世時終於讓他離開台灣，既然如此，自覺「不佞中國遺民」的他，「心事已了勢無可留」。連總督及「秘書長」的強力慰留也均無法推翻他的決心<sup>39</sup>。他竟不顧「宏才高節」、「臺人矜式」等高度評價，這種描述足以給讀者造成他是一個富有孝心的人物，「豈有奢望於吾國

<sup>37</sup> 〈大正十年 台灣總督府公文類纂 永久(進退) 八〉(3210-76)

<sup>38</sup> 〈大正十年 台灣總督府公文類纂 永久(進退) 六〉(3196-26)

<sup>39</sup> 筆者猜測「秘書長」指總務長官，其地位僅次於總督，當時的總務長官是賀來佐賀太郎。



以為一身之富貴利達計哉」這一句也是誠心話的印象。

終於1924年3月蔡伯毅與家人得以一同前往中國，對此表述如下：

方道人之返祖國也目觀河山無恙文物斐然不禁狂喜曰斯乃天惠吾炎黃子孫者吾其終為樂民也矣曾幾何時而閩牆之禍起烽烟相望舉國洶洶自是隱迹海上出舊日所學為相士為醫者為律師為教授二十餘年如一日道人為人豪爽風雅好與高士名僧文人詞客遊家雖貧不言利行道鬻技不與人較錙銖往往突不黔者累日虎之晏如也

他的心中充滿「返祖國」的喜悅，「中國遺民」終於出現一個真正的中國人，生活雖然不富貴但可享受與「高士名僧文人詞客」交流的時光，不過也應面對中國國內的「閩牆之禍」。〈嚶鳴集自序〉也描述「運際滄桑內爭未已瞻烏爰止蹙蹙靡聘吾不為一身一家痛獨痛吾炎黃子孫輾轉於水深火熱之中不得所安耳每讀兔爰之詩不禁唏噓而歎息也」。不過，既然堅定相信自己是「炎黃子孫」，回中國就是一個愛國者的責任，對在台灣安定的生活以及高位高薪的職位並無留念。

然而，1937年中日戰爭爆發。「神州」被日本侵略，憤怒激烈，但自己卻沒有辦法參與抗戰，充滿心痒難耐的心情，如下：

民國丁丑八月十三日日人大興師來寇東南半壁盡告淪胥遍地腥羶無一片乾淨土吾軍民之死傷者不可數計滬濱一隅斷脰折脛者觸目皆是老弱啼饑孩提失所哀呼號泣之聲慘不忍聞於是道人終皇皇遇人輒歎曰嗚呼吾錦繡神州將淪左衽嗟我華胄曷不奮袂而起應知天下興亡匹夫有責當今豈果無衛大將軍霍驃騎其人以雪此奇恥大辱乎為之歎歎泣下自是毅然欲從戎報國然推薦乏人請纓無路徒與妻子困守於硝烟砲火之中慷慨悲譎忽忽如癡如夢仰天搥胸慨然曰蒼蒼者果將亡吾中國乎吾中國果亡吾不能一死以報又將何處覓首陽山乎

此際，「日軍偵知其居處忽數數遣使迎聘餌以厚幣誘以重職」，雖然日軍好幾次力邀他協助他們，他都婉拒。友人跟蔡伯毅說「君其熟籌之與其潔身賈禍孰若虛與委蛇以苟全性命若固執必自貽伊戚也」，他回答說，「以一身與吾祖國同存亡倘國亡則家破身殉固宜」。日軍「餌以厚幣誘以重職」這種作法及蔡伯毅對此拒絕，這個對比令人容易聯想到他離開總督府翻譯官之一職時的邏輯，即日方給他提示的條件是非常好，足以令人羨慕，不過他竟以愛國熱情為由不肯接受，寧可選擇站在陷入極困難的「祖國」那一方。

值得注意的是，中日戰爭中的 1939 年他曾逗留台灣。據《灌園先生日記》，1939 年 6 月 27 日，蔡伯毅訪問林獻堂，與他、其次子林猶龍以及林家的辦事員林坤山午餐，林獻堂等聆聽蔡講的「中國事情」。因此次聚餐是事先約好的，林亦強調參加者聚餐僅是「余與猶龍、坤山四人而已」，也許與 6 月 16 日發生事情有關；當天蔡帶其三男漢光訪問林，此時「安岡特務」也來訪，有可能一位特務警察叫安岡跟著進來，他「談中國必敗，最遲至明年末而已」，也說向軍部推薦林為在南京成立的中華民國維新政府內要職<sup>40</sup>。

不管如何，撰寫〈頑鐵道人傳〉後七年，中日戰爭終於結束，在〈嚶鳴集後序〉，他高興萬分「彼兇惡之倭寇果敗績」，也堅持到底未接受日軍的邀請，到最後「能保清白無負」。

#### 4. 友人的描述

接著，想要討論蔡伯毅在台灣和中國的交際界上如何被論述建構、塑造。

首先要介紹胡樸安〈嚶鳴集序〉。這篇被置在六篇〈嚶鳴集序〉的前列，胡樸安是在易學、小學研究取得成就的學者，也曾任考試院專門委員、江蘇省民政廳長等<sup>41</sup>。文中所說的「北崙」是蔡伯毅的字。

---

<sup>40</sup> 《灌園先生日記》。

<sup>41</sup> 沈心慧(2009)。

蔡君北崙閩之泉州人清咸豐時其祖官台灣遂家焉甲午割台灣于日本北崙在髫年中輒望祖國而流涕以母在不得伸其志母歿浩然棄台灣而來祖國卜居滬上隱於相隱於醫數十年如一日以俟河水之清民國二十六年中日戰事起日人以武力佔據中國幾全國之半稔知北崙居中國久欲藉北崙以罷致中國人初以利誘之繼以威逼之北崙性情中人卒不為日人所動日人遂無可如何而罷北崙真是山川奇氣之所鍾所以其意志之堅決有如是也

胡都沒有談及蔡伯毅年經的時候當警察、在東京念書、為台灣總督府等任職這些經歷，僅說他幼年時熱望到中國，因母親還在不得離開台灣，母親過世後才得「棄台灣而來祖國」。他一直「輒望祖國」應該沒有錯，但如此論述能把一位知識分子在日治台灣和日本本國過的時間太單純化，直接連結「甲午割台灣」和「民國二十六年中日戰事」兩個「恥辱」，強調蔡伯毅一直不忘「祖國」，也堅持拒絕日方的誘惑。

胡的〈嚶鳴集序〉也包含在內，所有序文中連一篇也未提及他年經的時候當警察，也許任職於控制台灣社會的最前線之警察，在理想的「愛國之志士」論述中，很難佔適合的位置。

不過，在日本本國高等教育機構讀書以及總督府等當官的經驗，並不是必須迴避的。例如，曾經參加中國革命運動之李亞東於1926年「贈蔡北崙先生序」中撰寫如下；

彼日本者東亞之強國也固與吾同文同種而台灣既隸日本北崙生於斯長於斯幼習日文日語畢業於日本早稻田大學衣和服履木屐亦居然日人矣

曾經自己也在東京的法政大學念書的明清史學者孟森<sup>42</sup>，於1928年「贈蔡君北崙序」中也著述如下；

---

<sup>42</sup> 孟森(2006)。孟森赴東京留學的1901年，該校仍然稱和佛法律學校。

君之先籍泉州服官台灣留墾其荒遂為台灣人台灣既隸日本君鬱々不自得居台久習日文日語又入日本早稻田大學學成歸而台灣總督府任以高等行政官職終養母太夫人遂棄產內徙綜君志事可謂振奇人矣

台北大稻埕聚奎吟社社長陳廷植於1923年蔡伯毅離開台灣時贈給他的「送蔡北崙先生歸國序」中也撰寫如下<sup>43</sup>；

吾友北崙蔡先生素有大志遍覽群書其胸中磊落有浩然不可遏之氣常與文人學士考論古今成敗出語驚人然家非富裕斗筭之役尤不屑為其意已深遠矣每思學業未優不能成其大用難為當世起瘡痍遂挂籍東京入早稻田大學畢業後內渡投筆從戎本期作國家干城徒以高堂老母輒來返旆之書不得已回台奉養未幾應台灣督府之聘任以高官人皆以為榮而先生不色喜母歿期年誓墓致仕翩然歸祖國視駟馬高車如同草芥此其志趣豈易量哉

李亞東形容日本為「東亞之強國」及「固與吾同文同種」，在日治台灣長大的蔡，熟悉「日文日語」並不意外，「畢業於日本早稻田大學」也是一位殖民地菁英的「巡禮」里程，因此不必排擠或否定。孟森說蔡雖然「鬱々不自得居台」，但是具備「日文日語」能力的他順利入學「日本早稻田大學」，修業後任職總督府的「高等行政官職」。陳廷植對「台灣督府之聘任以高官」的描述也很有趣，說大家高度贊揚他當官，不過這不是他心甘情願地接受的職位，因此母親去世後竟放棄「駟馬高車」的環境，「翩然歸祖國」。

那他赴中國以後的敘述如何？這裡有李碩卿的「送蔡君北崙歸祖國序」，他何時撰寫這篇不明，不過此時他在基隆，也看其標題及內容，可推測大約在1923年或1924年撰寫這篇。李碩卿是活躍於日治時期的文人，在基隆設立保粹書房當教學，也是瀛社、小鳴社、大同吟社

<sup>43</sup> 王幼華(2009)。

等詩社的成員。他寫成的書籍有《東臺吟草》，這本書是以詩歌詳述花蓮、台東的狀況，包括以原住民為主題的作品<sup>44</sup>。

蔡君北崙任台灣督府高官厚祿台之人三百萬而得居是者僅三人焉可不謂稀且貴乎然君不以此自喜竟謝官以歸中華行次基津告別於予予因之而有感焉夫中華祖國也革命以還國基未定南北割據民生荒瘁而哀莫大心死凡士大夫之明哲保身者避地不遑特視吾台為安樂窠絜眷以來為寓公者吾見亦多矣而不知河山已非疇肯為祖國盡力建一策籌一謀稍伸其撥亂澄清之者乎至於我台之人居是邦者託庇大國之宇下又不知非我族類其心必異不恤呈身以效靖獻其尤甚者則狐假虎威自侮同種曾亦念及三十年前同是骨肉一家而同胞之義不以今昔殊也豈不痛哉獨君志與人異眷懷故國發憤而歸視祖逖擊楫渡江誓清中原古今人何必不相及其能為祖國努力以造福於四萬萬同胞斷可言也

蔡伯毅將赴的「中華祖國」並不是理想鄉，「革命以還國基未定南北割據民生荒瘁」，原來在台灣享受「厚祿」的蔡，也可選擇不去混亂之地，在安全的台灣「狐假虎威」冷視「祖國」。但他不忘「三十年前同是骨肉一家而同胞之義」，要毅然歸國，為「祖國」盡力，對仍然在台灣的李而言，蔡不外是一位台灣知識分子的典範。

1903年身為清朝政府留學生渡日，入學第一高等學校，也參與辛亥革命的景定成，於1928年撰的「贈蔡君北崙序」寫如下。景定成描繪蔡眼光中的上海已被西洋文物及思想侵襲，「祖國」內亂也很嚴重，此際，他決定與政治「絕緣」，似乎不得不放棄他參政貢獻中國的意願。

捨舟登岸目覩故國風物雖有令威今昔之感而歐風墨雨澎湃滄瀆曾何異犬羊腥羶之臭味南北分裂勢成閭牆又何嘗有扼外禦侮之精神此北崙之所侘傺灰心與政黨絕緣甘隱相術屢貌尋常任坎坷

---

<sup>44</sup> 林以衡(2014)。

纏身而怡然不覺其為窮士也

詩人金天羽 1930 年在「送蔡北崙先生序」中亦同樣寫當時政治情況之下，積極參政不如選擇「講誦脩習以備國用」。

國之將帥方治戈甲相尋以為亂君遂北走燕南走粵已乃托迹錢塘  
隱於相人術自稱崑雲使者欲以求天下奇士余嘗從容謂君謂定亂  
之術在乎政治絕亂之源在乎德化政治之統馭固所望於大有為之  
才德化之廣被其道不過正人心端學術人心既正學術既端祥和之  
氣溢乎宇內此不必不有為者其人國之賢士大夫相與崇德辨惑舉  
誠正脩齊治平之畧講誦脩習以備國用而為邦人師則劫運以默化  
而自銷太平之基在是矣

不少友人並不迴避中國政情非常不安定這個事實，也認為於此時蔡伯毅很難找到充分發揮自己能力的機會，不如像胡樸安在〈嚶鳴集序〉所寫「滬上隱於相隱於醫數十年如一日以俟河水之清」，但是也沒有人主張他回歸「祖國」是一個錯誤決定。反而，中國的動亂以及他「隱於相隱於醫」這些狀況<sup>45</sup>，好比同時期殖民地台灣的安定及他當「高官」享受「厚祿」的環境，儘管如此他還主動選擇前者，如此，更能夠強烈表達他選擇的正當性。正如，日本戰敗後的 1946 年，吳邦珍對此點非常清楚論述。

自國家抗戰以來國中士大夫屈身降志忘國事譬如先生所謂秦檜張邦劉豫吳三桂之流何可勝數然彼甘心附逆則亦已耳及至勝利之後昔之附逆者或又一變而側於愛國抗戰之倫彼已不以醜虜自居而人亦若忘其為醜虜此誠無耻之尤更不如秦檜張邦昌劉豫吳

---

<sup>45</sup> 對於蔡「隱於相」，高一涵在「贈蔡北崙志士序」（1928 年）寫如下；「余因知北崙之隱於相其心甚苦余更知北崙之欲藉斯術以挽救陷溺之人心其心尤苦也」。高一涵畢業於明治大學政治科，以後歷任北京大學、北京法政大學、武昌中山大學教授、監察委員、甘寧青監察使等（東亞問題調查會編（1941））。

三桂遠甚故余嘗謂先生之歸國若在日本崩潰之後或在抗戰繼續之間則卑卑甚不足道也乃獨於日本疆盛時期敝履其高官厚祿遁跡海上以度其相士醫師律師教授之生活此誠讀岳武穆文信國史傳而有得者傳中自贊曰其事奇然奇而正矣

最後，從「光復」後的序文引用對於中日戰爭以及戰勝相關的論述。其實，多數序文與蔡自己的序文都具有共同基調，即中日戰爭開始，雖然日軍力邀蔡協助他們但他都拒絕，其堅持直到日本戰敗。

丁丑歲日寇侵犯我國東南各省淪陷敵將帥稔知北崙屢遣使迎聘北崙避之若浼餌以重職亦絕不為動有時不得避則婉詞却之又至復堅拒之友人或為之危北崙不顧曰苟以義死亦復何憾及敵寇投降則驚喜若狂曰不圖今日復見漢族重與吾將南旋謁告先人之墓矣(蔣維喬〈贈蔡君北崙序〉，1946年)

蔡子北崙二十年前相識於海上時北崙方以律師兼相人自隱余贈詩家國飄零恨豈平老懷聊復睨公卿要從骨相論清濁不籍頭銜為重輕天下倘逢士知己眾中那許汝逃名將軍忍詢開宏業姑布他年道大行越六年九一八瀋陽難作又七年七七蘆溝橋抗戰開始我竭全國物力人力苦戰至八年又一月之久卒使暴日府首乞降而余飄零家國亦且十年乃又得與北崙相逢於海上則仍堅持節志而各兩鬢蒼蒼相顧之下歎歎欲絕矣(黃炎培〈送蔡子北崙歸台灣序〉，1946年)<sup>46</sup>

自歸國後或執律務或行醫業在上海淪陷期間日偽屢強之出每避而不見今日本不戢其雄長東亞爭霸世界之野心兵敗而俯首於聯合國軍威力之下無條件投降台灣復歸我中華之懷抱北崙之喜視

<sup>46</sup> 據蔣維喬〈贈蔡君北崙序〉記述，黃炎培1930年向他介紹蔡，說「蔡君志節之士籍隸台灣而不忘祖國捨夷狄之富貴而窮餓海濱此其人求諸晚近殆不數數觀也」。

我(袁希洛〈送蔡北崙先生歸台灣序〉, 1946年)<sup>47</sup>

最近國難初興江南陷敵倭人出厚幣聘道人任重職道人再三却之不肯就或譏為頑固或譽為鐵漢道人即頑鐵自命焉而遯世無旡悶窮居不損所謂可以處則處幸而美彈一震蘇聯出兵倭寇屈服禹域重光五十年淪亡之台灣一旦復歸祖國之懷抱道人喜可知也(景定成〈頑鐵道人傳後序〉, 1947年)

在此重復出現「日寇」、「暴日」、「日偽」、「倭人」等對日本或日本人的蔑稱, 其他地方也有「倭虜」、「倭寇」、「倭患」、「倭酋」、「倭」等, 有趣的是, 這些詞幾乎都在「光復」後寫的撰文中出現<sup>48</sup>。蔡自己寫的〈嚶鳴集自序〉及〈頑鐵道人傳〉中也未出現, 1947年的〈嚶鳴集後序〉中卻出現「倭患」、「倭虜」、「倭寇」。中國文人描繪中日戰爭及戰勝時, 對日本的眼光無法維持原樣, 同時, 台灣也成為原來該「復歸祖國之懷抱」或「復歸我中華之懷抱」之土地。

## 5. 代結

本論文對照《嚶鳴集》內容與在官方公文等看到的蔡伯毅經歷之間有幾點不能忽視的重大出入, 也為了探討他在中國時候的情況, 可靠的史料極少, 鑑此, 本論文的主要目的不一定釐清「史實」, 而是在一篇蔡伯毅本人很有可能負責編輯的《嚶鳴集》上, 在日治台灣後期, 亦是中國情勢緊張、中日戰爭激烈化、以及日本戰敗之際, 一位台灣菁英如何被論述建構、塑造。

筆者判斷, 蔡伯毅除了日治剛開始前後幾年以外, 確實在台灣念

<sup>47</sup> 袁希洛的〈送蔡北崙先生歸台灣序〉, 是在整個序文中唯一詳細敘述從「明永樂間」開始的台灣歷史, 也不忘強調中華民國與台灣的紐帶, 如「光復河山元年一月中華共和政府成立此後我國志士無日不思收復台灣救我台灣同胞脫離日本之奴役台灣同胞中之志亦先後作獨立運動期脫離日本而仍歸祖國者四十年中凡十餘次北崙亦其中之一也」。

<sup>48</sup> 唯一的例外是, 景定成〈贈蔡君北崙序〉(1928年)中的「初迫於慈母之命勉効毛義降志辱身未却倭聘繼遭母喪大事已了」。



書及當警察，不過，這個事情在《嚶鳴集》中完全看不到。不僅本論討論的序文，同時其他詩文等均如此，也許這個時段的經歷被蔡本人及他友人認為不宜加入「愛國之志士」的故事<sup>49</sup>。不過，在日本本國高等教育機構讀書，以及在台灣總督府等當官的經驗卻常出現於撰文，起碼對於中日戰爭前的描述中不少友人積極提及這些，甚至給予高度評價。但官職並非由自己的本意來接受，雖然台灣總督府以優厚條件繼續邀他，生病的母親也要他留在台灣，蔡伯毅同意任職總督府。因對母親的孝心決定暫時留在台灣，但他心中一直保持赴「祖國」的熱望，母親去世後毫無留念放棄高位官職及在台安定的生活，與家人一起移居中國。雖然在中國的日子不比在台灣沒有富裕安定，他一點也沒有後悔，在混亂的社會裡，選擇不從政而「講誦脩習以備國用」。中日戰爭爆發後，日軍好幾次邀他協力共事，他卻拒絕，但最後迎接戰勝，「愛國之志士」終於得回去「復歸祖國之懷抱」的台灣。

察看整個序文以及本論沒討論的詩文作品，深刻描繪一個愛國者的形象，但讓人深以為奇的是，在此很難感覺到亞洲主義的味道或對朝鮮等其他殖民地的關心。其實，他在東京加入以從日本的支配解放朝鮮、台灣以及中國、而實現亞洲和平的新亞同盟黨。中國革命運動人士以外，也有機會接觸朝鮮人運動人士，一位在日本帝國殖民地成長的台灣人，在東京他的周邊應該充滿從東亞甚至世界各地民族運動情勢的脈絡上思考台灣問題的契機。

新亞同盟黨設立的是在1915年10月，其年初日本向袁世凱政府提出了二十一條要求，6月時，印度獨立運動人士R·B·布斯(Rash Behari Bose)秘密入境日本，會見當時在東京的孫文，以及頭山滿等日本的著名亞洲主義者<sup>50</sup>。居住住東京的蔡，如何看待這個狀況，是否積極與中國人以外的運動人士交流？以對中國的愛國情緒為基調、似乎看不到對「亞洲」的觀點的《嚶鳴集》，這代表什麼意涵？

※本論文為科技部補助專題研究計畫「蔡伯毅與日治台灣以及「祖國」

<sup>49</sup> 「愛國之志士」這一詞是蔡元培〈嚶鳴集序〉(1931年)稱蔡伯毅的。

<sup>50</sup> 中島岳志(2014)。

中國：《嚶鳴集》的人物敘述」(計畫編號: MOST103-2410-H-032-016)的部分成果。本論文初稿曾以相同題目發表於2015年9月3日台灣師範大學台灣語文學系主辦之「第九屆臺灣文化國際學術研討會」，非常感謝評論人林淇濛(向陽)教授及與會先進的高見。

### 參考文獻

[日文]

岡本真希子，2008，《植民地官僚の政治史—朝鮮・台湾總督府と帝国日本》，東京：三元社，頁736-739。

小野容照，2013，《朝鮮獨立運動と東アジア》，京都：思文閣出版，頁110-117。

川上哲正，1996，〈景梅九と辛亥革命〉，《學習院史學》34，東京：學習院大學史學會，頁145。

紀旭峰，2012，《大正期台湾人の「日本留学」研究》，東京：龍溪書舍，頁349-350。

許時嘉，2014，《明治日本の文明言説とその変容》，東京：日本經濟評論社，頁212-213。

駒込武，2003，〈台湾における『植民地的近代』を考える〉，《アジア遊學》48，東京：勉誠出版，頁4-13。

東亞問題調查會編，1941，《最新支那要人傳》，東京：朝日新聞社，頁59, 124-125。

中島岳志，2014，《アジア主義—その先の近代へ》，東京：潮出版社，頁318-319。

劉克明，1930，《台灣今古談》，台北：新高堂書店，頁139。

[中文]

孟森(楊國禎導讀)，2006，《明清史講義》(上)，台北：台灣古籍出版，頁2。

杜淑純，2011，《台灣現代醫學之父—杜聰明宗明杜聰明博士留真集》，台北：財團法人杜聰明博士獎學金基金會。

杜武志，2001，〈杜聰明博士情愛史回憶—寫在十五周年忌辰〉，《台北

- 文獻》135，台北：台北市文獻委員會，頁 201-230。
- 李筱峰，1996，《林茂生·陳炘和他們的時代》，台北：玉山社。
- 林以衡，2014，〈被觀看的族群—李碩卿的原住民書寫〉，《原住民族文獻》17，新北：原住民族委員會，頁 13。
- 國家圖書館特藏組，2006，《台灣歷史人物小傳—明清暨日據時期(修訂版)》，台北：國家圖書館，頁 710。
- 許雪姬，2006，〈日治時期台灣的通譯〉，《輔仁歷史學報》18，新北：天主教輔仁大學歷史學系，頁 1-35。
- 謝世英，2011，〈從追逐現代化到反思文化現代性：日治文人魏清德的文化認同與對台灣美術的期許〉，《藝術學研究》，中壢：中央大學藝術學研究所，頁 142。
- 周秋光編，1996，《熊希齡集》，長沙：湖南出版社，頁 1712。
- 張勝彥編，2010，《續修台中縣志 人物志》，台中：台中縣政府，頁 187-188。
- 鄭喜夫，1992，《連雅堂先生年譜》，南投：台灣省文獻委員會，頁 125。
- 沈心慧，2009，《胡樸安生平及其易學、小學研究》，台北：新文豐。
- 葉惠芬，2007，〈胡景翼與陝西靖國軍的建立〉，《國史館學術集刊》12，台北：國史館，頁 3-4。
- 蔡慧玉，2007，〈日治時期台灣行政官僚的形塑：日本帝國的文官考試制度、人才流動和殖民行政〉，《台灣史研究》14(4)，台北：中央研究院台灣史研究所，頁 5。
- 楊玉齡，2002，《一代醫人杜聰明》，台北：天下遠見。
- 吳文星，2008，《日治時期台灣的社會領導階層》，台北：五南，頁 167-169、229-232。
- 王正雄編，1998，《中縣口述歷史 第五輯 霧峰林家相關人物訪談記錄(下層篇)》，台中：台中縣立文化中心，頁 14-15。
- 王幼華，2009，〈日本帝國與殖民地台灣的文化構接—以瀛社為例〉，《台灣學研究》7，新北：國立台灣圖書館，頁 46。



※2017年10月30日受領 2017年12月30日審査通過

# 作為比較文化研究的多模式表達風格的思考 —於印刷媒體及平面媒體為主—

落合由治

淡江大學日本語文學系教授

## 要旨

在本論文中，我從比較文化研究的角度分析了表達視角的特點，重點研究了它的多樣性，並且考察了它仍然作為信息主要來源的印刷媒體（平面媒體）的特點。我選擇了一家報紙作為印刷媒體的代表，選擇了一個門戶網站作為現代平面媒體的代表，從日本，台灣，韓國，中國大陸和美國挑選了一個具有代表性的例子進行比較。

結果，日本和台灣這兩種流派成為一種類型。另外，韓國，中國大陸和美國可以被歸類為另一種類型。在報紙中，頁面的上，中，下軸，左右軸和隔室的方法作為比較的觀點出現，並且在門戶網站中，字符和視覺信息的強調方法以及隔室的方法被認為是比較有意義的。這些設計中的差異被認為表明每個多式聯運表達的特徵反映了他們各自的社會，文化和歷史特徵。

關鍵詞：比較文化研究 多模式 表達 印刷媒體 平面媒體

**A consideration of multimodal expression style as  
comparative culture research:**

**Mainly on printing, planar media**

**Ochiai Yuji**

**Professor, Tamkang University, Taiwan**

**Abstract**

In this thesis, from the perspective of comparative cultural research, I have analyzed the characteristics of the print media (planar media) which is still used as the main information source from the viewpoint of expression from the viewpoint of multimodality. I picked up a newspaper as a representative of printing media and chose a portal site as a representative of modern planar media, selected a representative example from Japan, Taiwan, South Korea, Mainland China and the United States and compared them.

As a result, in both genres Japan and Taiwan could be classified as one type. Meanwhile, Korea, Mainland China, and the United States could be classified as another type. In the newspaper, the upper, middle and lower axes of the page, the left and right axes, and the method of compartment emerged as a viewpoint of comparison, and in the portal site the method of emphasis of character and visual information and the method of compartment were recognized as meaningful in comparison. Differences in these designs are considered to indicate the characteristics of each multimodal expression reflecting their respective society, culture and historical characteristics.

Keywords: comparative cultural research, multimodal, expression,  
printing media, planar media

# 比較文化研究としてのマルチモーダル表現様式の考察 —印刷、平面メディアを中心に—

落合由治

淡江大学日本語文学科教授

## 要旨

本論文では、現在も主要な情報源として用いられる印刷メディア（平面メディア）に関して、比較文化研究の視点から事例について、そのマルチモーダル性を中心に表現面から分析し、特徴を考察した。印刷メディアの代表として新聞を取り上げ、現代の平面メディアの代表としてポータルサイトを選び、日本、台湾、韓国、中国大陸、アメリカから代表的事例をひとつ選び、比較対象をおこなった。

その結果、どちらのジャンルでも日本、台湾がひとつの類型に、また、韓国、中国大陸、アメリカが別の類型に分類できた。新聞では紙面の上中下と左右の軸、および区画の方法が比較の視点として浮かび、ポータルサイトでは文字と視覚情報の重点と区画の方法が比較において有意義と認められた。これらのデザインの違いは、それぞれの社会、文化、歴史的特性を反映した、マルチモーダル表現のそれぞれの特徴を示していると考えられる。

キーワード：比較文化研究、マルチモーダル、表現、印刷メディア、  
平面メディア

# 比較文化研究としてのマルチモーダル表現様式の考察 —印刷、平面メディアを中心に—

落合由治

淡江大学日本語文学科教授

## 1. はじめに

日本語教育や日本語学に関する現在までの基本的な研究教育内容は、「言語」表現に限定されてきた。しかし、現代社会の言語は、具体的場面であれば基本的に言語だけが単独で使われることはなく、常に他の表現を伴って用いられる。言語は具体的使用においては、常にマルチモーダルな特徴の中でその機能を果たしている。そして、それは各国、各民族、各集団の社会文化的特徴の表現でもある。それらを相互に比較考察することは、まさに異文化理解の中心的課題の一つと言えよう。

そこで、本論文では、比較文化研究の視点でマルチモーダル表現の中での言語と非言語の表現機能を明らかにするために、メディアジャンルでの印刷メディアの表現を取り上げて考察していきたい。従来、印刷メディアの知識伝達については、言語表現だけが考察されてきたが、伝達という点から見れば、マルチモーダルな表現要素なくして伝達は成り立ちえない。逆に、非言語表現を中心に上げると、伝達としての言語面での考察から遠ざかってしまう。「知識類型による伝達」という表現ジャンルとして、言語と非言語の表現を一体のものとして考察することで、主体の表現活動がより明確に浮かび上がるであろう。本発表では、現在、使用されている印刷メディアジャンルでの知識類型について、マルチモーダル分析の手法により、言語と非言語の表現の交渉を一つの表現単位としてとらえていきたい。<sup>1</sup>

---

<sup>1</sup> 表現学は言語表現に限らず、人間の表現活動や空間での行為、活動を対象にした研究を進めてきた。一例として、今和次郎は人間の生活活動と空間に注目した民俗学的考察を戦前から進めていた。今和次郎集(1971-72)『今和次郎



本論文では、現在も主要な情報源として用いられる印刷メディア（平面メディア）に関して、現在の印刷メディアの事例について、そのマルチモーダル性を中心に表現面から分析し、特徴を考察していきたい。

- (1) 近代の印刷メディアの代表として新聞がある。日、台、韓、中、米の新聞から、トップ記事の一面を事例に選び、紙面の構成、見出しの構成、言語表現の構成に注目し、マルチモーダル分析をおこない、特徴を帰納する。
- (2) 現代のインターネットでの平面メディアの代表としてポータルサイトがある。日、台、韓、中、米のポータルサイトのトップページを事例に選び、紙面の構成、見出しの構成、言語表現の構成に注目し、マルチモーダル分析をおこない、特徴を帰納する。<sup>2</sup>
- (3) 両者を比較して、印刷メディア（平面メディア）の表現上の

---

集』クレス出版を参照。現在、社会的に機能している表現ジャンルは言語と非言語が一体化したマルチモーダルな特徴を持っている。学術研究の分野よりもむしろ情報処理科学を中心にした応用的分野で注目されており、ロボット工学、情報工学、人間工学などの情報通信技術分野や印刷、デザイン等のビジネス分野、教育学で研究と応用が進められている。研究の一例として、中野宏毅, 阪本正治, 森由美(2017)「さまざまな分野で活用されるマルチモーダル・マッピング」『デジタルプラクティス』8-2pp. 135-143, 岡田昌也, 多田昌裕(2016)「実世界における学習の質と注意配布行動に関するマルチモーダル分析手法の提案」『情報処理学会論文誌』57-1pp. 379-392等参照。

<sup>2</sup> 富士通総研「サイバービジネスの基礎」によれば、「ポータル」とは、もとは玄関、入り口という意味だったが、サイバービジネスの世界では、ユーザーがインターネットを利用する際の入り口、または拠点として必ず利用する場所（ウェブ）を指す。ポータル・サイトには、ユーザー個人用のメールボックスや検索機能、チャットなどのコミュニケーション・スペースをはじめ、ニュースや株価、天気予報といった日常的情報など、インターネットを利用する上で利用頻度の高いユーティリティ的な機能やコンテンツが一個所に集まっている。ユーザーは、Eメールを確認したり、自分が興味のある分野のニュースや好きなチームの試合結果、今日の運勢などをチェックし、それから無数のWWWサイトに散らばっていく。ポータル・サイトは「ユーザーの必ず通る入り口」となり、様々なサービスを提供することでユーザーの囲い込みを行う。

<http://www.fujitsu.com/jp/group/fri/report/cyber/basic/words/portal.html> 参照。

特徴を考察し、各国の印刷メディアの比較考察をおこなう。

以上のような内容で、比較文化研究の資料として印刷メディアやインターネットサイトを利用する方途を見出していきたい。

## 2. 日、台、韓、中、米の新聞のマルチモーダル分析

以下では、事例研究の形で日、台、韓、中、米の新聞を選び、マルチモーダル分析をおこなう。<sup>3</sup>分析結果の概要は、以下のようになった。新聞データは、アメリカで世界の新聞の一面を収集している「Newseum Today」<sup>3</sup>を利用した。調査日は2017年8月20日前後の紙面である（休刊日等の関係で、日付が揃わない場合がある。）採録されている紙面は、サイトの収集に一定の基準があるかどうかわからないため、サンプルとして各国1紙を選んだ。日本の全国紙『朝日新聞』、台湾大衆紙『アップル・デイリー』、韓国経済紙『Maeil Bussiness』、中国大陸共産党機関紙『人民日報』、アメリカ『New York Times』である。分析結果を表1-1から表1-5に示した。

紙面配置について主に注目した項目は、①質的に記事と異なる要素の位置と内容、②記事本文の構成、③記事本文の区切りと配置である。表1-1『朝日新聞』の例でみると、①質の異なるテキストとして、右上端の社名に並んで、天気予報、その下にやはり本文とは別の欄として紙面紹介欄、高校野球試合予定があり、右端が特別な空間に設定されている。また、最下段に広告欄があり、その上にコラムの欄が2つある。広告は、この他、記事のスペースのあまりにも挿入されている。これらはいずれも記事本文以外の要素である。つづいて、②記事本文は、右上から中央、左下へ視線が動くように配置され、また縦線で区切って記事をわけ、記事本文は横の段組で縦書きで配置されている。見出しは縦横に大きなポイントの活字で付けられている。③記事全体は、大きく上段、中段、下段に分かれ、

---

<sup>3</sup>紙面データは、Newseum Today's FrontPages <http://www.newseum.org/todayfrontpages/>による。

見出しの大きさに上段・右が上位であり、下段・左が下位になり、記事が優劣を付けて配置されている。

表 1-1 東アジア各国とアメリカの新聞第一面のデザイン  
朝日

国名・新聞紙名	紙面デザイン	要素配置の特徴
日本全国誌 『朝日新聞』	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">①天気予報、紙面紹介欄、高校野球試合予定</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">①社名</div> </div>  <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">①コラム</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">①広告</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">②記事本文</div> </div>	<p>①質の異なるテキストとして社名欄に並んで天気予報、紙面紹介欄、高校野球試合予定が右端、下段にコラム2つ、広告欄がある。</p> <p>②記事本文は右上から中央、左下へと横線で区切って縦書きで配置される。見出しは縦横。</p> <p>③記事は大きく上段、中段、下段に分かれ、見出しの大きさに上段・右が上位であり、下段・左が下位になり、記事が優劣を付けて配置される。</p> <p>分類：A類</p>

これと似たデザインと言えるのは、台湾で出されている大衆紙の『アップル・デイリー』である。やはり右側に特別な欄があり、社名が最も右上に来ており、その下に、広告、天気予報がある。

表 1-2 東アジア各国とアメリカの新聞第一面のデザイン  
台湾

国名・新聞紙名	紙面デザイン	要素配置の特徴
台湾大衆紙『アップル・デイリー』		<p>① 質の異なるテキストとして、広告、天気予報が右上、下端に宝くじ当選番号と名句がある。</p> <p>② 記事本文は左上から中央、右下へと横書きで縦に区切って配置されている。記事を区切る線はない。見出しは横。</p> <p>③ 見出しの位置と大きさから、右・上が上位で右・下が下位になり、記事が優劣を付けて配置される。大きく上、中、下の区切りがある。</p> <p>分類：A類</p>


また、下端に宝くじ当選番号と名句の欄が付いている。日本の新聞と同じように、右と下に特別な空間が設けられている。記事本文は、横書きであるが、縦の欄で区切られて配置され、見出しは横向きに付いている。空間の価値づけとして、日本と同じく、右・上が上位で右・下が下位になり、記事が優劣を付けて配置される。大きく上、中、下の区切りがある。日本と台湾の新聞では、空間の把握がよく

似た構成を持っていると言える。これらをA類とする。

続いて、韓国の場合であるが、以下の表1-3のように、日本、台湾と共通している部分と相違している部分が見られた。

表 1-3 東アジア各国とアメリカの新聞第一面のデザイン

韓国

国名・新聞紙名	紙面デザイン	要素配置の特徴
韓国経済紙『Maeil Business』		<p>①質の異なるテキストとして、上段に社名と広告欄、下段に広告欄がある。</p> <p>②記事本文は中央を縦横に記事の区切り線で区切り、横書きの縦区切りで配置されている。見出しは横。</p> <p>③見出しの位置と大きさから、左・上が上位で、右・下が下位になり、上、中に記事が優劣を付けて配置される。下段は広告になる。</p> <p>分類：B類</p>

共通しているのは、上と下に社名、広告を載せる特別な空間を置くことで、相違しているのは、右側に特別な価値を設けず、むしろ左側に大見出しの記事が来て、左と右に記事が大きく明確に区切られている点である。また、記事の区切り線も明確に縦横に引かれている。左上が最上位、右下が最下位という価値づけが窺える。

続いて、中国やアメリカの新聞である。

表 1-4 東アジア各国とアメリカの新聞第一面のデザイン  
中国

国名・新聞紙名	紙面デザイン	要素配置の特徴
中国大陸共産党機関紙『人民日報』		<p>① 質の異なるテキストとして、左・上に社名、右・上に政府論説、左・下と右・下にコラムがある。民間企業等の広告は見られない。</p> <p>② 記事本文が社名以外の全面を占め、上下左右を縦横の区画線で区切った中に、横書きの縦の区切りで配置している。記事の枠囲いもあり、区画が厳格に分かれている。見出しは縦横。記事と論説、コラムが連続、並列している。</p> <p>③ 見出しの位置と大きさから左・上が上位で上、中、下の大きな区切りがある。</p> <p>分類：C類</p>

B 類の韓国と似た傾向が見られるが、より区切りの意識が強く見られる。中国の紙面は、区切り線が縦横に非常に明確に入り、論説、

コラム、記事の区画が分けられている。しかし、左上や上段など目立つ位置に論説、コラムが入り、記事はそれよりも右下側の方向に置かれて、記事ではなく論説やコラムの内容を重視している様子が窺える。A類、B類ともに1面は記事が中心であったが、中国の場合は、明らかに編集意識や編集意図が異なっている。新聞の位置づけが、報道記事という事実を伝える機能よりも、政府や論説者の論説、意見、見解を伝達する機能に置かれていると考えられる。

表 1-5 東アジア各国とアメリカの新聞第一面のデザイン  
アメリカ

国名・新聞紙名	紙面デザイン	要素配置の特徴
アメリカ『New York Times』	 <p>① 社名</p> <p>① 論説</p> <p>① 紙面紹介、広告</p> <p>② 記事</p>	<p>① 質の異なるテキストとして上段に社名、下段に紙面紹介と広告欄があり、また左右端に論説記事がある。</p> <p>② ニュース記事と論説記事は混在しており、左、中央、右を縦に区画し、横書きで縦に区切って配置されている。記事の区画線が厳格で、記事の囲いもある。</p> <p>③ 見出しの位置と大きさから、左・上が上位で右・下が下位、左、中央、右と上・中・下</p>

		の大きな区切りがある。 分類：C類
--	--	----------------------

また、中国の場合は、論説、コラムと記事が輻輳する配置になっており、両者の区別が判然としていないとも言える。中国のような紙面をC類とする。これとよく似ているのは、アメリカの紙面である。アメリカの紙面は、上段に社名、下段に紙面紹介と広告欄があり、また左右端に論説記事がある。ニュース記事と論説記事が混在している点で、中国と似ている。また、左、中央、右を縦に区画し、横書きで縦に区切って配置されている。記事の区画線が厳格で、記事の囲いもある点も、中国の新聞と共通している。中国とアメリカの新聞は、左上が最上位で、上中下の段の区別があり、右下が最下位に置かれている空間の価値づけがあると言える。

以上、日、台、韓、中、米の新聞の第一面の紙面デザインを比較してみた結果、今回の事例は3タイプに分かれた。A類は日本や台湾の新聞で、上、中、下の区切りはあるが区画が厳格ではないタイプ、C類は中国大陸やアメリカの新聞で、上、中、下の区画が厳格で、囲いを用いるなど記事の区切りは明確であるが、論説と報道を明確に区別していないタイプ、B類は韓国で上、中、下の区画は厳格だが、記事の区切りは明確ではないタイプである。

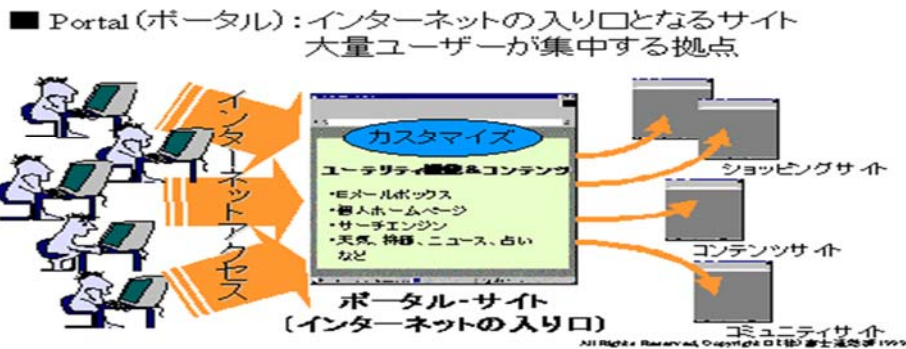
### 3. 日、台、韓、中、米のポータルサイトのマルチモーダル分析

次に、現代の代表的な平面メディアとして日、台、韓、中、米のポータルサイトを例にして、マルチモーダル分析をおこなう。ポータルサイトは、以下の図のように、各国のユーザーがインターネット利用で集中する入り口に当たる機能を持ち、以前の新聞のように、情報のゲートキーパー的機能を担っている現代を代表する平面メディアと言える。その点では、かつての新聞の第一面と同じ役割を果たしている、現代社会の情報とその構造的提示のひとつの象徴と言える。



図1 ポータルサイトの機能

## ポータルとは




(出典) 富士通総研「サイバービジネスの基礎」「ポータル」による。<sup>4</sup>

ここでは、新聞と同じく日、台、韓、中、米の代表的ポータルサイトを選び、ページのデザイン比較をおこなった。ページの配置について主に注目した項目は、①ページの全体的なカラムの区切り方、②補助カラムに載っている情報の内容、③最も目立つカラムの位置と内容である。新聞と異なって、WEB サイトの場合は、カラムで縦に区切りを入れ、そこに各要素を配置している。最も目立つカラムを主カラム、それ以外のカラムを補助カラムとする。分析例として、まず表 2-1 の日本のポータルサイト「Yahoo Japan」を取り上げる。

「Yahoo Japan」の場合、①最上部にサイト名と検索を示す、横のカラムがあり、全体は縦に3カラム区切りになっている。②左カラムはサイトの各種メニュー、求人、募金の案内である。右カラムは、広告、ログイン、天気、広告、リアルツイートのコーナーがある。③主カラムは中央カラムにあり、ニュース記事、お勧めショッピング記事、娯楽記事のコーナーがあり、最下部にリアル投稿が随時更新で掲載されている。サイトでは広告とニュースの記事が混在している。全体的に写真が少なく、文字が多い。

<sup>4</sup> 富士通総研 (2018)「サイバービジネスの基礎・用語集・「ポータル」とは」  
<http://www.fujitsu.com/jp/group/fri/report/cyber/basic/words/portal.html>  
(2017年12月1日閲覧)

表 2-1 東アジア各国とアメリカのポータルサイトのデザイン  
日本

国名・ サイト名	ページ・デザイン
日本のポータルサイト 「Yahoo Japan」 分類：I類	<p>①最上部にサイト名と検索。全体は縦に3カラム区切り。</p>  <p>②左カラムはサイトの各種メニュー、求人、募金。右カラムは、広告、ログイン、天気、広告、リアルタイムのコーナーがある。</p> <p>③中央カラムに、ニュース記事、お勧めショッピング記事、娯楽記事のコーナーがあり、最下部にリアル投稿が随時更新で掲載されている。広告とニュースの記事が混在している。写真が少ない。</p>

左カラムと中央カラムはほぼ同じ幅で、「Yahoo Japan」の場合、個人が自分のポータルサイトとしてログインして使用する左カラムに大きな空間が割り当てられ、サイトが載せている内容は皆、同じ文字の大きさで、写真も最低限の大きさであり、サイトとして利用者に何かを訴えるような強調はしていない。これを分類I類とする。続いて、台湾の場合を見ることにする。

表 2-2 東アジア各国とアメリカのポータルサイトのデザイン  
台湾

国名・ サイト名	ページ・デザイン
台湾ポータルサイト 「Yahoo 奇摩」 分類：I類	 <p>①最上部にサイト名と検索。全体は縦に3コラム区切り。                  ②左コラムはサイトの各種メニュー、広告。右コラムは、ログイン、広告、旅行広告、娯楽広告がある。                  ③中央コラムに、ニュース記事、お勧めショッピング記事、娯楽や流行のリアルタイムニュースのコーナーがあり、随時更新で掲載されている。広告とニュースの記事が混在している。</p>

台湾の Yahoo 系ポータルサイト「Yahoo 奇摩」は、日本と似た形式で、最上部にサイト名と検索欄がある上部のコラムがあり、全体は縦に3コラム区切りになっている。左コラムは日本と同じくサイト

の各種メニュー、広告。右カラムは、ログイン、広告、旅行広告、  
 娯楽広告がある。主カラムである中央カラムに、ニュース記事、お  
 勧めショッピング記事、娯楽や流行のリアルタイムニュースのコー  
 ナーがあり、随時更新で掲載されている。広告とニュースの記事が  
 混在している。写真が大きい、目立つ色遣いで中央カラムの内容選  
 択ボタンを示しているという点を除けば、全体は日本のサイトとよ  
 く似ている。広告を除けば、特に利用者に何かを訴える強調はして  
 いない。

表 2-3 東アジア各国とアメリカのポータルサイトのデザイン  
 韓国

国名・ サイト名	ページ・デザイン
韓国ポータ ルサイト 「NAVER」 分類：Ⅱ類	

	<p>①最上部にサイト名と検索。全体は縦に2カラム区切り。ブロック区切りが明確。</p> <p>②右カラムは広告、各サイトへのリンクの下に、写真入りで各種ニュースや記事がある。</p> <p>③左カラムに、ログイン、名言、ユース記事、広告、ショッピング記事が、写真入りで掲載されている。娯楽とニュースの記事が混在している。</p>
--	---

韓国のポータルサイト「NAVER」は、日本や台湾のポータルサイトと異なって、写真を中心に構成されている。最上部にサイト名と検索欄がある横カラムの下に、全体は縦に2カラム区切りで構成され、写真が目立つようにブロック区切りが明確になされている。右カラムは広告、各サイトへのリンクの下に、写真入りで各種ニュースや記事がある。左カラムに、ログイン、名言、ニュース記事、広告、ショッピング記事が、写真入りで掲載されている。日本や台湾よりもさらに、娯楽、ニュース、広告の記事が混在し、欄での区別は明確ではない。写真を中心に行っている点では、読者にその写真を使って強く働きかける意図があると考えられ、論理性よりも情緒性に働きかけようとしていると言える。これをⅡ類とする。

写真を大きく使って読者に強く働きかける意図を示している韓国と似た傾向にあるのは、中国とアメリカのサイトである。中国のポータルサイト「新浪網」は、最上部にサイト名と検索欄がある横カラムがあり、同時にサイト内の各記事の分類がメニューとして示されている。全体は縦に3カラムで区切られ、区切りの間隔が広く、ブロック区切りがかなり明確である。左カラムは車の販売コーナーと車の広告で、右カラムには各分野のニュースと論説記事が並んでいる。ニュースと論説が混在している点は新聞とよく似ている。中央カラムに、流行、娯楽、ショッピング記事が大きな写真入りで掲載されている。ニュース、論説と流行、娯楽、ショッピング記事とが区別されてはいるが、韓国と同様に、かなり大きな写真で読者に記事を目立たせるデザインをしており、論理性よりも情緒性に主に

働きかけようとしている点で韓国と同じデザインと言える。

表 2-4 東アジア各国とアメリカのポータルサイトのデザイン  
中国

国名・ サイト名	ページ・デザイン
中国大陸ポータルサイト「新浪網」 分類：Ⅱ類	
	<p>①最上部にサイト名と検索、各コーナー分類。全体は縦に 3 カラム区切り。ブロック区切りが明確。</p> <p>②左カラムは車の販売コーナーと車の広告。右カラムは各分野のニュースと論説記事。右カラムの記事は、ニュース記事と論説記事が混在している。</p> <p>③中央カラムに、流行、娯楽、ショッピング記事が大きな写真入りで掲載されている。</p>

同じく写真を重視しているポータルサイトのデザインはアメリカの場合も同じである。アメリカのポータルサイト「Yahoo」の場合、最上部の横カラムにサイト名と検索欄、同時にサイト内の各記事の

分類がメニューとして示されている。全体は縦に2カラム区切りで、間隔が広く、ブロック区切りが明確になされている。

表 2-5 東アジア各国とアメリカのポータルサイトのデザイン  
アメリカ

国名・ サイト名	ページ・デザイン
アメリカポータルサイト 「Yahoo」 II-b 類	 <p>①最上部にサイト名と検索、各コーナー分類。全体は縦に2カラム区切り。ブロック区切りが明確。</p> <p>②左カラムは動画ニュースと写真付きニュースが随時更新される。ニュースと論説記事は区別しがたい。</p> <p>③右カラムに、流行、広告、世界の天気、娯楽、ショッピング記事が写真入りで掲載されている。</p>

左カラムは最上部に大きなサイズで動画ニュースがあり、動画ニュースと写真付きニュースが随時更新されるようになっている。ニ

ニュースと論説記事は区別しがたい。かなりニュースと論説を重視した配置になっている。右カラムに、流行、広告、世界の天気、娯楽、ショッピング記事が写真入りで掲載されているが、左カラムよりかなり空間は小さく、左カラムのニュース記事と論説記事中心の配置と言える。動画、写真中心のサイトデザインは、やはり論理性よりも情緒性に主に働きかけようとしていると言える。韓国、中国、アメリカのサイトは、写真などを中心にした視覚訴求中心のデザインであり、文字の役割は補助的で、利用者の情緒性に訴えかける形で、かなり強く利用者に方向づけを与えている。

日、台、韓、中、米のポータルサイトのトップページデザインを比較してみた結果、今回の事例は大きく2タイプに分かれた。Ⅰ類は日本と台湾のサイトで、見出しは文字が中心で区切りはあるが区画が厳格ではないタイプ、Ⅱ類は韓国、中国大陸、アメリカのサイトで、各コーナーの区画が厳格で、見出しに写真と文字を用いるなど、区画が厳格なタイプである。細かく見れば、韓国と台湾は、区画は厳格で見出しは写真と文字だが、記事が細かく分かれて配置されており、中国大陸やアメリカのサイトと日本のサイトの間タイプであるとも言えるが、文字を中心にした論理的訴求と視覚を中心にした情緒的訴求の点では、日本、台湾と韓国、中国大陸、アメリカとの間に明確な差異を認めることができる。

一般に欧米や中国は論理性、理念性が強く、ロゴス的な価値観を重視しているかのように日本では見なされているが、ポータルサイトのデザインから言えば、日本、台湾は文字重視のデザインで、言語表現をサイトデザインの中心にしている点では論理的訴求に重点があり、利用者はむしろ言語表現を重視していると言える。韓国、中国、アメリカは視覚重視の写真や動画による情緒的訴求に中心を置いている点で利用者が情緒性、感情性を重視していると考えられ、ポータルサイトに関する限り、二つのグループは表現における価値基準が対照的である。



#### 4. 印刷メディアと平面メディアとの比較

今回、印刷メディアの代表として新聞を取り上げ、現代の平面メディアの代表としてポータルサイトを取り上げて、日、台、韓、中、米の各国デザインを比較した。かつて新聞は、マスメディアの代表として、情報のゲートキーパーの役割を果たし、その点で世論形成の中心的機能を担っていたが、現在ではテレビにその座を譲り、またメディアの多様化、現代化でその地位は低下しつつあると言われる。<sup>5</sup>ポータルサイトの場合はビジネスモデルとの関係が深いといえ、ポータルサイトのポジションを獲得した企業は、非常に高い視聴率を稼ぐメディアとして巨額のインターネット広告収入を手中に収めることができると言われ、かつての新聞やテレビの位置を占めるようになってきている。現在、印刷メディアの代表だった新聞の役割は、インターネットのポータルサイトに移りつつある。

さらに、比較する地域および事例数を増やしていけば、各国や地域的な特徴がより明確になるであろうが、メディア機能の変化の点も含めて、今回の今回のデータの範囲での仮説として、以下の点を挙げることができるであろう。

(1) 印刷メディアの空間管理と掲載テキストの種類（文字、写真、ジャンル）を中心にした紙面デザインに関する比較文化的考察から、今回、日本、台湾のグループと、韓国、中国大陸、アメリカのグループに分類ができた。何が理由でこうした差異が出ているかは、今後の探究の余地が大きいだが、ひとつの仮説としてその社会の自由主義と権威主義の程度、社会の安定と混乱の程度、社会の序列度、軍事度、教育程度などがもたらす、社会的価値観の存在を予想できそうである。また、その国でのメディアの歴史や資本主義的発展段階なども新聞の内容とデザインの関係から、事例研究として比較考察してみることが可能であろう。

---

<sup>5</sup> メディア機能の変化については、すでに多くの研究が出ているが、一例として、小林哲郎（2016）「マスメディアが世論形成に果たす役割とその揺らぎ（特集 世論をめぐる困難）『放送メディア研究』13pp. 105-128 参照。

(2) ポータルサイトの空間管理と掲載テキストの種類（文字、写真、ジャンル）を中心にした紙面デザインに関する比較文化的考察から、今回、印刷メディアと同じく、日本、台湾のグループと、韓国、中国大陸、アメリカのグループに分類ができた。何が理由でこうした差異が出ているかは、今後の探究の余地が大きい。ポータルサイトの場合、文字表現による言語重視か視覚表現による非言語情報重視かという軸で考えて見ると、前者が論理性を重視しているのに対し、後者は情緒、感情を重視しており、各国での情報の質に関する価値観の差異が想定できそうである。

印刷メディアと平面メディア両者の役割は、時代的差異はあっても社会的な情報をコントロールして、社会的影響力をもたらす点では同一であり、Pharmakon（ファルマコン）的存在として、社会に情報を提示することで、同時に制約し、統制する両義的な機能を持っている点も同じである。情報を知らせることで、情報を見えなくするこうした情報のゲートキーパーは、社会的共同幻想を生成する装置であり、その点で比較文化論的に興味深い価値観や文化性、精神性を読み取ることができる資料であると言えよう。

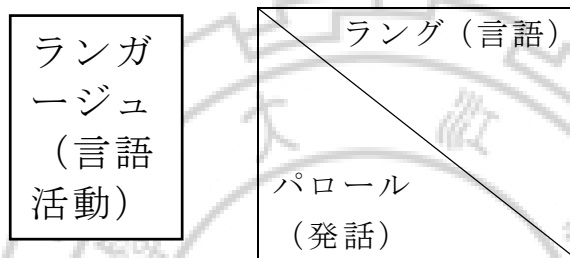
#### 4. おわりに

今回、比較文化研究の事例として、印刷メディアと平面メディアの各国比較から、紙面デザインから潜在する価値観、文化性、精神性を読み解く試みをおこなった。少数例の事例研究の形でも、仮説としてある国と国との間の共通性と差異性を示す傾向を見出すことができた。こうした事例研究は、パロールの研究としてのマルチモーダル表現の研究として、今後、さらに手法を開発していく余地が大きいと言える。

パロールの研究は、ソーシャル研究が 1950 年代からソーシャルを聴講した学生の講義録の蒐集と研究が進んだことで、少しずつ展開しているが、言語研究の分野ではまだ十分に意識化されていない領域である。ラングの言語学を樹立したバイイとセシュエ編集の『一

『一般言語学講義』とソシュールの講義の内容はかなり異なっており、ソシュールは講義の中で、以下の図で、ラングとパロールは一体であることを明示している。これは、ソシュールの言語学として知られている、小林英夫訳『一般言語学講義』には出ていない図であり、ソシュールがラングだけを言語活動の全体とは考えていなかったことを示している。

図2 ソシュール講義録でのラングとパロール



(出典) フェルディナン・ド・ソシュール (2007) 『ソシュール一般言語学講義—コンスタンタンのノート』東京大学出版会 P89 から作成。<sup>6</sup>

パロールは、言語だけではなく社会的なジャンルの中で言語表現が機能している場を伴った各表現主体の発話であり、言語表現だけでなく他の非言語表現とともに初めて機能している、社会的表現の実態である。比較文化研究の対象をこうした対象に広げていくことで、初めて、十全な言語表現の機能も明らかになると言える。パロールの研究は、現在、開発が進んでいる AI の自然言語処理能力にも密接な関係がある分野であり、異文化間理解でも必須の対象である。今まで、目を向けられていなかった表現の領域と言語研究を一体化させることで、新しい表現研究の新天地が開けると言えよう。

こうした印刷メディアや平面メディアのデザインの各国の特徴は、大学での研究発表資料や論文、図書のデザイン、また授業でのパワーポイント使用や MOOCs などでの画面資料のデザインにも大きく関わっており、大学の活動にも大きく関係している。今後とも、こう

<sup>6</sup> フェルディナン・ド・ソシュール／影浦峯、田中久美子訳 (2007) 『ソシュール一般言語学講義—コンスタンタンのノート』東京大学出版会 P89

したマルチモーダル情報の比較文化性についてさらに考察して行く必要がある。

#### (註記)

本論文は 2017 年 9 月の韓国日本語学会第 36 回国際学術発表大会での研究発表の内容に、大幅な加筆、訂正をおこなったものである。また、105 年度科技部研究案「以多様性分析的角度來看 MOOCS 授課方式的考察—展新的學習觀・教授法的應用相關內容之改善(105-2410-H-032-074-MY2)の研究成果の一部である。

#### 使用資料

① 『朝日新聞』、『アップル・デイリー』、『Maeil Bussiness』、『人民日報』、『New York Times』の一面は、Newseum Today's FrontPages <http://www.newseum.org/todaysfrontpages/>

(いずれも 2017 年 8 月 20 日前後の閲覧データ)

② ポータルサイトのデザインは、  
「Yahoo Japan」 <https://www.yahoo.co.jp/>

「Yahoo 奇摩」 <https://tw.yahoo.com/>

「NAVER」 <https://www.naver.com/>

「新浪网」 <http://www.sina.com.cn/>

「Yahoo」 <https://us.yahoo.com/>

(いずれも 2017 年 8 月 20 日前後の閲覧データ)

#### 参考文献

今和次郎(1971-72)『今和次郎集』クレス出版

岡田昌也, 多田昌裕(2016)「実世界における学習の質と注意配布行動に関するマルチモーダル分析手法の提案」『情報処理学会論文誌』57-1pp. 379-392

小林哲郎(2016)「マスメディアが世論形成に果たす役割とその揺らぎ(特集 世論をめぐる困難)『放送メディア研究』13pp. 105-128

フェルディナン・ド・ソシュール／影浦峽、田中久美子訳（2007）  
『ソシュール一般言語学講義—コンスタンタンのノート』東京大学  
出版会

中野宏毅, 阪本正治, 森由美 (2017) 「さまざまな分野で活用されるマ  
ルチモーダル・マイニング」『デジタルプラクティス』8-2pp.135-  
143

富士通総研（2018）「サイバービジネスの基礎・用語集・「ポータ  
ル」とは」

[http://www.fujitsu.com/jp/group/fri/report/cyber/basic/words  
/portal.html](http://www.fujitsu.com/jp/group/fri/report/cyber/basic/words/portal.html)（2017年12月1日閲覧）





※2017年10月30日受領 2017年12月30日審査通過

台灣初中級日語作文課程中的新嘗試  
-以 TAE 指導「自我 PR<sup>1</sup>」教學活動為例-

羅曉勤

銘傳大學應用日語學系副教授

摘要

既有的初中級的日語作文教學中，主要是以學習語彙・句型為主要的學習內容，然書寫本身也是一種溝通行為，有著其目的。故既有的日語寫作教科書似乎較少加強每個主題的溝通目的。筆者以此為出發點，希望能藉由導入 TAE 步驟式教學方法來重新檢討有關以自我分析為中心的「自我介紹」之作文教學活動；希望藉由學習單或學生的作品來分析學習者意識自我分析的過程，並從學習者的觀點來反省整個教學活動的成效。其結果顯示有 82.8% 的學習者認同此教學設計的轉變並認為在寫作過程導入 TAE 步驟式教學方法的引導有助於自我推薦文章的撰寫。

關鍵字：日語作文教育 溝通行為 自我介紹 TAE 步驟式教學 活動

---

<sup>1</sup> 自己 PR の意味。

**Attempt of writing instruction in Pre-intermediate Japanese  
writing class in Taiwan:  
Using TAE steps for A "SELF-PR" as an example**

Lo, Hsiao-chin

Associate Professor, Ming Chuan University, Taiwan

**Abstract**

In the traditional Japanese writing education, which centered on the acquisition of vocabulary and grammar are normal. But the writing Purpose is lack. In this paper, I will introduce the TAE steps to the practice, and rethink about the practice process of "self-introduction". Then, I collected the opinions about self-analysis from the learners. The results showed 82.8% of learners agree this instructional design changes and considered in the process of writing the introduction guide TAE step teaching methods also contribute to self-referral of the article.

Keywords: writing class, communication, TAE steps



# 台湾初中級日本語作文クラスにおける作文指導の再考 —「自己PR」をテーマとした授業活動へのTAE導入—

羅曉勤

銘傳大学応用日本語学科准教授

## 要旨

従来の初中級日本語作文教育は、主に語彙や文型の習得に重点を置く傾向であるように思われる。しかし、「書く」こととは、コミュニケーション行為の一つであり、書くこと自体に目的があるということ意識する必要もあろう。だが、現場での指導に際して、筆者は、従来の教科書や方法では、「書く」目的(=コミュニケーション)について、十分な指導ができていない恐れがあると感じたのである。そこで、作文の授業活動について、その目標や内容の再検討に取り組むたいと考えた次第である。本稿は、その一連の取り組みの一つとして行った、「自己PR」をテーマとした作文授業にTAEを導入した試みについて述べるものである。「自己PR」で重要なことの一つに、自己分析を行うことが挙げられるが、本稿における実践は、自己分析の方法にTAEを導入し、それにより、学習者が書くプロセスにおいて、自己PRに対する意識がどのように変化、もしくは明確化したかを調査、分析することで、作文指導へのTAE導入の可能性を検討したものである。その結果、学習者の82.8%は、再考された学習目標や内容に肯定的な評価を示し、さらにTAEステップの導入が、作文で自己PRを表すプロセスにより有益であることが示唆されたのである。

キーワード：日本語作文指導 コミュニケーション行為 自己PR  
TAE ステップ 活動

# 台湾初中級日本語作文クラスにおける作文指導の再考 —「自己PR」をテーマとした授業活動へのTAE導入—

羅曉勤

銘傳大学応用日本語学科准教授

## 1. はじめに

語学学習の最終的な目的を考えれば、言語の産出、つまり、実用性が重要な事項の一つに挙げられることは言うまでもないであろう。また、語学的な要素を教室活動に取り入れることで、学習者の言語産出の習得を目指すならば、その活動に学習者が積極的に参加することは不可欠だと考えられる。そして、言語の産出に直接に関連する教科科目として、まず思い浮かべるのは、会話や作文関連の科目であろう。筆者は、所属する大学において、こうした二つの教科科目のいずれも担当した経験を有する。ただ、そこでの学習者の反応を見ると、特に、作文の授業において、学習者の積極的な参加が欠けているという印象がある。さらに、学生らが苦手な科目として挙げるものの一つに、作文という科目が比較的に多いように見受けられる。では、こうした問題が散見される理由を考えると、まず、授業において教師が提示するテーマに対して、学習者は、何から、どのように着手して文章を書けばいいのか分からないため、苦手意識を持つようになる様子がうかがえるのである。そして、このような指導プロセスは、学習のパラダイムシフトが提唱されつつある今日においても、従来と大きく変化したとは言い難いのが実情であろう。こうした点を踏まえ、本稿は、授業のデザインや活動の再考と提案を行うべく、「書く」授業において、「書く」プロセスをいかに指導していくかを課題として取り上げ、論じるものである。

また、作文授業において懸念されるもう一つの問題に、「書くテーマ」の選別がある。一般的に、言語の産出は、何らかの目的があると考えられよう。ならば、教授側の立場から授業を検討するにおいて、「何のために書かせるか」という点は、考慮すべきものであ

ろう。そして、それを定めるにおいて一つの指標となるのが、各組織や活動にて設定された教科科目や教育(学習)の目標と言えよう。

では、高等教育におけるこうした教科科目の目標を考えるに際し、まず、高等教育やその実施機関に求められているものとは何かについて考えてみたい。やや以前の話題であるが、台湾の教育部（日本の文科省に類似）は、高等教育機関に対して、大学生の“就業力”を向上させるべく、そのカリキュラムを「就業力の養成を重視」したものに編成を改めるべきだとした上で、こうした姿勢は次の高等教育評価において重要な点となるだろうとした方針を 2006 年に示した<sup>2</sup>。こうした方針は、台湾政府の要請に基づき、劉孟奇・邱俊榮・胡均力（2006）が「就業力とは何か」について、高等教育機関の卒業生や企業の経営者や担当者を対象に行った調査報告に基づいて決定されたものであるが、その調査報告において、大学生に求められている就業力について、以下のように述べている。

根據受訪畢業生及雇主的意見、八項最重要的核心就業力技能為：良好工作態度、穩定度與抗壓性、表達與溝通能力、專業知識與技術、學習意願與可塑性、團隊合作能力、基礎電腦應用技能、發掘及解決問題能力。這八項核心就業力技能加上「外語能力」、則是受訪者認為高等教育應當優先加強養成的就業力技能。（筆者訳：卒業生および企業主の意見に基づいた、重要視される主要な就業力とは八つある。それは「良好な就業姿勢」「安定性とストレス解消能力」「表現力およびコミュニケーション力」「専門知識および技術」「学習意欲および学習力」「チームワーク」「基礎的なパソコン応用技能」「問題の発見と解決する力」で、これら八つのほかに「外国語力」が追加されれ

---

<sup>2</sup> 2006 年 8 月 17～18 日に、台湾の教育部、經濟部（日本の経産省に相当）、行政院勞工委員会（同、厚労省。現在の労働部）、行政院經濟建設委員会（同、旧經濟企画庁。現在の国家發展委員会の一部）が共同で開催した「全国青年人力資源發展會議：青年就業促進」會議で決定された事項の一つ。

ば、より望ましい)

そして、同報告は、現場の教師への助言として、「授業活動を、表現力、チームワーク、問題解決を取り入れたものにデザインを改める」「学習者の就業力養成を重視する」「授業の目標に、教授内容や就業との関係性を明確にしておく」などを示した上で、授業のデザインや活動におけるカリキュラムに、学習者が将来的に就職できると考えられる職種や業務に関連した内容を反映させるべきだ、としている。また、機関別やプログラム別に台湾の高等教育機関の評価を行う高等教育評鑑中心基金会（高等教育評価センター）は、こうした提言や方針は、今後の評価において重要なポイントになるとしている。つまり、「就業力」やその養成は、教育現場のみならず、教育機関の運営や評価といった、いわば、現場と組織の両方にかかわる課題なのである。しかも、こうした要請や方針、言い換えれば教育機関における課題は、10年以上も前に、各方面から示されており、教育を所管・評価する諸機関も、一定の方向性を示している。そして、こうした方針、要請、必要性は、今日においても変わらぬものであり、むしろ、より高まっているものとも言えよう。

なお、本稿における実践は、こうした方向性が示されたことを一つの契機として行ったもので、実施時期や関連情報などについて、やや、年月が経過したものとなっている。ただ、今日において、依然、重要視されている背景に基づいた取り組みの、そのプロセスや成果を提示することは、日本語作文授業のみならず、今日における授業の活動や現場などに、わずかながら還元できるものがあると考え、発表の意に至ったものであることをお断りしておきたい。

続いて、上述した、教育機関や現場に求められている趣旨に基づき、筆者自身が担当する教育現場や環境を見渡し、省みた点について示したい。まず、筆者が受け持つ学習者は、その多くが日本語を専門とする大学生であり、将来的に就職が可能な職種として、まず考えられるのが、日本（日系）企業や、日本と取引や関連を持つ企

業がある。そして、こうした企業で就業し、その力を発揮するためには、その前に、いわゆる就職活動が必要となる。能勢三興（2005）は、就職活動の基本は「自分」という人材を他人に分かりやすく伝えることで、そのためには、まず、自己分析をして自分の特質を明確にした上で、それを自分の言葉で分かりやすく語らなければならないが、これができる人は少なく苦戦する学生が多い、と述べている。また、就職活動において自分を他人に伝える手段の一つに履歴書が挙げられよう。ただ、筆者自身の経験において、台湾の大学を卒業した人が履歴書の作成で最も頭を抱えることの一つに「自傳(自己PR)」(以下、「自己PR」とする)という項目がある。こうした傾向は、先に示した能勢の主張でも示されており、日本でも同様の問題が散見されるようである。こうした点を踏まえ、筆者は、所属校における「作文授業」での活動において、学習者自身が、自己を的確に分析して自身の特質を明確にし、それを自分の言葉で分かりやすく語ることができるようになることをシラバスの一つとして導入することにした。

また、本稿は、作文授業における書くプロセスの指導において、社会的な要請を踏まえつつ、学習者と教師との双方の立場から、その内容を再考した授業の実践について述べるものである。具体的には、就職を念頭に置いた作文授業の指導として、「履歴書」にある「自己PR」という項目に着目し、その授業実践を省みるものである。

では、続いて、「自己PR」に関連する授業の内容や、指導における「自己PR」や自己紹介の概念、指導の内容やその方向性において再考すべき点などに述べたいと思う。

## 2. 作文教育における指導の再考テーマ「自己PR」を例として

### 2.1 教科書に見る「自己PR」関連の授業活動

ウェブ上にある台湾の主要な書店<sup>3</sup>で扱っている日本語作文の教

---

<sup>3</sup> 博客來網路書店、eslite 誠品、金石堂網路書店。

科書を検索したところ、初中級学習者向けのものとして、以下のようなものが見受けられた。

- ① 絵山千秋・王迪（2013）『日語作文（第二版）』全華図書
  - ② 門脇薫・西馬薫（2000）『大家寫作文』大新書局印（『みんなの日本語 やさしい作文』, 1999, スリーエーネットワーク）
  - ③ 目黒真実（2007）『日本語作文教室』尚昂文化印（『話して書きましよう—身近トピック 20—』）
  - ④ C&P 日本語教育・教材研究会（2005）『絵入り日本語作文入門—文型による短文作成からトピック別表現練習へ』専門教育出版
- 次に、上挙の各教科書の、授業の内容や構成がどのようなものであるか、各教科書の各課で取り上げている指導内容を整理したものを、以下の表 1 に示す。

表 1：各教科書における教授内容の構成概要

	教科書	語彙	文型	質問	文章構成	モデル文	宿題
1	日語作文（第二版）	○	○		○	○	○
2	大家寫作文	○	○	○			○
3	日本語作文教室	○	○			○	○
4	絵入り日本語作文入門	○	○	○		○	○

なお、いずれの教科書においても、本稿のテーマである「自己 PR」に関連ものとして「自己紹介」といった内容がある。また、ここで挙げた初中級向けの日本語作文教科書は、いずれも、おおむね、川口義一（2005）で紹介されている「文型作文教育」に基づいて作成されたものである。そして、これら「文型作文教育」を主眼に置いた教科書は、学習者の日本語基礎運用能力の養成に重要な役割を担っている。ただ、文型の使用に重点が置かれる傾向にあるこれらの教科書について、川口義一（2005：5）は文型が作文指導の中心となる一方で、文章やその作成におけるコミュニケーション機能やその指導が軽んじられている恐れがある、指摘している。

そこで、筆者は、自身が担当する初中級日本語作文授業における「自己PR」をテーマとした自己紹介の授業活動において、コミュニケーション機能の養成を含めて再検討することとした。では、続いて、「自己PR」について考えるに際して、その基本とも言うべき「自己紹介」とは、どのように定義されるものであるかについて、辞書的な面から検討した上で、自己紹介一つの要素である「自己PR」をテーマとした初中級の日本語作文授業における活動において、日本語の表現に加え、コミュニケーション機能の指導も導入するに当たり、何に着目したのかについて述べたいと思う。

## 2.2 辞書における「自己紹介」の意味

まず、「自己紹介」の辞書的な意味について検討したい。筆者の手元にあるいくつかの辞書で、「自己紹介」の意味を調べると、「大辞泉：初対面<sup>4</sup>の人などに自分の名前・職業・身分などを、自分で知らせること」「学研国語大辞典：初対面の人に対して、自分で自分の姓名・経歴・職業などを紹介すること」「大辞林：初めて会う人に、自分で自分の姓名・職業などを述べ告げること」と記されている。そして、上掲した各辞書のこうした内容を整理すると、以下の表2のようなものとなる。

表2：辞書から見た自己紹介の主な要件

辞書名	初対面	名前	職業	身分	経歴
大辞泉	○	○	○	○	
学研国語大辞典	○	○	○		○
大辞林	○	○	○		

上述した点から見ると、「自己紹介」の主な要件としては、「初対面」で「名前」や「職業」などを告げるといったことになろう。しかし、これらの点を言語形式で表現した場合、その内容 (=情報)

<sup>4</sup> 下線部は筆者によるもの。以下、同じ。

はいささか簡略的なもので、その量 (=文章の長さ) も比較的によくはなかろう。しかし、筆者が担当する作文授業においては、その学習目標として、与えられたテーマを言語表現するに際して、300～600字程度の文章作成能力が求められている。つまり、前述したような、辞書に記された自己紹介の主な要件のみで指導しても、それで得られる成果は目標を満たすとは考えられないのである。しかしながら、「自己PR」を含めた「自己紹介」をテーマとした作文の授業においては、そこで文章として記す要件そのものは、辞書に示されたものだけに制約されるものではなかろう。そう考えれば、一部の辞書に示されている「経歴」や「身分」とった項目を含めることや、辞書には記されていない内容を加味するなどして授業をデザインすれば、作文授業に求められている目標に、より近い成果が期待できると考えられる。こうした点を踏まえ、引き続き、初中級日本語作文の授業における「自己PR」を含めた「自己紹介」をテーマとした授業活動において、日本語表現の指導に加え、コミュニケーション機能をその指導内容に導入するに際し、どのような点に着目したかについて述べたいと思う。

### 2.3 「自己PR」といった自己紹介への再考

川口義一 (2005 : 5) は、「自己紹介」は「相手との人間関係を良好に設定・維持・強化する」といったコミュニケーション機能を持っている、としている。また、池上摩希子・大上忠幸・小川珠子 (2003 : 40) は、「自己紹介」は、本来、自分のことを第三者にアピールするものなのだ、としている。つまり、「自己紹介」とは、他人との関係を良好に設定・維持・強化するために、その人に自分のことをアピールするもの、と考えられる。こうした点を踏まえ、本稿で取り上げる授業活動においては、文型を中心とした従来の作文授業から脱すべく、他人との関係を良好に設定・維持・強化するために、自分のことを相手にアピールすることを念頭に置いた、「自己PR」をテーマとした授業に、活動の変容を試みた。



また、筆者は、従前に行った作文授業での実践において、「何のために書く（学習者側）」「何のために書かせるか（教師側）」といった点において問題を感じていたのである。そこで、「自己PR」といったテーマが「何のために」かといった点を考えるにおいて、どのような場面で「自己PR」が必要になるか、もしくは使うかについて、あらためて考えた。その結果、いくつかの場面やケースが想定されるが、その一つに、進学や就職といった場面が考えられ、これは、学習者らにとっても、必要、かつ重要なものであるということが明確にイメージされたのである。つまり、書くテーマである「自己PR」は、人との関係を設定・強化・維持するために自分を相手にアピールするといったコミュニケーション機能と、進学や就職のためといった書くことの目的とを、再確認・再認識することができたのである。そして、教師側がこうした点を適切、かつ明確につかむことで、学習者に対しても、それを示すことができ、授業活動における目標や方向性について共通した認識を持つことができよう。

本稿の授業活動である、筆者が担当する初中級日本語作文授業における「自己PR」をテーマとした指導は、上述したような過程を経て、就職や進学を念頭に置いたものとなったのである。ただ、「1.はじめに」でも述べたように、書くテーマやその方向性が示されたとしても、書き手である学習者は、書くプロセスや書く行為そのものに苦手意識を持ったり、頭を抱え悩んだりすることも少なからずある。では、そうした問題を克服するために、授業活動のデザインに際して留意した点や参考にした事項などについて、次節で述べたいと思う。

#### 2.4 「自己PR」をテーマとした作文指導に当たって

先に示した通り、本稿で扱う「自己PR」とは、人との関係を設定・強化・維持すべく相手に自分をアピールするといったコミュニケーション機能と、進学や就職を目的とした二つの面を持つものである。では、こうした「自己PR」をテーマとした授業活動をデザインする

において、どういったことに留意したかについて述べる。

「自己 PR」文の指導に関して、能勢三興（2005）は、基本は自己分析を行うことだ、と述べた上で、その方法として、過去の棚卸しから自分の特質を見いだすことを示している。つまり、「自己 PR」文の作成やその指導は、書き手である学習者に対して、過去の体験に潜んでいる自分自身への理解を深めることを求めた上で、それを言語化してもらうことが必要だと考えられよう。そして、こうした手順は、人間が日常生活の体験を通して得た「体」の内側に潜んでいるものを、ステップを踏みながら整理し、それを言葉で展開できるようにした「TAE（Thinking At the Edge）」の特徴（得丸 2008、2010）と合致していると考えられる。「TAE」とは、米国在住の哲学者でセラピストでもあるユージン・ジェンドリン博士とその夫人メアリー・ヘンドリクス博士とが共同で開発した理論構築法で、14 のステップを経て「体の感じ（フェルトセンス<sup>5</sup>）」を言語化しながら引き出していく、というものである。そして、得丸さと子（2008）は、「TAE」のこうした概念は言語教育に応用できると提唱した上で、得丸さと子（2008：5）において、「TAE」を通して、「体の感じ」に注意を向け言葉で表現していくことは内面的な成長につながり、さらに、論理的な主張が展開できるようになる、と述べるとともに、初級の短文指導から超上級のアカデミックレポート（理論構成）まで、そのいずれにおいても「TAE」のステップに沿って指導することが可能だ、としている。こうした点を踏まえ、本稿における「自己 PR」をテーマとした文章作成指導は、得丸さと子が提唱した、上述の TAE ステップ式におけるフェルトセンスとパターン<sup>6</sup>といった概念を導入することとし、得丸さと子（2008）が提案した「自己 PR」の指導法と能勢三興（2005）の定義とを参考にしてデザイン

---

<sup>5</sup> 日常生活の経験を通じて体に潜んでいる身体的な感覚であるが、まだ、言葉にはできていないもののこと（得丸さと子 2010）。

<sup>6</sup> 多くの事例や日常生活の出来事で繰り返し表されるもののこと（得丸さと子 2010）。

した。

では、続いて、本稿の実践について、具体的な内容を述べることにする。

### 3. 実践および調査について

#### 3.1 実践の対象者と調査期間

本稿の実践は、筆者が所属校において、2009 学年度前期（2009 年 9 月～10 年 1 月）に担当した「作文（一）」という授業の履修者を対象としたものである。当該授業の履修者は 31 人（再履修生 1 人を含む）で、そのほとんどが中国語を母語とした日本語を専攻する大学生で、うち 1 人は小学校のころから台湾に居住する日本人である。また、「自己 PR」をテーマとした授業、つまり実践の期間は、2009 学年度前期（2009 年 9 月～10 年 1 月）の最初の 3 週間である。

#### 3.2 「作文（一）」のカリキュラムについて

筆者が所属する大学の日本語授業では、その教材として大学が作成したオリジナルなものを使用している、また、「作文（一）」の授業開始時点における学習者の日本語既習時間は約 162 時間である。この学習時間は日本語能力試験の出題レベルにおいて N5～N4 級程度に相当するもので、この時点での学習者の日本語能力は初中級程度だとみなすのが妥当であろう。つまり、学習者は、既習の文型と語彙を使ってまとまりの文章を書く能力を、ある程度、備えているものと考えられる。

また、「作文（一）」の授業は、その目標として、書くことを通して語彙や文法の運用能力や文章コミュニケーション能力の向上を挙げている。そして、具体的な授業の内容は、原稿用紙を用いた文章の書き方やルールを指導した上で身近なテーマで作文を書くことといったものや、年賀状の書き方などがあり、本稿で取り扱う「自己紹介」も、テーマの一つとなっている。

### 3.3 実践について

#### 3.3.1 授業内容：文型中心の「自己紹介」から

##### コミュニケーション機能重視の「自己PR」へ

本稿での実践では、社会的な要請に基づいて再考した授業の目標や内容と、再考した書くプロセスの指導とについて、学習者がどのようにとらえたかの2点を把握するために、「自己PR」といった自己紹介の文章を書く段階を二つに区分した。一つは、書くプロセスを授業デザインに含めることなく、旧来の授業の内容や方法で講義した上で「自己紹介」文を作成させた、いわば文型中心のもの（以下、「紹介式」とする）で、もう一つは、社会的要請に着目してコミュニケーション機能を重視した「自己PR」文を作成するといった目標に基づき、読み手に自分のことをできるだけ理解し覚えてもらうといった目的を達成するために、いかに自己をアピールしていくかという点を学習者に意識させつつ、TAEに基づき書くプロセスを授業デザインに含めたもの（同「PR式」）である。そして、実際の授業では、最初に「紹介式」で「自己紹介」文を作成させ、その後、続いて「PR式」のステップを踏みながら「自己PR」文を作成させた。では、こうした実践の内容について、次節で述べることとする。なお、本来であれば、「紹介式」「PR式」のいずれも紹介すべきであろうが、紙幅の制約上、旧来型の「紹介式」は割愛し、「PR式」のみ紹介することを了承されたい。

#### 3.3.2 「PR式」の文章作成における具体的な実践手続き

まず、「PR式」の授業の流れであるが、おおむね、①下書き（個人作業）、②学生同士の話し合い、③教師推敲（単語・表現の確認）、④原稿書き（個人作業）、⑤学生同士の読み合い＋フィードバック、⑥原稿を修正して清書（個人作業）、⑦教師推敲（単語・表現・文章の確認）—といったものである。

次に、上掲の授業の流れに沿って、「PR式」授業での実践内容について説明する。最初の下書き作業は、過去の棚卸しから自分の特

質を見いだすといった、能勢三興（2005）の示す自己分析の概念に基づき、次の図1に示すようなタスクシートに、自分の人生における主な出来事とその幸せの度合いをグラフで表したものを、学習者自身に書かせた。

図1：タスクシートの一部（その1）

1. **個人作業**：ライフラインを書きましょう！！そして、そこに出来事を書きましょう！！できるだけ、そのときの気持ちや、出来事を簡単な言葉で書き出しましょう！！（5分）

次に、得丸さと子（2008：5）が提唱した「体の感じ」に意識を向けてそれを言葉で表現するといったTAEの主要概念に基づき、「PR式」授業では、上述したタスクシートに記した出来事の中で、自分にとって印象深かった出来事が何かや、その出来事や経験をして良かった点、今の自分やその性格などとの関連を中心に、クラスメートと話し合ってもらおう。これは、得丸さところ（2010：90）が、体に潜んでいるが漠然とした感覚でしか理解しておらず、まだ十分に言葉に（文字化）することができない状況のときに、その漠然としたものや、もやもやとしたものを、言葉の「形式の力」を借りて形にしていくことができる、とした「TAE」の特徴を、学習者同士の話し合いを通して活用しようとするものである。そして、学習者には、この話し合いを経て、自分が経験した出来事により構築された自身に内在している自分の良さを引き出すことや、そうした感覚を大切に感じながら、自分の性格を適切に表すことができる表現や言葉を、自らの思うままにタスクシートに書いてもらった。その後、先にタスクシートに記した内容の中でも、特に重要だと思う表現や語句に

二重下線でマークさせ、さらに、その中から、自身の性格や自己をPRする表現を三つ選び、それぞれの表現や語句の辞書的な意味や、辞書的な意味以外でも自分の人生経験において特別な意味がある<sup>7</sup>事柄があれば、それらをタスクシートに記入してもらおう。続いて、上述のステップを経て示された自分を、動物やモノに例えるならば、それはどんなものであるかを、マイ・センテンスとしてタスクシートに書き出してもらった。以上が、作業の最初の段階である、下書きの一連の流れである。なお、下書き作業の後半部分で用いたタスクシートを、以下に図2として示す。

図2：タスクシートの一部（その2）

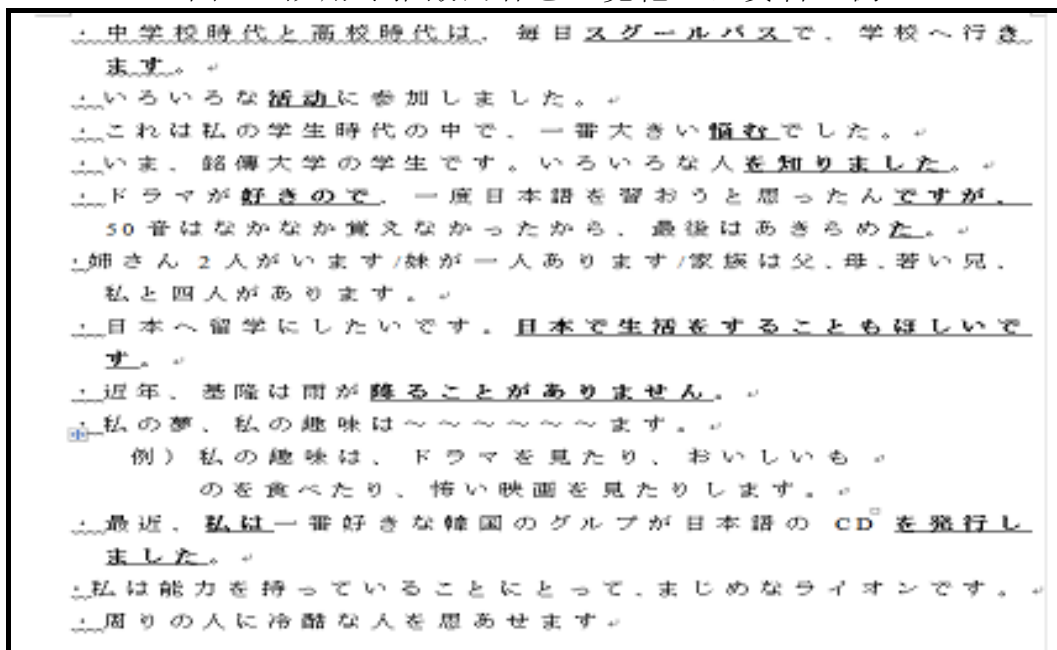
1. <u>以上の出来事から、繰り返しあなたの長所を表すことができる言葉を沢山書き出してください。</u>		
↑		
↑		
以上の言葉の中で、自分のことをよく表す言葉に二本線で引いてください。		
2. 先程、1で、二重線を引いた言葉の中から三つを選んで、以下のキーワードに書き入れてください		
キーワード1	キーワード2	キーワード3
辞書の意味：	辞書の意味：	辞書の意味：
自分の意味：	自分の意味：	自分の意味：
2以上の言葉を他のものにとえる際にどのようなものに当たりますか。		
↑		

実際の授業では、ここまでの作業で、そのコマの授業が終了となり、学習者らが記入したタスクシートは教師に提出される。そして、

<sup>7</sup> 得丸さとこ（2010：90）では、物事を文字に記すうちに、ある種のまとまりや方向性ができることを、「形式の力」「文法の力」と呼んでいるが、浮かんでくる言葉を記述するといった、このステップの前の段階では、記述したデータについて、漠然とした感覚で理解しているといった状態であるといった理由から、十分に言葉に（文字化）することができない場合がある。そのため、このステップで、「形式の力」を借り、自身の「特別な人生体験」を思い起こすことを通して、自分自身の特徴や特色を把握し、それを文字として表そうとするものである。

教師は、提出された各学習者のタスクシートに記された日本語の表現などを確認し、誤用や推敲の内容などについて整理し、以下の図3に示すような一覧化した資料を作成した。

図3：誤用や推敲内容を一覧化した資料の例



そして、次の授業では、上掲のような一覧化した資料を学習者に示し、その内容について解説する。続いて、学習者に、自分の良さなどをアピールできる経験を文章として書いてもらい、その後、その原稿を学習者間で相互に読み合って意見を出し合わせる。次いで、話し合いで出された意見を参考にして、学習者個々に自身の文章を加筆修正させ、その原稿を教師に提出させる。

さらに、その次の授業では、話し合いで出された意見に基づいて加筆修正された原稿に対して、教師が推敲作業を行ったものを各学習者に返却した上で、前回の授業と同様に、学習者が記した文章中に存在する問題点を一覧化した資料を示し、その内容を説明する。

以上が、本稿における実践のプロセスである。

### 3.3.3 実践における留意点：学習者の立場から

本稿における実践では、学習者の意見を把握するために、「紹介式」と「PR式」の二つの方法で「自己紹介（自己PR）」の文章を書き終えた時点で、①「紹介式」で書く際に誰を読み手に想定したか<sup>8</sup>、②「紹介式」の文章ではどのような内容や項目を書いたか。また、なぜ、その相手に、そのような内容・項目を伝えようと思ったのか、③「紹介式」と「PR式」のそれぞれの文章作成についての意見、④この授業全般に対する意見やアドバイスなど一について記述式アンケートを実施した。なお、アンケートの実施に際しては、学期中であることを考慮し、その内容や意見は成績に影響を及ぼさない旨を学習に伝えた上で、過剰な負担にならぬよう、①学習者が各自で適宜にダウンロードできるよう、アンケート用紙はMS-word形式のファイルとした上で学内システムに掲載した、②学習者が率直な意見を述べられるようにアンケートは無記名式とし、さらに筆跡などで個人が特定されることがないように、MS-word形式のファイルに各自で入力（記入）した上で、それをプリントアウトしたものを提出してもらおう一といった配慮のもとに行った。

## 4. 実践の分析と考察

### 4.1 アンケートの回収と分析方法

#### 4.1.1 アンケートの回収状況

本稿で取り上げた実践を省みるべく行ったアンケート調査は、実践対象者 31 人に対し 29 人分の回答が回収でき、回収率は 93.5%であった。また、回収できたアンケートには記述漏れなどはなかったことから、有効回答数は 29 人分である。

---

<sup>8</sup> 実際のアンケートの項目や回答は中国語であるが、本稿では、便宜上、筆者による日本語訳で記述する。また、本稿内で用いている表記や表現などとの統一性を保つため、アンケート項目の語句の一部を修正の上で記述した。



#### 4.1.2 アンケートの分析方法とその結果

本稿は、「書く・書かせる目的」といった観点から、「自己紹介（自己 PR）」をテーマとした作文授業で「TAE」の概念の導入を試みた授業実践を取り上げるものである。そのため、ここでは、先に示したアンケート項目のうち、③の「「紹介式」「PR式」それぞれについての意見」を中心に分析し、その結果を提示して、学習者の意見や実践の成果を検討したいと思う。では、まず、学習者が示した「PR式」「紹介式」それぞれに対する意見を、「「PR式」の方が好き（以下、「PR式支持」とする）」「どちらでもない：「PR式」（もしくは「紹介式」）の方が好きだが「もう一方」の方も嫌いではない（同、「中立」）」「「紹介式」の方が好き（同、「紹介式支持」）」の三つに分類整理したものを、以下に表 3 として示す。

表 3：アンケートの分析結果

PR 式支持	中立	紹介式支持
24 人 (82.8%)	2 人 (6.9%)	3 人 (10.3%)

続いて、「PR式支持」「中立」「紹介式支持」のそれぞれの意見の内容に着目し、類似した意見をグループ化して、そのグループにラベルを付した。では、以下において、「PR式支持」「中立」「紹介式支持」のそれぞれ評価にあった意見やその内容について提示した上で、その分析の結果やそれに基づいて行った考察について述べることとする。

#### 4.2 評価や意見の分析やその結果に基づいての考察

##### 4.2.1 「PR式支持」の主な意見

まず、「PR式支持」の学習者の主な意見とそれをカテゴリーごとに整理したものを、以下に表 4 として提示する。

表 4：「PR 式支持」の主な意見とそのカテゴリー

アンケートに書かれた意見 <sup>9</sup>	カテゴリー <sup>10</sup>
書き方がはっきりしている	書き方の指導
ステップを踏んでいるので書きやすい	
書く方向がはっきりと分かる	
書くステップがはっきりとしているので書きやすい	
ロジック性がある	
自分をモノに例える書き方は自己紹介にはいい（書きやすい）	
書いたものに深みがあると感じた	
「紹介式」と違うのは読み手に深い印象が残る点である	書く目的への意識生成
この書き方だと印象に残る	
自分の良い点をより引き出すことができた	
「紹介式」と違うところは千編一律だと感じなくなる	
「紹介式」は個性がなく、みなが同じようになるが、「PR 式」の方は自分の個性をアピールできると思う	
書いた文書には活気があって、生き生きと感じられて面白い	書くことの喜び
自分を何かに例えるようにして書くのは面白い	
本当の自分を書くことができ、「紹介式」の書き方のように縛られない	自分の良さを再確認できた
自分のいいところをモノに例え、例を挙げていくことで、自分の性格や良さを相手に知ってもらい、そして、信じてもらえるような気がした	
ピアと話す時も、より自己理解ができた	

上掲の表 4 から見ると、まず、【書き方の指導】<sup>11</sup>といった点に

<sup>9</sup> 紙幅関係上、本稿では、重複・類似した意見を整理した上で代表的な意見を紹介する。

<sup>10</sup> 類似した意見をグループ化してそれに付したラベルの名称。

<sup>11</sup> 【 】内は、カテゴリーを表す。以下、同じ。

において、TAEのステップを導入した「PR式」では、ステップを踏むという手順を経るため、あるテーマを言い渡されていきなり書き始める「紹介式」より、学習者にとって書く内容が明確になっている様子が示されている。

次に、【書く目的への意識生成】という点では、「PR式」の実践プロセスを通して《読み手に深い印象を残る》<sup>12</sup>《この（「PR式」の）書き方だと印象に残る》《自分の個性をアピールできるところがいい》など、「PR式」での実践プロセスを通して、書く目的を再確認・再認識することができたことが認められよう。また、《「紹介式」と違うところは、千編一律だと感じなくなること》《「紹介式」は個性がなく、みなが同じになるので、「PR式」の方は、自分の個性をアピールできるところがいいと思う》などの意見から、文型を重視した従来の作文教育では、提示された単語や文型、模範文などを参考しながら書くことが多いことから、結果的に、自分らしさがなくなり、みんな同じように読み取られてしまう恐れがある一方で、「PR式」の手法であれば、自分の個性や独創性をアピールしていくことの可能性を、学習者らが見いだしたことが示唆された。そして、【書くことの喜び】というカテゴリーに類する意見からは、活動全体に対して学習者らが面白さを感じた様子が読み取れ、さらに【自分の良さを再確認できた】のカテゴリーでは、《本当の自分を書くことができ、「紹介式」のように書き方に縛られずに発揮できる》という意見から、TAEを導入した本稿の教育実践について、学習者が相応の評価をしていることが分かる。また、《自分のいいところをモノに例え、例を挙げていくことで、自分の性格や良さを相手に知ってもらい、そして、信じてもらえるような気がした》《「PR式」のやり方だと、ピアと話す時も、より自己理解ができた》など、実践活動にピア・レスポンスを導入したことやその効果についての意見も見られた。

---

<sup>12</sup> 《 》内は、代表的な学習者の意見を表す。以下、同じ。

以上、こうした学習者の意見や評価から、作文授業においては、「書く・書かせる目的」やそれを明確に学習者に示し、意識させることは、とても重要なことであると思慮され、今後の作文指導においても、留意すべきなことだと言えよう。

#### 4.2.2 「中立」の主な意見

次に、「中立」的な評価を見せた学習者の意見について述べる。こうした評価をしたのは、2人の学習者（回答者全体の6.9%）であり、その内容は以下の表5のようなものである。

表5：「中立」の主な意見とそのカテゴリー

アンケートに書かれた意見	カテゴリー
「紹介式」は発揮しやすいが、「PR式」も良いと思うが、縛られているような気がして、書きにくい	書き方の指導

「中立」的な評価を示した2人の学習者の意見は、いずれも、【書き方の指導】に関連するもので、一見すると「紹介式」と「PR式」とに、さほどの違いは感じていない様子でもある。ただ、そのプロセスにステップ式を導入している「PR式」に対して《縛られているような気がして、書きにくい》といった、やや否定的な印象を持っている点は、やや、気掛かりである。そのため、この点については、次の4.2.3で示す「紹介式支持」の意見と合わせて、さらに検討したいと思う。

#### 4.2.3 「紹介式支持」の主な意見

続いて、「紹介式支持」の評価を示した学習者の意見についてである。では、「紹介式支持」の学習者が示した主な意見を整理し、以下に表6として提示する。

表 6：「紹介式支持」の主な意見とカテゴリー

アンケートに書かれた意見	カテゴリー
アウトラインに沿って書いていくので、縛られているような気がする	書き方の指導
「紹介式」は制限がないので、書きたいことが書ける	
「紹介式」の方は自由に書けるが、「PR式」の方は縛られていて、書きにくかった	
「紹介式」は自由に書ける	

「紹介式支持」の学習者は3人（回答全体の10.3%）で、その人数は先の4.2.2で示した「中立」より1人多い程度である。ただ、「PR式」に対してやや否定的な印象を抱いていると見受けられる「中立」と、「PR式」より「紹介式」の方を評価する「紹介式支持」とを合わせると、その割合は回答数全体の17.2%を占めることとなる。しかも、「中立」「紹介式支持」の意見の多くが、「PR式」の指導は《制限されている》《縛られているような感じ》といった【書き方の指導】に集中している点は注目すべきものであろう。そして、こうした点を省みるべく検討したところ、「PR式」におけるステップやそのタスクシートにおいて、自分を「モノや動物に例えるとどのようなものになるか」とする項目があり、こうした項目の設定が、不自由さや縛られた感じなどの制限や制約といった印象を学習者に与えた理由の一つではないかと考えた。これは、実践活動における反省や改善すべきヒントや方向性を示すもので、今後の同様の活動においては、こうした点に留意したいと思う。

## 5. まとめと今後の課題

先に示した表3から分かるように、本稿で取り上げた実践活動においては、「TAE」の概念を導入した「PR式」を支持する意見が、対象者全体の80%以上を占めており、こうした点から考えれば、この実践は、学習者にとって意義のある教室活動だと言えよう。また、最初に設定した「書く・書かせる目的」に対する意識の変容も、ア

ンケート調査の結果から、相応の成果を得たものとする。

一方、その程度に多少の差異はあるものの、4.2.2と4.2.3で示した通り、「PR式」の指導に否定的な意見もあった。もともと、こうした否定的な意見は、必ずしも「PR式」の指導やそれらへの変容を根本的・全面的に否定するものではないと考える余地はある。ただ、それが【書き方の指導】に集中しているという点は、決して見過ごすことができないものとする。そして、こうした点を省みるにおいて、授業やタスクシートのデザインに問題があるのではないかとの結論に至ったことは、今後の実践で留意や改善すべき点が把握できたのもでもあり、反省すべきと同時に、一つの大きな成果であったと思う。

今後は、本稿で示した以上のような結果に基づき、「PR式」指導のステップやタスクシートの内容を修正しつつ、さらに、各授業活動においてその「目的」を意識して、実践活動を継続し、微力ながら、その成果を学習者や教育現場に還元したいと考える次第である。

#### 参考文献：

1. 池上摩希子・大上忠幸・小川珠子（2003）「中高学年児童クラスにおける「書くこと」の指導・再考」『中国帰国者定着促進センター紀要』第11号, 中国帰国者定着促進センター, 31-58
2. 大塚薫・李暲洙・金才鉉(2009)「上級日本語学習者に対する遠隔日本語作文方法の構築—インターネットテレビ会議システムを利用した論理的叙述法教育を通して—」『韓国日本語文学会7回学術大会国際シンポジウム予稿集』150-153
3. 川口義一（2005）「表現教育への道程—「語る表現」はいかにして生まれたか—」『講座日本語教育』41, 早稲田大学日本語教育センター, 1-17
4. 菊池美千代・田中京子（1997）『高等学校におけるジェンダーフリーを目指した授業の試み—（3）：1年生を対象としたジェンダーフリー関連特設講座5年間の授業実践報告』お茶の水女子

大学附属高等学校

5. 金田一春彦・池田弥三郎（1990）『学研国語大辞典 第二版』学習研究社
6. 小林智芳・東原義訓（2002）「共有可能デジタルポートフォリオを媒介としたコミュニケーション活動」『教育実践紀要』第3号, 信州大学教育学部附属教育実践総合センター, 143-150
7. 下平菜穂（2005）「電子掲示板を利用した日本語学習者による通信活動報告」『信州大学留学生センター紀要』第6号, 信州大学留学生センター, 45-52
8. 得丸さと子（2008）『TAEによる文章表現ワークブック』図書文化
9. 得丸さと子（2010）『ステップ式質的研究法—TAEの理論と応用』海鳴社
10. 能勢三興（2005）「就職相談からの提言—本学の就職相談で見えてきたこと—」『彦根論叢』第355号, 滋賀大学経済経営研究科, 125-142
11. 松村明監修（1998）『大辞泉 第一版<増補・新装版>』小学館
12. 松村明編（1995）『大辞林 第二版』三省堂



※2017年10月30日受領 2017年12月30日審查通過



## 『日本論叢 36 号』編集後記

今号の内容は以下のようになっております。

論文篇では、正規の論文審査手続きによる投稿論文、研究報告で今回は審査の結果、7本中5本が掲載(掲載率71.4%)となりました。寄稿の形でのご投稿も歓迎いたします。皆様の積極的なご投稿をお待ちしております。

2017年8月から曾秋桂教授が主任となり2年目に入りました。本学科初の女性教授による主任として学内での職務を遂行するとともに、同時に台湾日本語文学会理事、台湾日語教育学会理事長としての学会活動を実施し、村上春樹研究センター主任としての活動も同時に続けています。1年目に続き、2年目も順調に系務を果たすことができたのも、学内外の諸氏のご協力、ご支援の賜物と御礼申し上げます。

本学科では、2017年11月に台湾日語教育学会の事務局校として、オープンしたばかりの守謙国際会議センターを使って、2017年度の台湾日語教育国際シンポジウムを開催し、グローバル化を目指す日本語教育について、講演、研究発表およびパネル討論をおこない、多数の参加者が集まりました。現在、台湾は深刻な少子化が進んでおり、大学への入学者急減への対策が急務になっていますが、その中心になるのが台湾の社会的ニーズに合わせた日本語教育の推進です。グローバル化は、グローバル化の流れを自文化の中で消化し、新しい文化として発信していく社会的動きで、日本語教育に求められているのはまさにその点です。日本の文化を台湾で消化し、海外に発信していく、そうした流れに寄与できれば、きっと次の時代の日本語教育世代を育てていくことができるでしょう。さらに村上春樹研究センターの活動として2018年5月に内外の研究者が集まって、村上春樹シンポジウムを開催する予定です。皆様とともに、来る年2018年もさらなる発展に向かって進んでまいりたいと希望いたしております。

主編 落合由治

2017年12月30日

# 『淡江日本論叢』徵稿章程

第 98 學期第 1 次系務會議修訂通過(98 年 9 月 4 日)

第 96 學期第 2 次系務會議通過(96 年 12 月 17 日)

- 一、一年出刊兩期（第一期 6 月 30 日出刊、第二期 12 月 31 日出刊）。
- 二、論文內容：以日本語學、日本文學、日語教育學、日本文化等與日本相關之未發表①學術論文及②教學・研究報告為限。恕不接受碩、博士論文及論文譯稿。
- 三、投稿資格：歡迎校內外研究者踴躍投稿。
- 四、論文格式：
  - 1、Word98 以上，以橫寫為限。
  - 2、使用文字：以中、日文為限。
  - 3、紙張：A4
  - 4、字體：MS Mincho，明朝粗體 14（論文名），明朝 12（本文），明朝 10（註解）。
  - 5、邊界：上 5.35 公分，下 4.35 公分，左 3.5 公分，右 3.5 公分。
  - 6、字數：30 字（橫）×30 行（縱）
  - 7、頁數：含中、英、日文摘要暨全文(包括圖、表及參考文獻、資料等)至多 25 頁。
  - 8、摘要：500 字以內之中、英、日文摘要（各摘要含論文題目、作者姓名、所屬單位。字體大小如上。中文採標楷體、英文採 Times New Roman 體、日文採明朝體）及 5 個以內之關鍵詞。
  - 9、論文標題置中，題目上，姓名中，所屬單位下。專任者不寫「專任」，兼任者要寫「兼任」。研究生要寫「碩士生」或「博士生」。
  - 10、正文章節使用阿拉伯數字 1.2.3.（下位分類為 2.1 2.2 2.3），請勿以“0”開始。
  - 11、註解採隨頁註，以 1.2.3.方式置於該頁下方。
  - 12、參考文獻：如係以日文書寫，參考文獻之排列为日（五十音順序）中（依漢字讀音順序）英（abc 順序）。如以中文書寫，參考文獻之排列为中、日、英其順序同前。專書按著者或編者名、出版年代、書名、版、出版地、出版社、頁數排列。論文按著者、出版年代、論文名、刊載書名、卷號、出版地、出版社、頁數排列。論文集亦視同專書。
  - 13、著作權同意書
- 六、審稿辦法：
  - 1、所有稿件，均須由本系及校外之專家組成審查委員會審查通過後方能刊登。
  - 2、審查意見分為三種：  
「a.可刊登」「b.修改後刊登」「c.不宜刊登」
  - 3、審稿費每人次 1000 元（共計 2000 元）由投稿者自付。第三人審稿時，由投稿者與審查委員會各負擔一半。
- 七、投稿辦法：請將符合論文格式之稿件三份、光碟片一份及個人資料表、著作授權同意書〈個人資料表以及同意書表格，自日文系網頁 <http://jpweb.jp.tku.edu.tw> 上列印〉，當年度第一期於 4 月 30 日前，第二期於 10 月 31 日前，以掛號郵寄至「251 台北縣淡水鎮英專路 151 號 淡江大學淡江日本論叢編輯委員會」。  
審稿費用 2000 元請以郵局現金袋掛號寄送。
- 八、刊登於本論叢之論文版權均屬本系、本校所有，著作權屬於作者。
- 九、審稿後之修改論文，本編輯委員會有權保留刊登權。投稿論文如因審查或作業流程延宕，不及於當期刊登，則順延至次期刊登。

# 個人資料表

投稿人姓名：

論文題目：

論文內容：日本語學 日本文學 日語教育學 日本文化

其他——日本相關（請勾選適當選項）

論文屬性：學術論文 教學・研究報告（請勾選適當選項）

投稿規定遵守誓約：本人確實遵守以下之規定事項

（請務必勾選下列選項，未勾選者恕不受理。）

本論文並非碩士論文或博士論文之一部份或是其譯稿

本論文未有重覆投稿之情形（並未在本次投稿之前或同時於其它論文雜誌、學報進行投稿，且於本學科審查結果公布之前，不會投稿於其它論文雜誌、學報。）

此論文已於\_\_\_\_\_進行口頭發表

已於論文最後註明此情形 在本學科確定刊登時務必會註明此情形

服務機構：

職稱：

聯絡電話：

傳真：

電子信箱：

通訊地址：

**請確認投稿資格與誓約、再次檢查所附資料是否齊全、**

符合論文格式之稿件三份

磁片一份

個人資料表一張

著作授權同意書一張

審稿費 2000 元台幣（或 8000 元日幣）

※查詢《日本論叢》徵稿章程。

## 著作授權同意書

論文名稱：\_\_\_\_\_ (以下稱「本論文」)

一、若本論文經 淡江日本論叢 接受刊登，作者同意非專屬授權予 淡江大學日文系 做下述利用：

1. 以紙本或是數位方式出版；
2. 進行數位化典藏、重製、透過網路公開傳輸、授權用戶下載、列印、瀏覽等資料庫銷售或提供服務之行為；
3. 再授權國家圖書館或其他資料庫業者將本論文納入資料庫中提供服務；
4. 為符合各資料庫之系統需求，並得進行格式之變更。

二、作者同意 淡江大學日文系 得依其決定，以有償或無償之方式再授權予國家圖書館或其他資料庫業者。除無償合作之狀況外，淡江大學日文系 應以本同意書所載任一連絡方式通知作者其再授權之狀況。

三、作者保證本論文為其所自行創作，有權為本同意書之各項授權。且授權著作未侵害任何第三人之智慧財產權。本同意書為非專屬授權，作者簽約對授權著作仍擁有著作權。

此致 淡江大學日文系

立同意書人(作者)名稱：

所屬機構：

職 稱：

身份證字號：

電話號碼：

電子郵件信箱：

戶籍地址：

中 華 民 國                      年                      月                      日

編集委員會

發行人 曾秋桂

主 編 落合由治

校外編集委員 林慧君 王世和 楊錦昌

校内編集委員 富田哲

執行編輯 伍耿逸

論文と教育研究報告の投稿に関する外部審査の結果、全投稿 7 本  
中、5 本が掲載された。今号の掲載率は 71.4% である。

## 淡江日本論叢第 36 輯

---

出版者：淡江大學日本語文學系

地 址：25137 台北縣淡水鎮英專路 151 號

淡江大學日本語文學系内

『淡江日本論叢』編集委員會

發行人：曾秋桂

傳 真：(+886) 02-2620-9915

印刷所：大新書局

地 址：台北市瑞安街 256 巷 16 號

電 話：02-2703-9639

網 站：<http://jpweb.jp.tku.edu.tw/>

---

出版日：2017 年 12 月 30 日

---